

前津中ノ玉遺跡Ⅱ

福岡県筑後市大字前津所在遺跡の調査

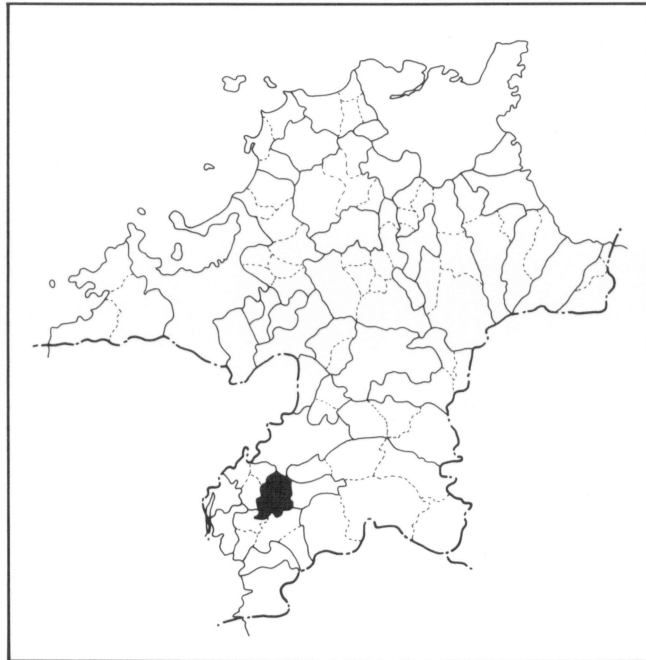
筑後市文化財調査報告書
第22集

1999

筑後市教育委員会

まえづなかのたまいせき
前津中ノ玉遺跡Ⅱ

前津中ノ玉遺跡第2次調査



1999

筑後市教育委員会



序

本書は、平成9年度に発掘調査を行いました前津中ノ玉遺跡の埋蔵文化財調査報告書であります。今回の調査では、縄文時代から奈良時代までの遺構や多量の遺物を出土しました。特に奈良時代の住居跡を20軒以上確認し、筑後市における奈良時代の生活の解明に大きく役立つものとなりました。

本書は、失われていく遺跡を記録として残すことで、文化財保護の理解と認識を深めることを目的とし、また学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

この報告書の発行にあたり、御協力をいただいた地権者並びに関係者各位、また、調査に関して御指導、御協力をいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

筑後市教育委員会
教育長 牟田口和良

例言

1. 本書は、宅地造成の開発に伴い、筑後市教育委員会が平成9年に実施した前津中ノ玉遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地点は、福岡県筑後市大字前津864-1外である。開発面積は1,762m²、発掘調査面積は約1,383m²であり、調査期間は平成9年6月9日から9月30日迄である。
3. 発掘調査は、上村英士が担当した。
4. 遺構の実測図作成は上村と小林勇作、立石真二、末吉隆弥、江崎貴浩、奥村太郎、小田和利（福岡県南筑後教育事務所）が行った。
5. 遺構の写真は、上村と永見秀徳が行った。また、遺構の全体写真は（有）空中写真企画に委託した。調査は分割して行った為、空中写真の合成処理を写測エンジニアリング（株）の協力を得た。
6. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系によっているため、本書に示す方位は全て座標北（G.N）である。
7. 遺物の実測図作成及び浄書は平塚あけみ、江藤玲子と上村、小林が行い、遺物の写真撮影は上村と永見が行った。
8. 本書に使用した遺構の表示は、下記の略号による。
SI-竪穴住居 SB-掘立柱建物 SK-土壌 SX-不明・その他の遺構
9. 本書の執筆は上村が行い、編集は平塚、江藤の協力を得て上村が行った。
10. 本書に掲載した図、写真、遺物については一括して筑後市教育委員会が収蔵、管理している。

目次

I.	はじめに	1
II.	位置と環境	2
III.	調査の概要	11
	(1) 遺構	11
	(3) 遺物	26
IV.	まとめ	49

I.はじめに

筑後市大字前津864-1において、平成8年6月に宅地分譲を目的とした土地の造成について、埋蔵文化財の取り扱いの問い合わせが、開発原因者から筑後市教育委員会にあった。当該地は八女丘陵西端に位置し、昭和60年に福岡県教育委員会が実施した前津中ノ玉遺跡の隣地であり、埋蔵文化財が包蔵されている可能性がある為、平成8年7月に試掘調査を実施した。その結果、開発予定地内のほぼ全面から住居跡やピット等を確認したため、開発原因者と埋蔵文化財の取り扱いについての協議を重ね、発掘調査を実施することとなった。開発対象面積は1,762㎡、調査面積1,383㎡である。

調査は平成9年6月9日から9月30日まで行った。調査は廃土置き場等の都合により、2回に分けて調査を実施し、2回の遺構全体の空中写真撮影を行った。

整理作業及び報告書作成は、筑後市教育委員会文化財整理室にて随時行った。

発掘調査に伴う費用は、すべて開発原因者が負担した。

発掘調査及び整理作業の関係者は次の通りである。

調査体制

1) 調査主体

筑後市教育委員会

2) 総括

教育長 森田基之（～平成10年3月） 牟田口和良（平成10年4月～）

教育部長 津留忠義（～平成10年3月） 下川雅晴（平成10年4月～）

社会教育課長 山口逸郎

社会教育係長 田中清通

社会教育係

（文化財専門職） 永見秀徳 小林勇作

田中剛 上村英士（平成9年6月1日～）調査担当

（文化財学芸員） 柴田剛 立石真二（平成9年8月1日～）

3) 発掘調査作業参加者 地元有志

4) 整理作業員参加者（整理補助員）平塚あけみ

江藤玲子（平成10年4月～）

（整理作業員）野間口靖子 湊まど香（～平成10年4月）

馬場敦子 野口晴香（平成10年5月～）

湯川琴美（平成10年5月～） 江崎貴浩

発掘調査及び整理作業にあたって、次の方々から御教示、御指導を賜った、記して心より感謝申し上げます。（敬称略）

小田和利（福岡県教育庁南筑後教育事務所）

狭川真一、城戸康利、中島恒次郎、山村信榮（太宰府市教育委員会）

大塚恵治（八女市教育委員会）

富永直樹、白木守（久留米市教育委員会）

Ⅱ.位置と環境

前津中ノ玉遺跡は、福岡県筑後市大字^{まえづ}前津に所在する。

筑後市は、福岡県の南西部、筑後平野のほぼ中央に位置し、市の北側を久留米市、広川町、三潞町、南側を瀬高町、東側を八女市、西側を大木町に隣接している。JR鹿児島本線と国道209号が市の中央を南北に貫き、国道442号が東西に横断する。一級河川の矢部川や水田の灌漑用水として整備された人工河川の山ノ井川、花宗川が市内を西流する。

当遺跡が所在する前津地区は、多くの古墳が点在する八女丘陵の西南端部に位置し、標高15m～20mの段丘状地形をなしており、周辺はぶどう畑やなし畑が拓けている。

次に市内の遺跡について時代ごとに概観してみる。市内から発見された旧石器時代については蔵数坂口遺跡から出土した角錐状石器が挙げられる。縄文時代の遺跡は早期の押型文土器を出土した裏山遺跡や落とし穴遺構を検出した蔵数森ノ木遺跡、田佛遺跡、若菜森坊遺跡、石組み炉を検出した志野添^{しらのま}遺跡等が挙げられる。弥生時代の遺跡は、竪穴住居を検出した蔵数森ノ木遺跡や、甕棺を検出した蔵数東野屋敷遺跡、常用遺跡等、市内の全域に分布する。古墳時代になると八女丘陵一帯に古墳が造られ、広川町と筑後市にまたがる国指定文化財として有名な石人山古墳や八女市の岩戸山古墳が挙げられ、市内には市指定文化財の欠塚古墳と瑞王寺古墳があり、集落跡では竪穴住居を検出した田佛遺跡や久富鳥居遺跡が挙げられる。奈良時代・平安時代では多数の集落跡を検出した若菜森坊遺跡や前津中ノ玉遺跡、羽犬塚射場ノ本遺跡、多数の墨書土器を出土した羽犬塚中道遺跡、また、古代の官道である「西海道」跡とされる遺構を鶴田市ノ塚遺跡で確認し、西海道は市のほぼ中央から東寄りに縦断することが推定された。中世では、煮炊具を多数出土し、居館跡とされる長崎坊田遺跡、大字下北島に所在する榎崎遺跡が挙げられる。近世の遺跡は市西端に位置し、漆器を出土した四ヶ所古四ヶ所遺跡が挙げられる。

(参考文献)

- 筑後市文化財報告書「裏山遺跡」 筑後市教育委員会1966
- 〃 「瑞王寺古墳」 第3集 筑後市教育委員会1984
 - 〃 「前津中の玉遺跡」 第4集 筑後市教育委員会1987
 - 〃 「田佛遺跡」 第5集 筑後市教育委員会1988
 - 〃 「蔵数遺跡群」 第6集 筑後市教育委員会1990
 - 〃 「欠塚古墳」 第8集 筑後市教育委員会1993
 - 〃 「榎崎遺跡」 第9集 筑後市教育委員会1993
 - 〃 「四ヶ所古四ヶ所遺跡」 第10集 筑後市教育委員会1994
 - 〃 「久富鳥居遺跡」 第13集 筑後市教育委員会1994
 - 〃 「羽犬塚射場ノ本遺跡」 第17集 筑後市教育委員会1995
 - 「筑後市史」 第1巻 筑後市史編さん委員会1997

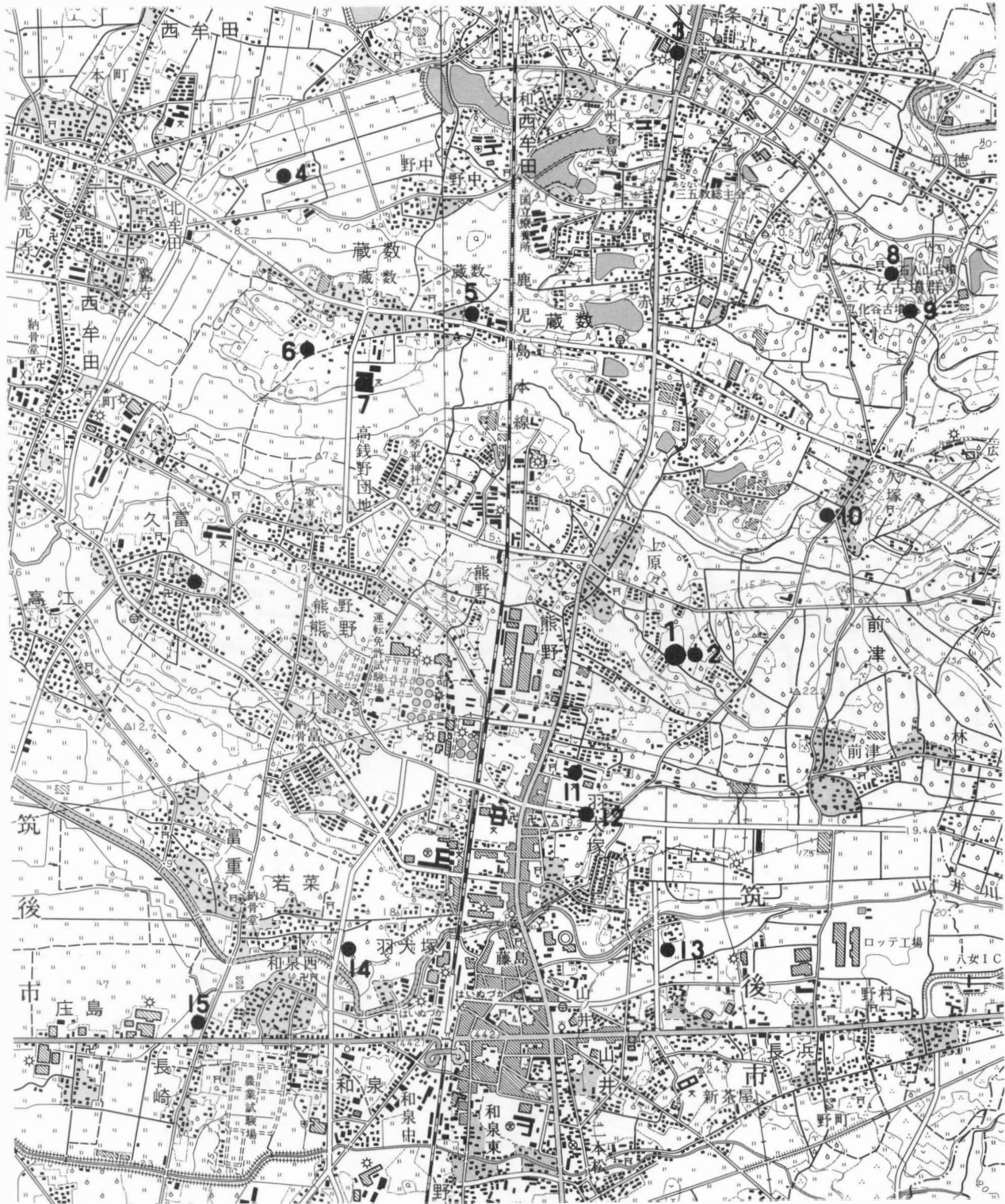


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- | | | | |
|--------------|-----------|------------|--------------|
| 1.前津中ノ玉遺跡第2次 | 2.前津中ノ玉遺跡 | 3.瑞王寺古墳 | 4.田佛遺跡 |
| 5.蔵数東野屋敷遺跡 | 6.蔵数坂口遺跡 | 7.蔵数森ノ木遺跡 | 8.石人山古墳 |
| 9.弘化谷古墳 | 10.欠塚古墳 | 11.羽犬塚中道遺跡 | 12.羽犬塚射場ノ本遺跡 |
| 13.徳久中牟田遺跡 | 14.若菜森坊遺跡 | 15.長崎坊田遺跡 | 16.久富鳥居遺跡 |

Fig.2 調査地点位置図 (1/5000)





Fig.3 遺構略測図 (1/200)

※記載のない屋内土壌（床下層）他については個別図で赤で表記している。



Fig.4 遺構全体図 (1/200)

※記載のない屋内土壌 (床下層) 他については個別図で赤で表記している。

Tab.1 遺構番号台帳(1)

遺構切り合い 旧→新

S—番号	遺構番号	種 別	S—番号	遺構番号	種 別
1	SI001	竪穴住居	46		ピット
2		攪乱	47		ピット群
3		攪乱	48		ピット
4		攪乱溝	49		ピット
5	SI005	竪穴住居 SI010→SI005	50	SX050	落とし穴状遺構
6		攪乱	51		欠番
7		攪乱	52		ピット
8		攪乱	53	SX053	ピット
9		攪乱	54		ピット
10	SI010	竪穴住居 SI010→SI005	55	SI055	竪穴住居
11		攪乱溝	56		ピット
12		ピット	57		ピット
13	SX013	ピット	58	SX058	ピット
14		ピット	59		SI001カマド
15	SI015	竪穴住居	60	SB060	掘立柱建物
16		ピット	61		ピット
17	SX017	ピット	62		ピット
18		ピット群	63		SI030内ピット
19		ピット	64		SI030内ピット
20	SI020	竪穴住居	65		欠番
21		ピット群	66		ピット
22		ピット	67		ピット
23		ピット群	68		SI001内ピット
24	SX024	ピット	69		SI015内ピット
25	SI025	竪穴住居	70	SI070	竪穴住居
26		ピット	71		ピット
27	SX027	ピット	72		ピット
28		ピット群	73		ピット
29		ピット群	74		SI015屋内土壇
30	SI030	竪穴住居	75		SI001屋内土壇
31		ピット群	76		攪乱
32		ピット群	77		攪乱
33		ピット群	78	SK078	土壇
34		ピット群	79		攪乱溝
35	SI035	竪穴住居 SI035→SI040	80	SI080	竪穴住居
36		ピット群	81	SX081	SI110内ピット
37		欠番	82	SX082	SI110屋内土壇?
38		ピット	83		ピット
39		攪乱	84		攪乱
40	SI040	竪穴住居 SI035→SI040	85		欠番
41		攪乱溝	86		攪乱
42		ピット	87		ク
43		ピット	88		ク
44		ピット	89		ピット
45	SI045	竪穴住居	90		欠番

Tab.1 遺構番号台帳 (2)

遺構切り合い 旧→新

S—番号	遺構番号	種 別	S—番号	遺構番号	種 別
91		ピット	150	SI150	竪穴住居
92		ピット	151		攪乱
93		ピット	152		攪乱
94		ピット	153	SX153	ピット
95		欠番	154	SX154	ピット
96		ピット	155	SI155	竪穴住居
97		ピット	156		ピット群
98		ピット	157		ピット群
99		SI080内ピット	158		ピット
100	SI100	竪穴住居 SI100→SI105	159	SX159	ピット
101		攪乱	160	SK160	土壌
102	SX102	SI070内ピット70→102	161		ピット群
103	SX103	ピット	162		ピット群
104		ピット	163		ピット
105	SI0105	竪穴住居 SI100→SI105	164		攪乱
106		ピット	165	SI165	竪穴住居
107		ピット	166		攪乱
108		ピット	167		攪乱
109		ピット	168		攪乱
110	SI110	竪穴住居	169		ピット
111		SI080内ピット	170	SI170	竪穴住居
112		SI080内ピット	171		攪乱
113		SI080内ピット	172		ピット
114		SI080内ピット	173		ピット
115		欠番	174		ピット
116	SX116	SI080内ピット	175		欠番
117	SX117	SI080内ピット	176		欠番
118		SI080内ピット	177		欠番
119		SI080内ピット	178	SK178	土壌
120		欠番	179		ピット
121		SI070内ピット	180	SI180	竪穴住居
122		SI070内ピット	181		欠番
123		SI070内ピット	182	SX182	SI165内ピット165→182
124		SI045内ピット	183		SI180内ピット
125		欠番	184		SI180内ピット
126		SI045内ピット			
127		ピット			
128		欠番			
129		欠番			
130		欠番			
131		SI010内ピット			
132		SI010屋内土壌			
133~149		欠番			

Ⅲ.調査の概要

1. 遺構検出状況

調査区は八女丘陵の西端部分に位置し、低位段丘の南斜面に遺跡は広がる。

遺構の検出環境は表土である暗茶褐色の細粒質火山灰土（旧耕作土）下に茶褐色の遺物包含層を確認し、遺物包含層を除去して大半の遺構を検出した。しかし、当地が以前、葡萄畑であった為、葡萄棚の基礎や溝等が調査区を縦横に走っており、殆どの遺構が一部又は半分以上破壊を受けていた。

2. 遺構

竪穴住居跡

SI001 (Fig .5,pla.2)

今回報告する地区の東側に位置し、中央部分を現代溝に大きく切られる。竪穴部は南北壁長約3.5m、東西壁長約2.4mを測り、壁高は約5~10cmで平面プランは長方形を呈する。貼床面は平坦で主柱穴は確認されなかった。貼床

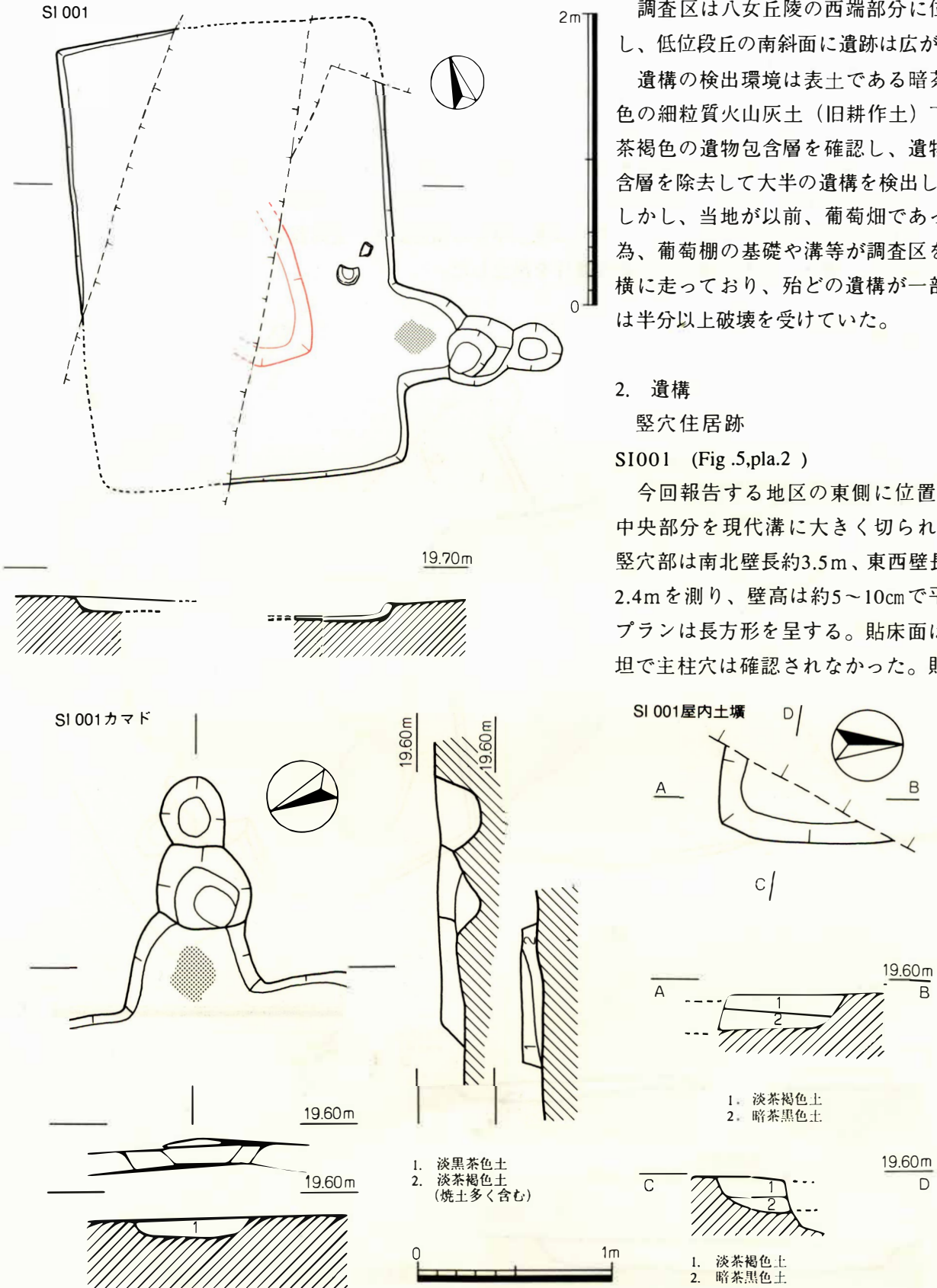


Fig.5 SI001カマド・屋内土壌遺構実測図 (1/40・1/30)

下層から、掘り込み深さ約20cmの屋内土壌を検出した。カマドは東壁の南に偏した位置に付設され、竪穴部から突出して造られている。カマド中央床面は赤褐色に焼けている。煙道部分がピットに切られているが、火床面は煙道に向かって緩やかに傾斜している。遺物は覆土中から土師器坏、甕片、屋内土壌から土師器片、カマド内から須恵器片、土師器甑、甕片を出土した。

SI005 (Fig.6,pla.2)

東側のSI010を切り、中央部分と南西部分を現代溝に切られている。南北壁長約2.5mを測り、東西に広い長方形を呈する。壁高は約8~16cmを測り、検出住居の中では大型である。貼床、支柱穴、カマドは検出されなかった。遺物は須恵器蓋片、土師器甕、坏、甑片を出土した。西壁に沿って貼床下層から掘り込み深さ約16cmの屋内土壌を検出した。カマドは北東隅部分に付設された突出型である。カマド内で赤褐色に焼けた火床を検出した。遺物は覆土中から須恵器坏、土師器甕、皿、坏片、カマド内から土師器坏片、甕片、屋内土壌から土師器甕片を出土した。

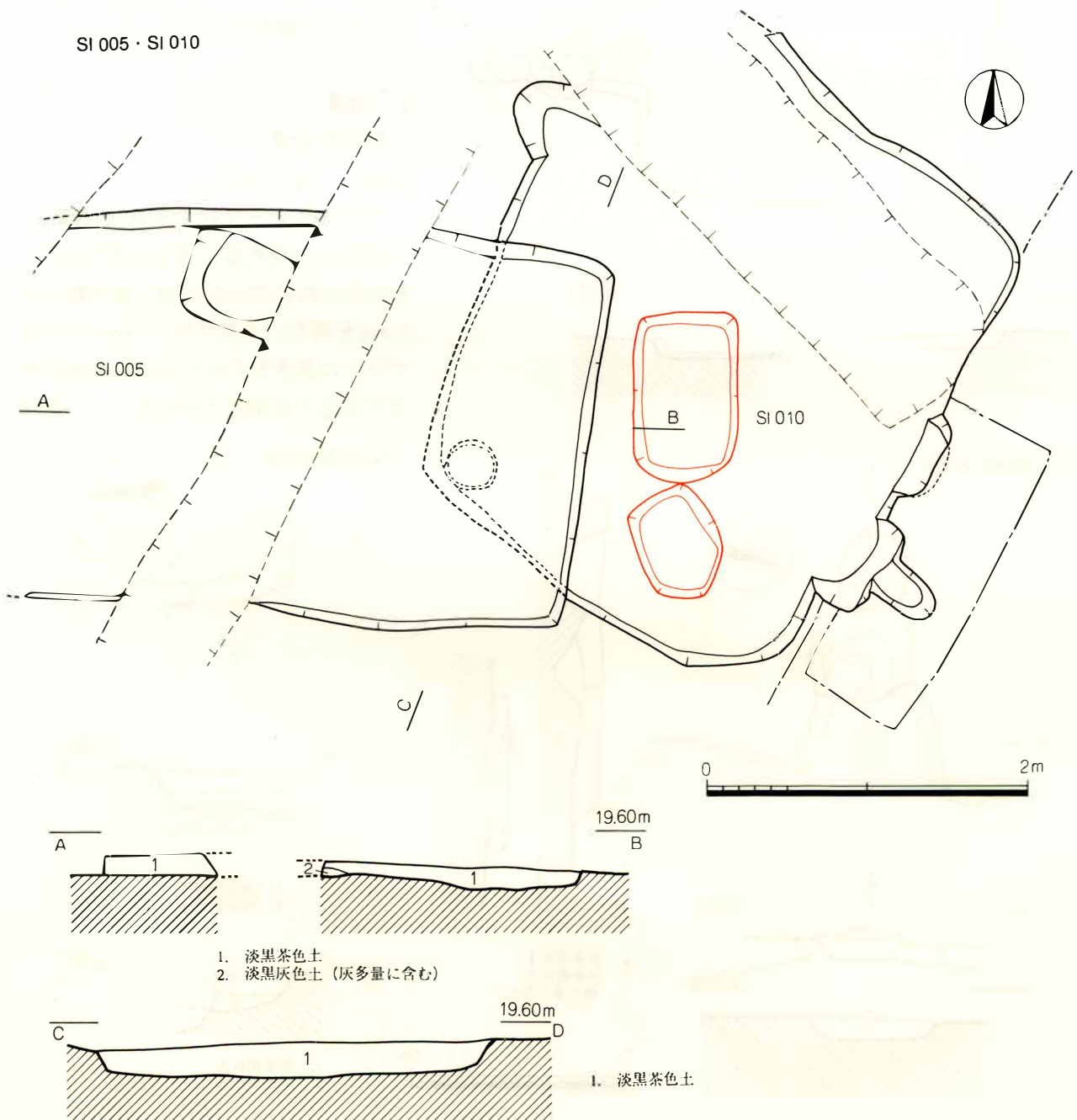


Fig.6 SI 005 · SI 010遺構実測図 (1/40)

SI010 (Fig. 6・7, pla.3)

SI005に切られており、北壁を現代溝に切られている。南北壁長約3.5m東西壁長約2.9mを測り、壁高は約22cmを測る。平面プランは隅円長方形を呈する。貼床下層から掘り込み深さ約17cmの屋内土壌を検出した。カマドは東壁の南寄りに付設され、竪穴部から火床が突出して造られ、煙道が東に約45cm残存する。カマドの北側壁に住居内土壌が掘り込まれている。土壌内の埋土は暗茶黒土で、土師器甕、坏片が出土している。竪穴部の出土遺物は、須恵器蓋、土師器甕、坏、皿、把手付甕、屋内土壌から土師器甕、坏である。

SI 010カマド・住居内土壌

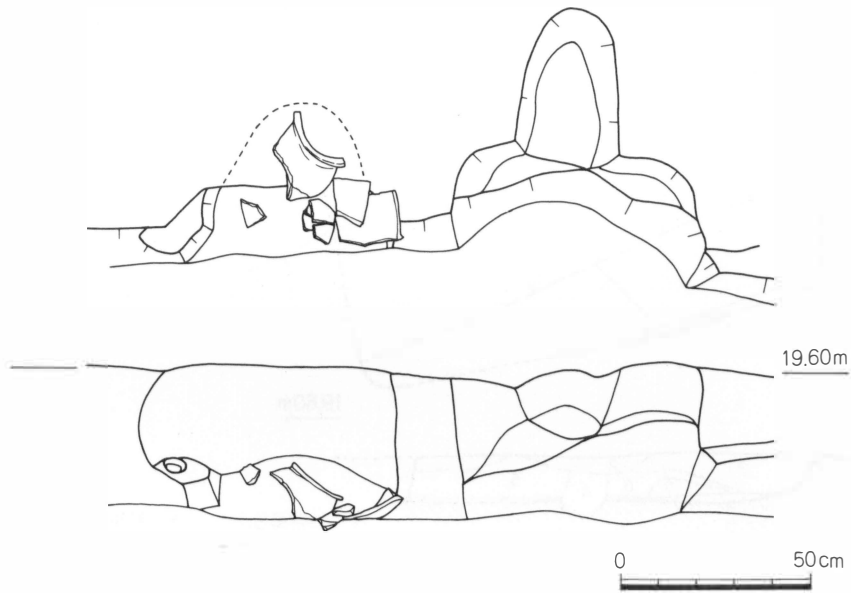


Fig.7 SI010カマド・住居内土壌遺構実測図 (1/20)

SI015 (Fig. 8, pla.3)

調査区北西に位置し、遺構の西側と南西隅を現代溝に切られている。南北壁長約2.85m、東西壁長約3.6mを測り、壁高は約13cm～25cmを測る。東西に広い隅円長方形を呈する。貼床は全面ではないが、平坦で硬い。主柱穴は確認されなかった。西壁に沿って貼床下層から掘り込み深さ約16cmの屋内土壌を検出した。カマドは北東隅部分に付設された突出型である。カマド内で赤褐色に焼けた火床を検出した。遺物は覆土中から須恵器坏、土師器甕、皿、坏片、カマド内から土師器坏片、甕片、屋内土壌から土師器甕片を出土した。

SI020 (Fig. 8, pla.4)

遺構の南側を現代溝に切られる。残存南北壁長約1.7m、東西壁長約2.15mを測る。壁高は約13cmを測る。床面は平坦で、貼床は検出されなかった。カマドは北壁に付設され、突出型である。カマド前面に灰だまりを検出した。遺物は土師器甕片を出土している。

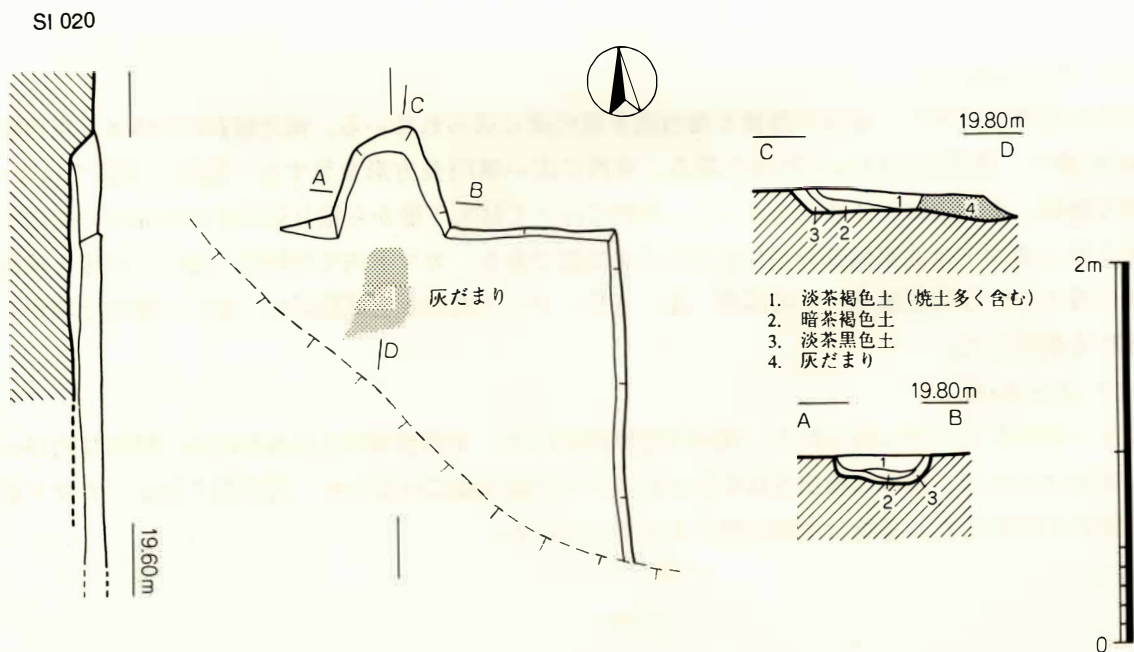
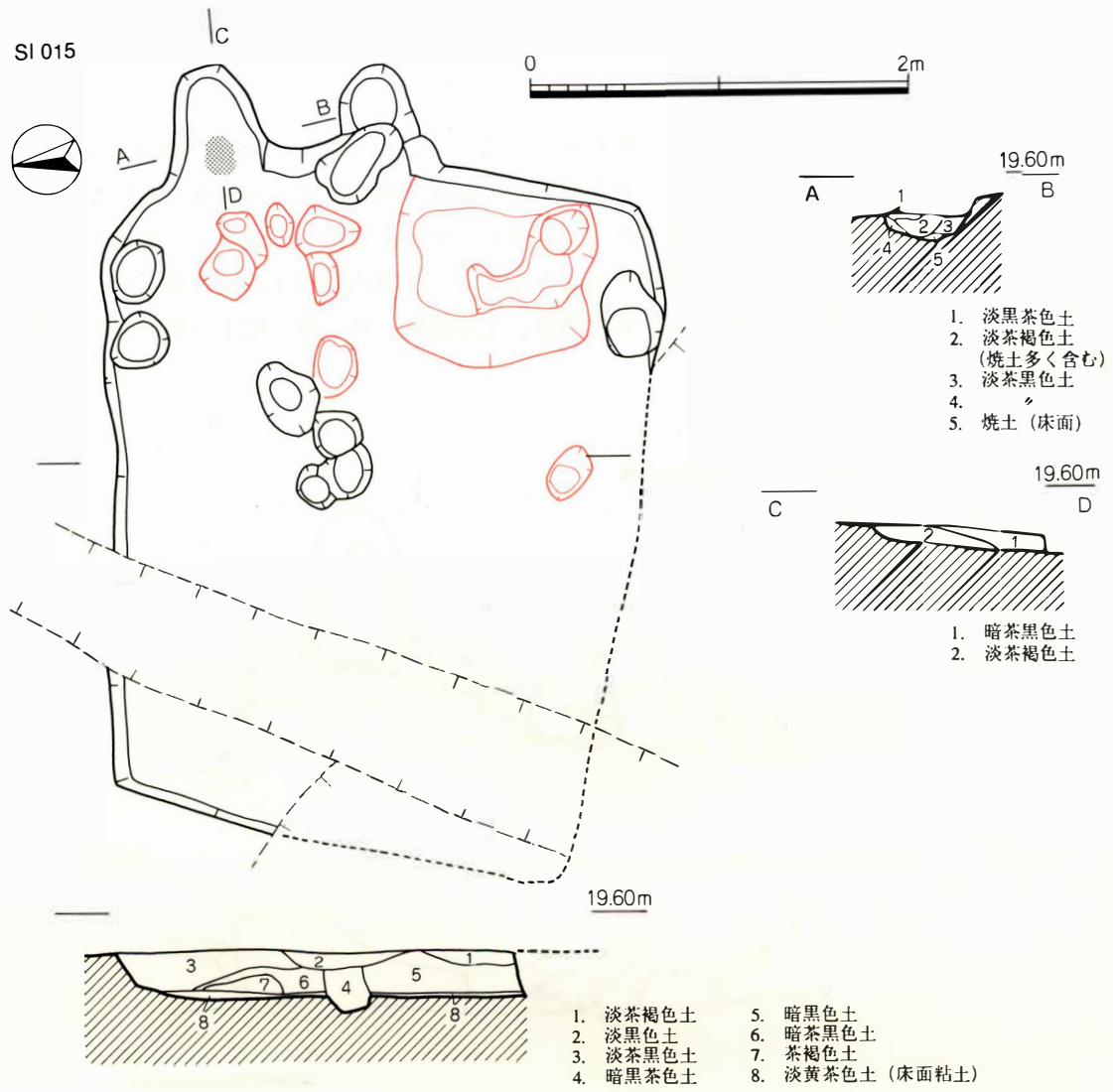


Fig.8 SI 015・020遺構実測図 (1/40)

SI025 (Fig.9)

調査区の北壁際で西隅部分のみを検出した住居跡である。当初は土壙と考えていたが、形状と壙底の状況から住居として取り扱う。出土遺物は土師器甕小片のみである。

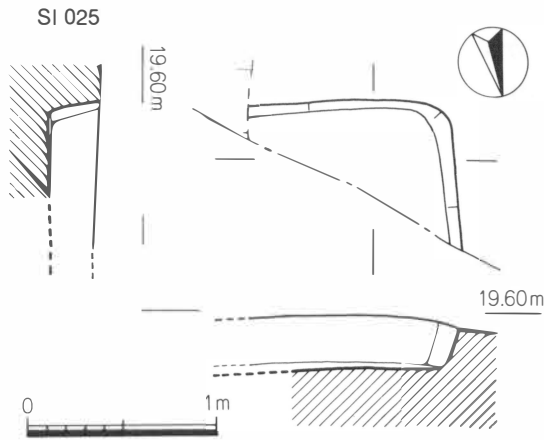


Fig.9 SI 025遺構実測図 (1/40)

SI030 (Fig.10,pla.5)

住居跡の北部分を東西に現代溝に切られる。南北壁長約3.1m、東西壁長約2.9mを測る。壁高は約7cm~17cmである。隅円正方形のプランを呈する。住居内から焼け面をもつピット (S-63)を検出したが性格は不明である。また、住居北側部分と南側部分では若干方向が違い2棟が切り合っている可能性がある。遺物は、土師器甕、坏片が出土しているが図化するに至らない小片であった。また、携帯用と考えられる穿孔した砥石が出土している。

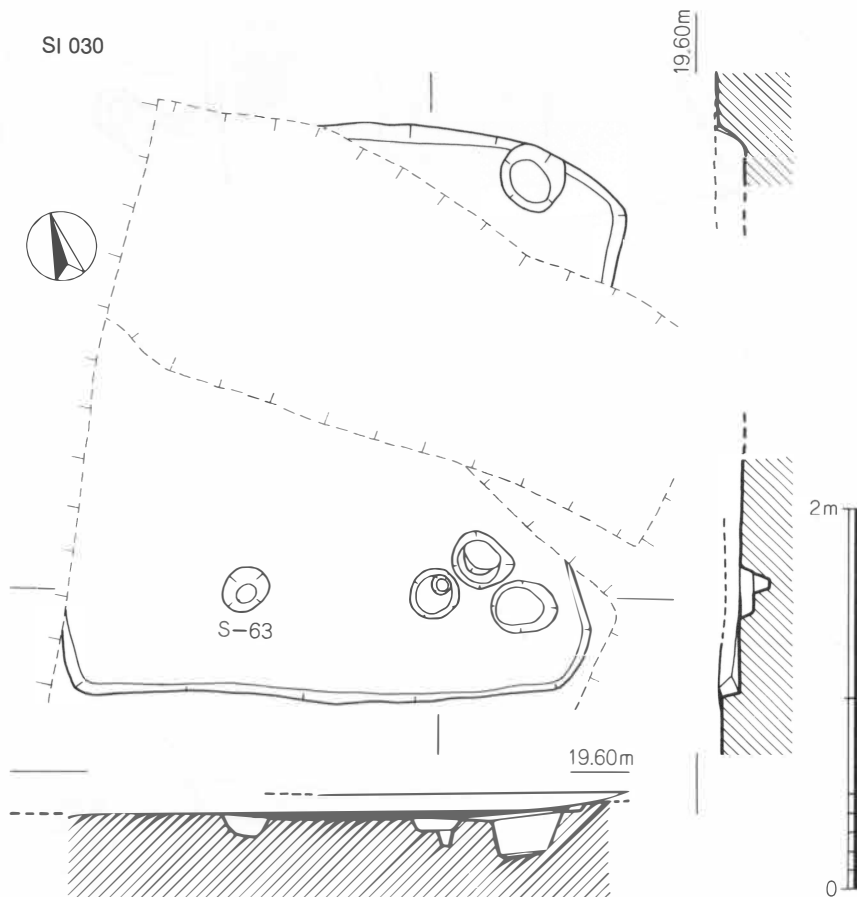


Fig.10 SI 030遺構実測図 (1/40)

SI035 (Fig.11)

調査区南東に位置し、住居南側をSI040に切られ、西部分を現代溝に切られる。南北壁長約2.9m、東西壁長約4.05mを測り、壁高は約28cmを測る。隅円長方形のプランを呈する。主柱穴は確認されなかった。貼床下層から掘り込み深さ約20cmの屋内土壌を検出し、埋土は焼土、炭を多量に含む淡赤褐色土であった。カマドは北壁東寄りに付設され、突出型である。カマド内に灰白色粘土が入り、東壁際でも検出した。遺物は須恵器蓋片、土師器甕、坏、皿、甑、高坏片、土錘を出土した。

SI 035・SI 040

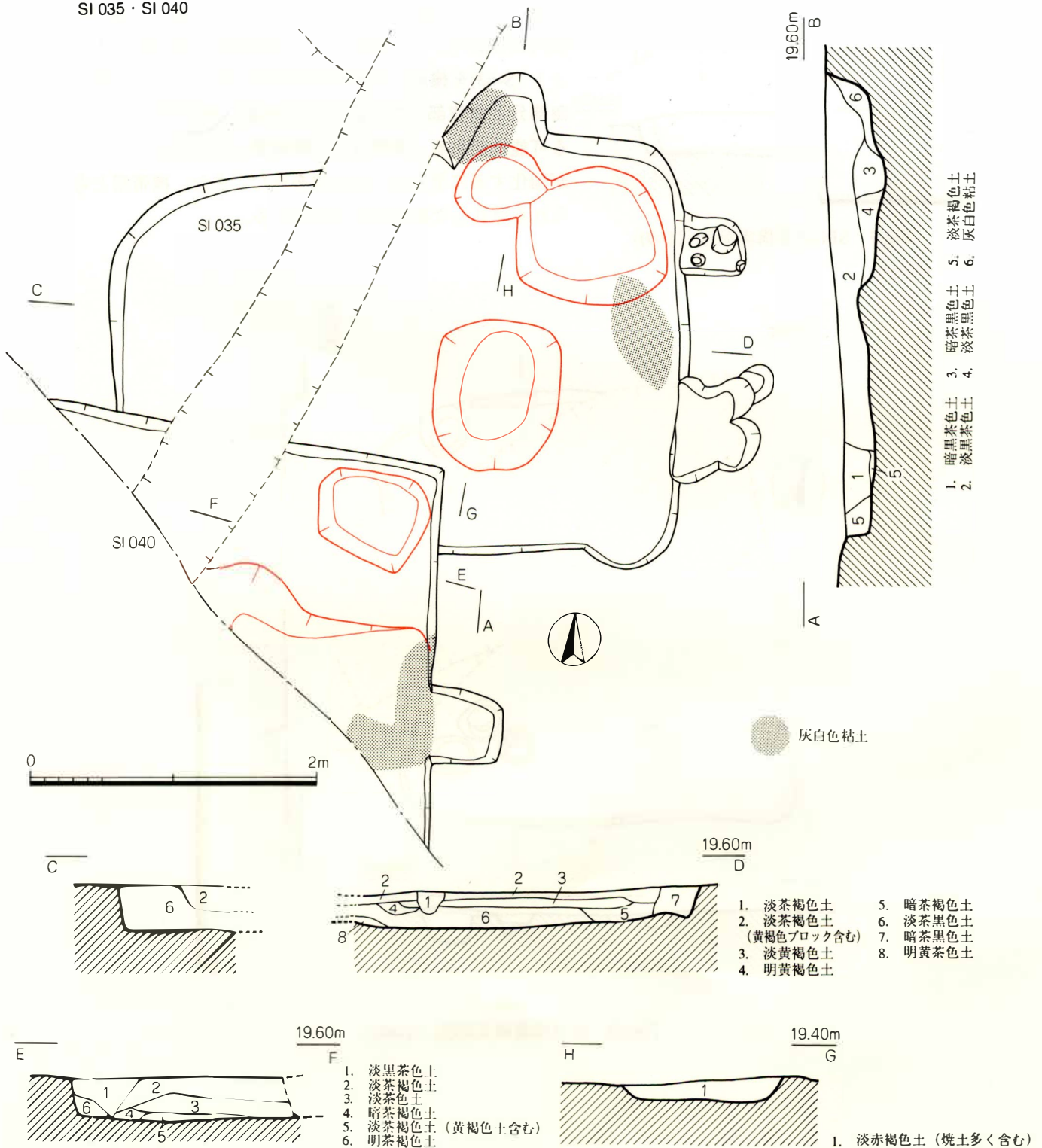


Fig.11 SI 035・040遺構実測図 (1/40)

SI040 (Fig.11)

調査区南壁部分で検出しSI035を切っており、住居西部分を現代溝に切られる。検出南北長約2.65m、東西長約2.8mを測り、壁高は約20cmを測る。貼床下層の北東隅に屋内土壌を検出した。カマドは東壁部分に付設され、突出型である。カマド前面で灰白色粘土を確認した。遺物は須恵器坏片、土師器甕、甑、坏、高坏、移動式竈片を出土した。

SI045 (Fig.12.13,pla.5.6)

住居跡の南側を床面まで現代溝に切られている。住居群の中では大型である。南北壁長約4.0m、東西壁長約2.65mを測り、壁高は約30cmを測る。南北に長い隅円長方形のプランを呈し、床面は平坦である。西・南壁に沿って壁溝を検出した。貼床下層から掘り込み深さ約26cmの屋内土壌を検出し、埋土は淡黒茶色土である。カマドは2基検出し、北壁中央に付設された突出型の北カマドは両袖が若干残存する。カマドから北に約60cm煙道が延び、カマド壁体、煙道は赤褐色に焼けている。西壁の南寄りに検出された西カマドは現代溝に破壊を受け残存状態が極めて悪かったが、カマド内に小型甕を倒立させて支脚に用いている。遺物は覆土中から須恵器蓋、甕、坏片、土師器甕、坏、高坏、甑、移動式竈と考えられる小片、北カマドから須恵器坏、甕、蓋片、土師器甕、坏、甑片、西カマドから、甕、坏片を出土した。

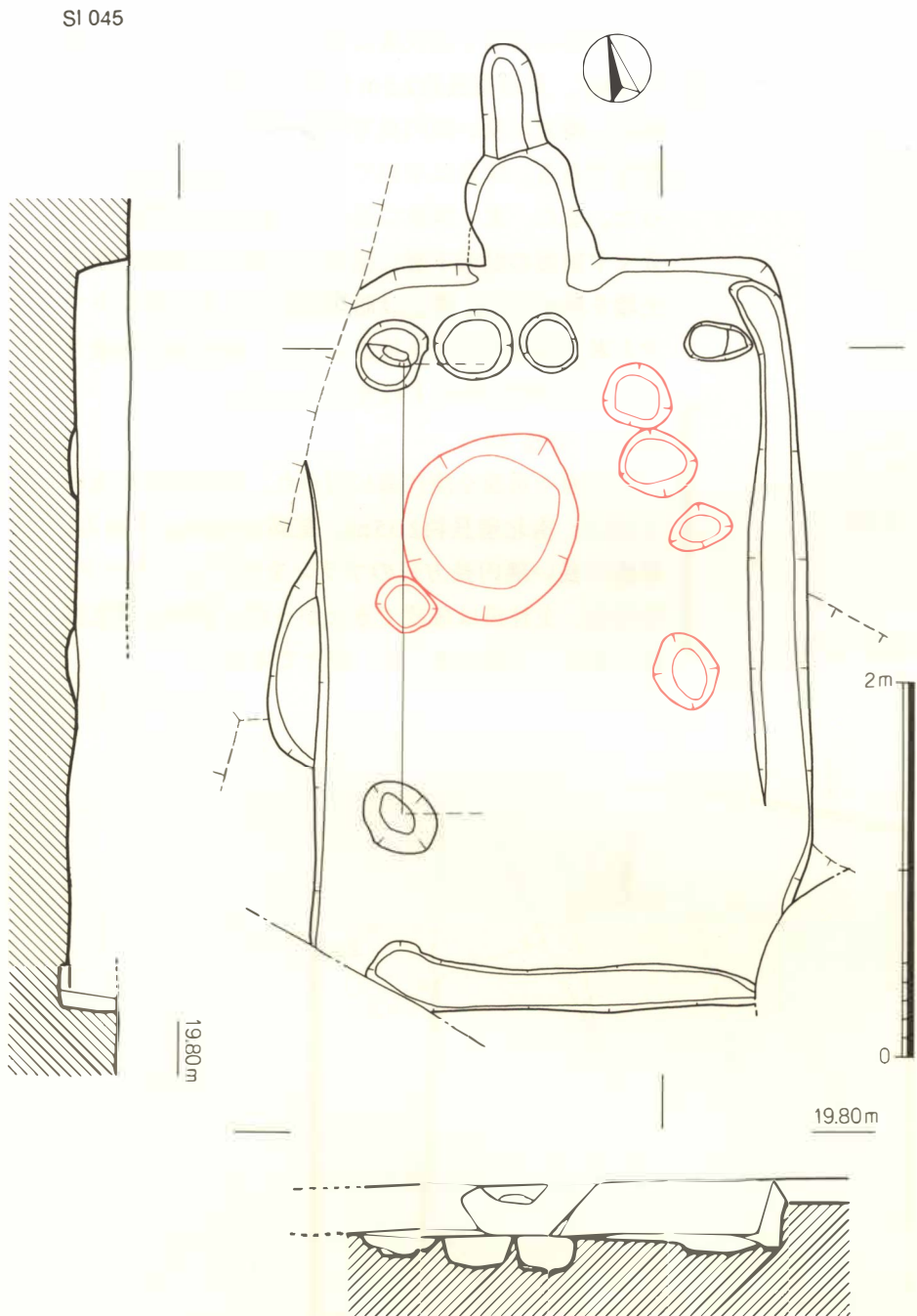
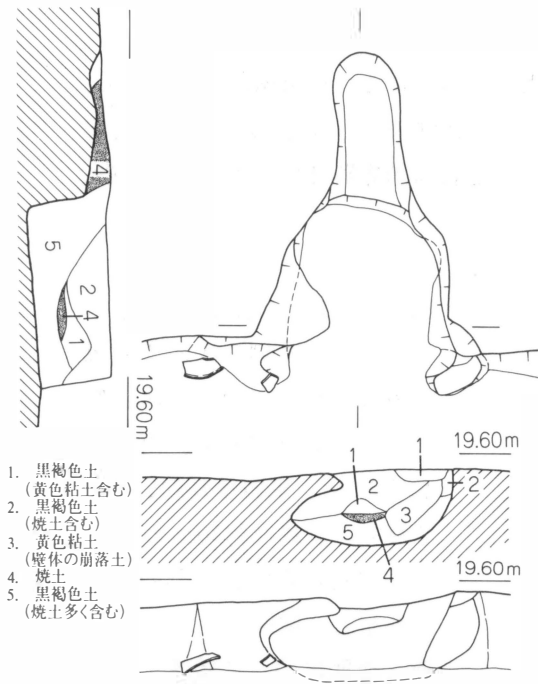


Fig.12 SI 045遺構実測図 (1/40)

SI 045北カマド



1. 黒褐色土
(黄色粘土含む)
2. 黒褐色土
(焼土含む)
3. 黄色粘土
(壁体の崩落土)
4. 焼土
5. 黒褐色土
(焼土多く含む)

SI 045西カマド

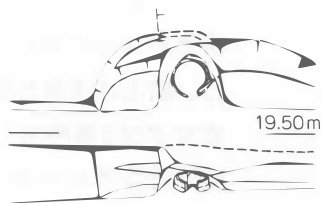


Fig.13 SI 045北・西カマド遺構実測図 (1/30)

SI055 (Fig.14)

住居跡の中央部分を南北に現代溝に切られている。東西壁長約2.6mを測り、壁高は約8cmを測る。正方形に近いプランを呈する。貼床、カマド、支柱穴等は確認できなかった。出土遺物は土師器甕小片のみである。

SI070 (Fig.15)

住居跡の西側を現代溝に切られている。南北壁長約3.9m、東西壁長約2.5mを測り、壁高は約27cmを測る。南北に長い隅円長方形のプランを呈し大型の住居である。床面は平坦で、支柱穴は確認されなかった。また、東・西壁に沿って一部壁溝を検出した。カマド前面の貼床下層に掘り込み深さ約20cmの屋内土壌を検出した。埋土は暗黒褐色土。北西隅にカマドと考えられる部分を検出したが、現代溝に破壊されており詳細な情報を残せなかった。

SI080 (Fig.15)

住居面や東西を現代溝に切られ、残存状況が極めて悪い。南北壁長約2.35m、壁高は約34cmを測る。東西に長い隅円長方形のプランを呈する。カマド、貼床面、支柱痕は確認できなかった。遺物は須恵器坏、蓋片、土師器甕、坏、皿片である。

SI 055

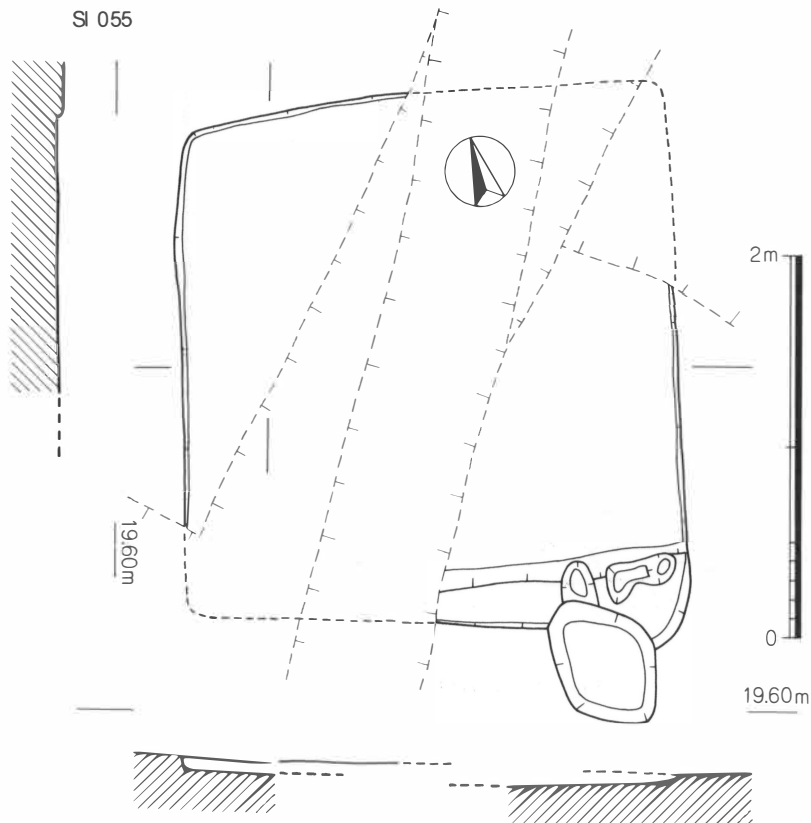
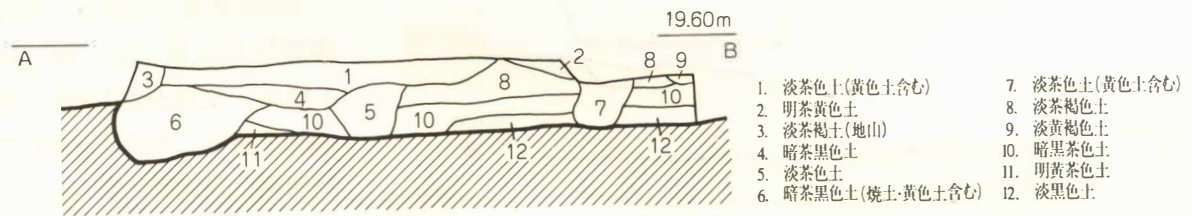
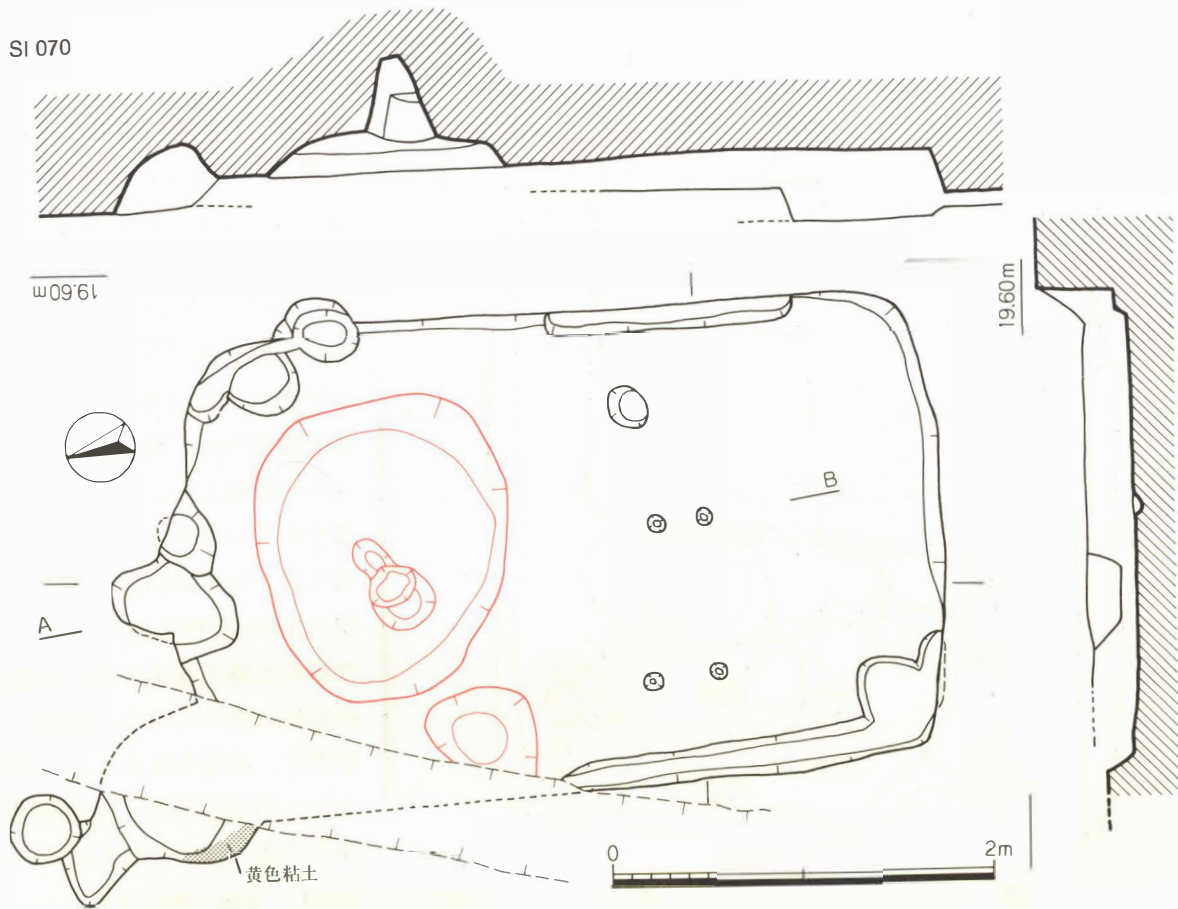


Fig.14 SI 055遺構実測図 (1/40)

SI 070



SI 080

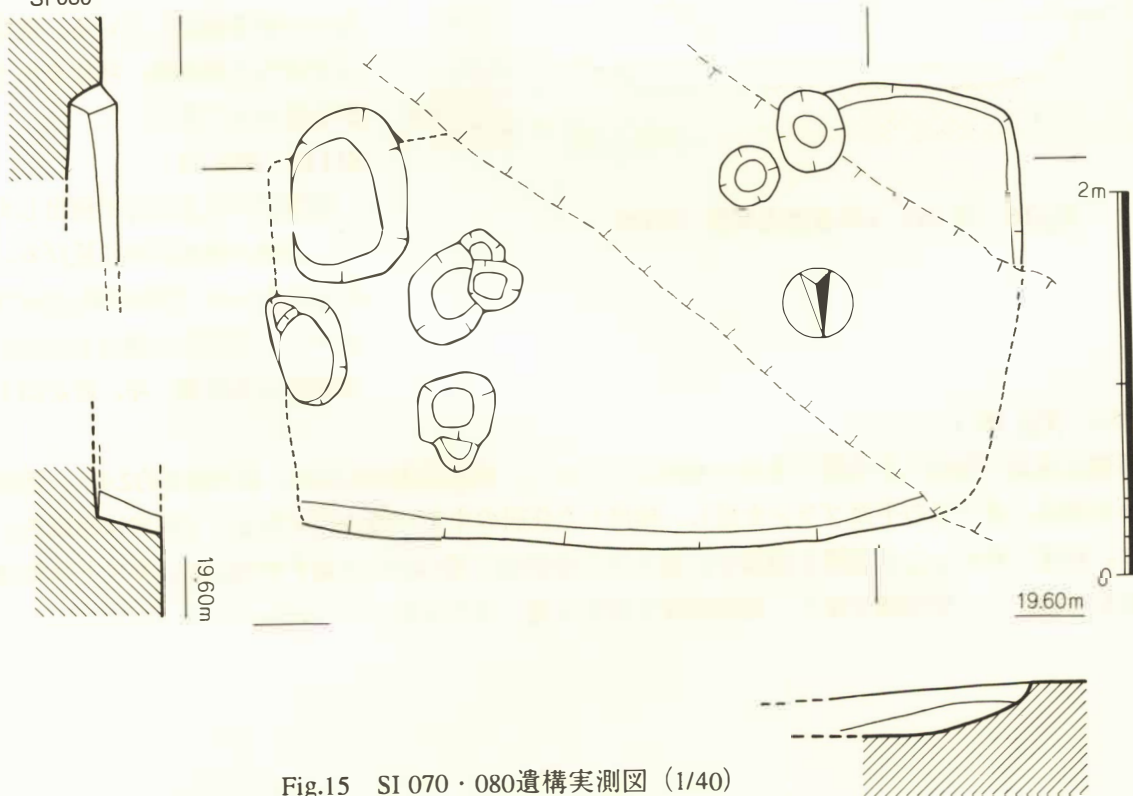


Fig.15 SI 070・080遺構実測図 (1/40)

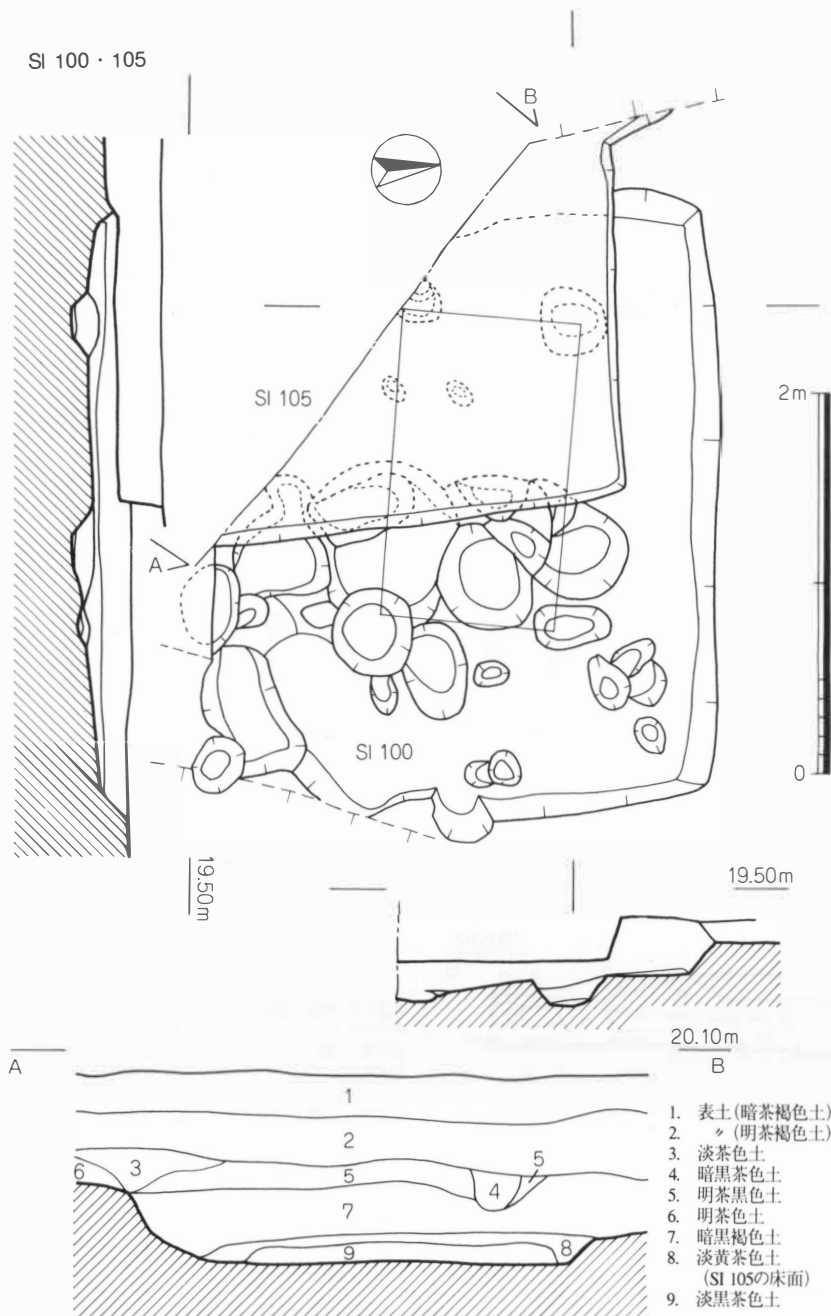


Fig.16 SI 100・105遺構実測図 (1/40)

SI100 (Fig 16・17pla.7・8)

調査区の南東に位置し、SI105に切られている。南北壁長約2.65m、東西壁長約3.3m、壁高約28cmを測り、隅円長方形の平面プランを呈する。床面は北が低く、後世のピットで貼床を一部しか検出していない。住居西寄りに支柱穴と考えられるピットを検出した。カマドは東壁に付設されていたと考えられ、現代溝に切られており詳細は不明である。南壁にSI010で検出したものと同様の住居内土壌を検出した。土壌周辺は赤褐色に焼けており、内部から土師器甕片、高坏を出土した。住居覆土中から須恵器坏片、土師器甕、坏、高坏、甑、鉢片を出土している。

SI105 (Fig.16pla.7)

SI100を切っており、住居南側は調査区外に延びる。検出南北長約2.15m、東西長約1.8m、壁高は約20cmを測る。床面は北側が低い。住居西端に現代溝に切られているが突出型のカマドがあったと考えられ、焼土や灰を確認している。遺物は覆土中から土師器甕、坏片を出土したが小片のみである。

SI110 (Fig.18)

調査区中央北部分で検出した住居で、北側が調査区外に延びる。検出南北長約1.4m、壁高は約12cmである。カマド、貼床面は検出されなかった。遺物は土師器甕、坏、皿が出土。

SI150 (Fig.19)

調査区西北で検出した住居で東側を攪乱に切られる。南北壁長約2.05m、東西壁長約2.4m、壁高は約10cmを測る。長方形の平面プランを呈し、検出した住居の中で一番小型である。支柱穴は確認されなかった。貼床下層面から北東隅と西部分に掘り込み約30cmと約14cmの土壌を検出した。カマドは北壁の東寄りに付設され、突出型である。遺物は覆土中から甕、坏片が出土している。

SI 100住居内土壌

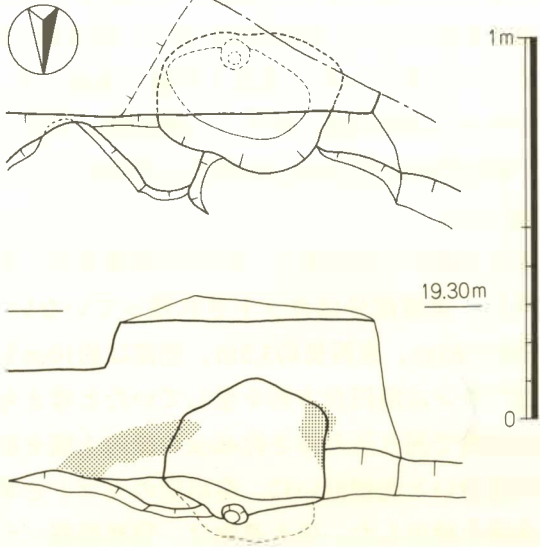


Fig.17 SI 100住居内土壌遺構実測図 (1/20)

SI 110

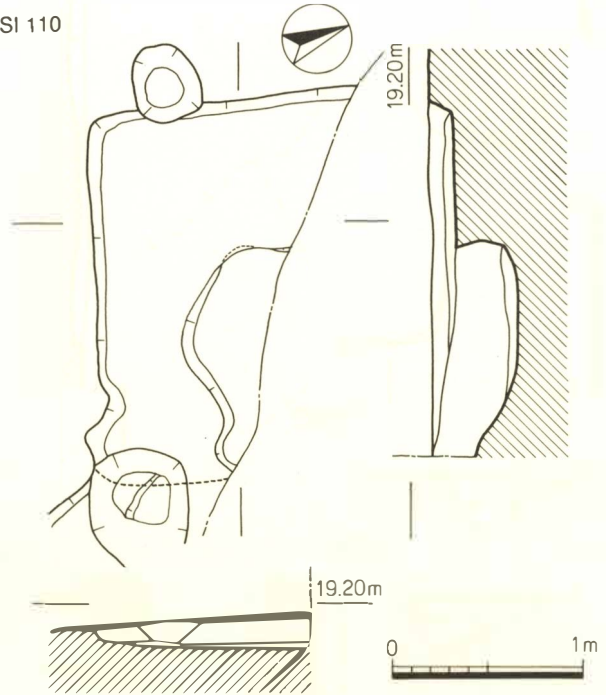


Fig.18 SI 110遺構実測図 (1/40)

SI 150

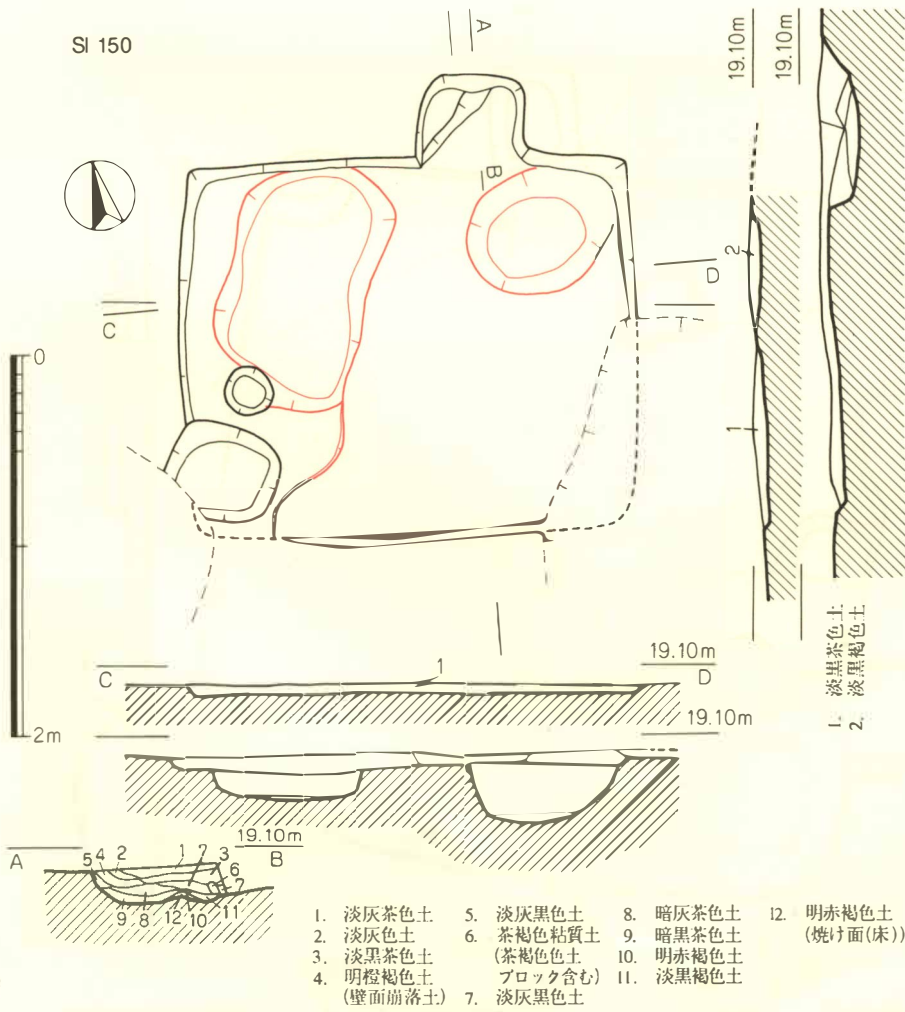


Fig.19 SI 150遺構実測図 (1/40)

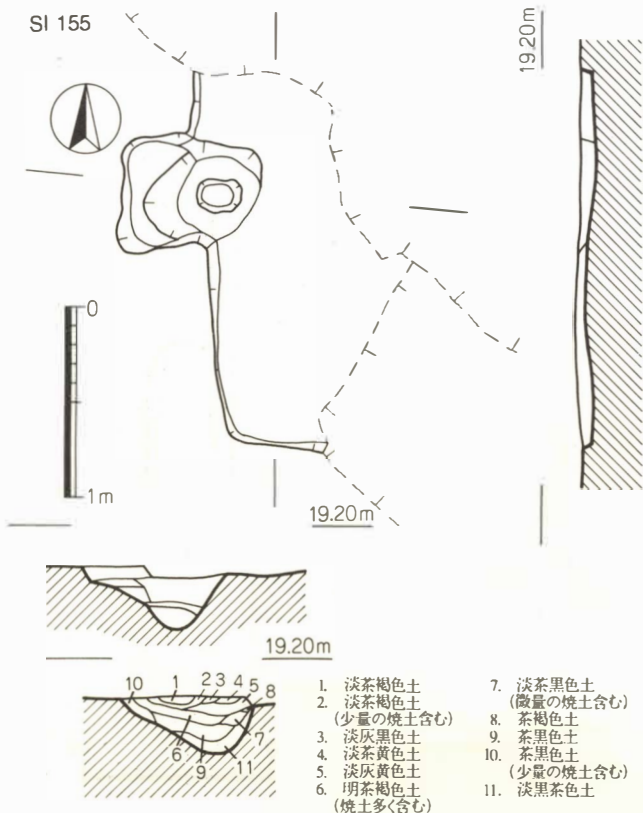


Fig.20 SI 155遺構実測図 (1/40)

SI155 (Fig.20)

遺構の大半を現代溝に切られ西部分のみ検出している。検出南北長約1.95m、東西長約1.05m、壁高約7cmを測る。カマドと考えられる遺構を西壁で検出した。遺物は覆土中から須恵器蓋、坏片、土師器甕、坏片を出土した。須恵器坏はSI175出土の坏片と接合する。

SI165 (Fig.21)

調査区西北で検出した住居で、SI170と隣接する。北側を現代溝に、東壁部分はカットされ残っていない。検出南北長約3.65m、東西長約3.3m、壁高は約10cmを測る。平面プランは隅円長方形を呈していたと考えられる。南西壁隅で掘り込み深さ約46cmの屋内土壌を検出した。西壁沿いと北壁沿いに、突出型のカマドと考えられる遺構を検出した。出土遺物は、須恵器蓋、土師器甕、皿、未成品の石製紡錘車、西カマドから須恵器甕小片、土師器甕小片、北カマドから、土師器甕小片、屋内土壌から土師器甕、坏片を出土した。

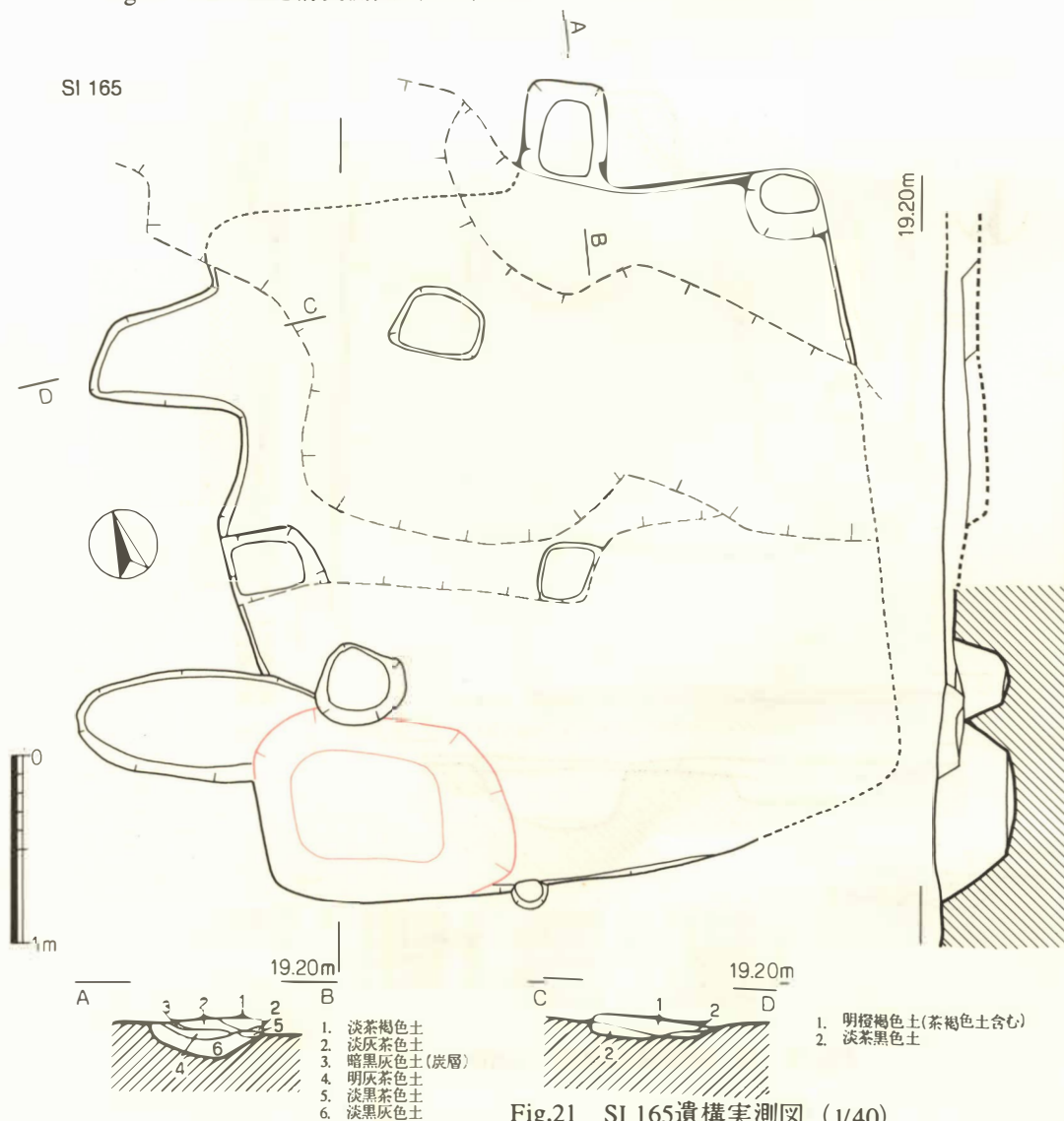


Fig.21 SI 165遺構実測図 (1/40)

SI170 (Fig. 22pla. 9)

調査区南西に位置し、中央部分を現代溝に切られる。南北壁長約3.4m、東西壁長約3.5m、壁高は約20cmを測り、略正方形のプランを呈する。床面は平坦で支柱痕は確認されなかった。貼床下層から掘り込み深さ約19cmの屋内土壌を検出した。カマドは現代溝に大きく切られ殆ど残存していないが、西壁北寄りに突出型のものがあったと考えられる。また、南・西壁際に小壁溝を検出した。遺物は覆土中から須恵器蓋、坏片、土師器甕片、坏片、屋内土壌から土師器甕片を出土している。

SI180 (Fig. 23pla.9)

調査区中央北で検出した住居で、西側上面を後世の掘削で失われている。南北壁長約3.45m、残存東西長約2.65m、壁高は約13cmを測る。南北に長い隅円長方形のプランを呈している。床面は平坦で、支柱痕は確認されなかった。住居北側の貼床下層から掘り込み深さ約20cmの屋内土壌を検出した。カマドは北壁中央に付設され、突出型である。火床面は床面より低く掘り窪められている。遺物は覆土中から須恵器坏小片、土師器甕小片、カマドから土師器甕、坏、皿片が出土している。

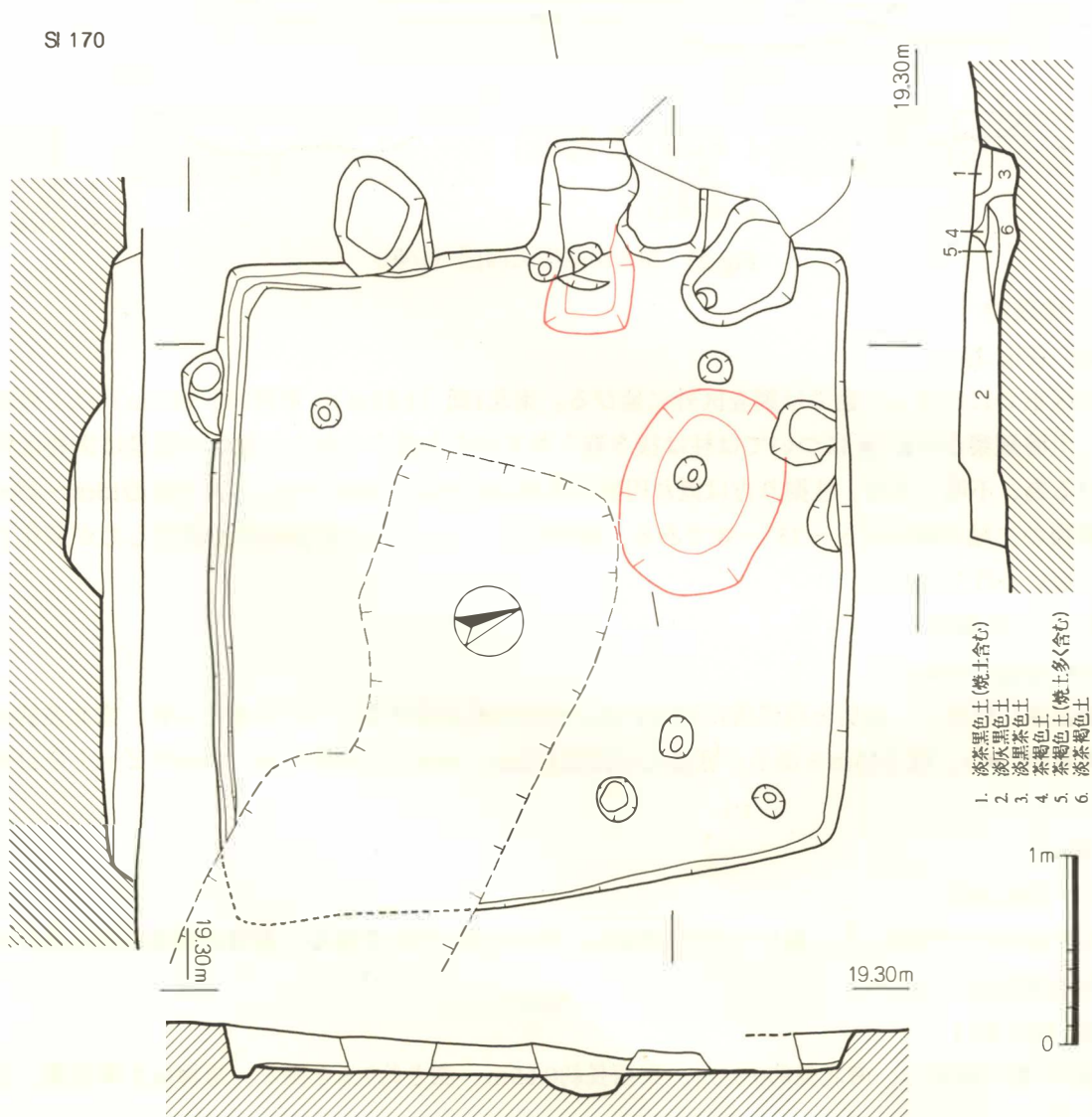


Fig.22 SI 170遺構実測図 (1/40)

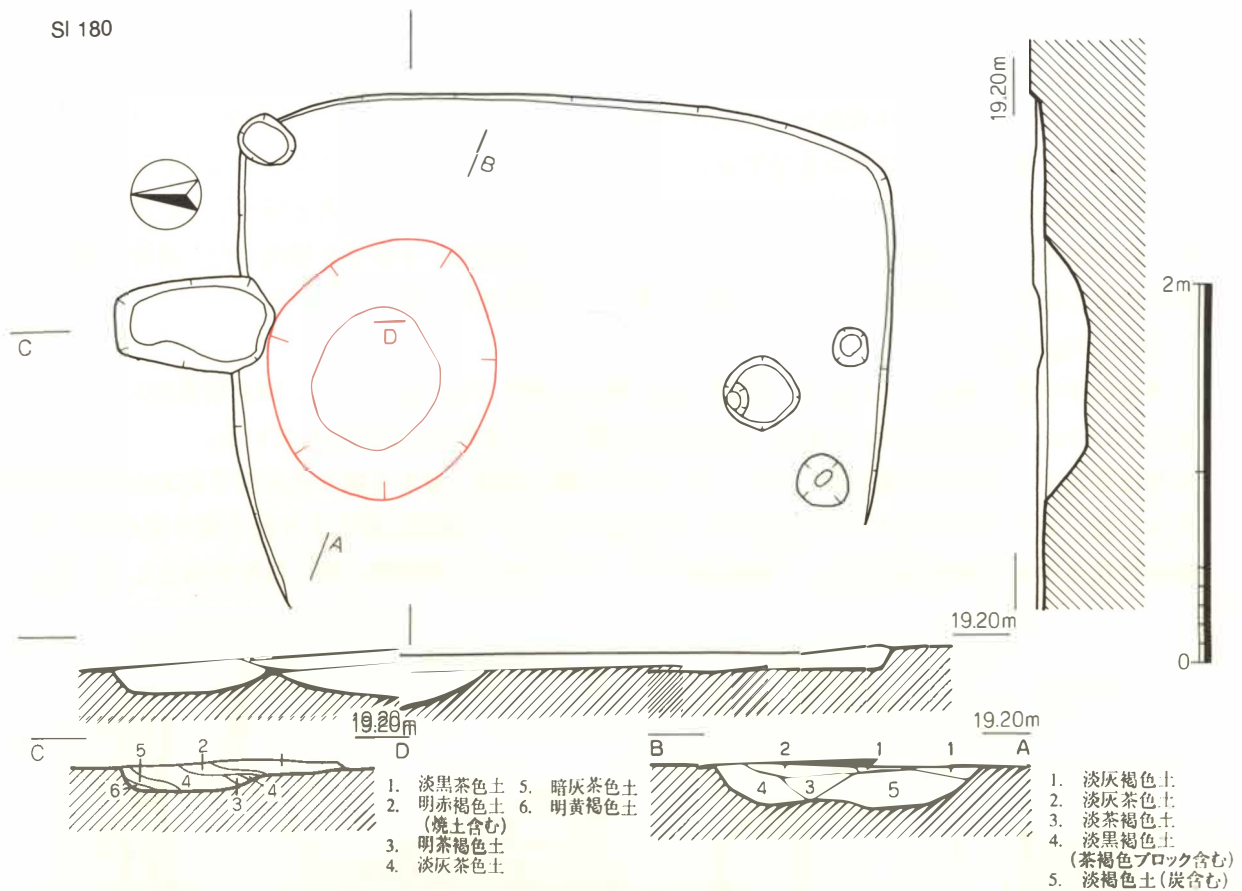


Fig.23 SI 180遺構実測図 (1/40)

掘立柱建物

SB060 (Fig.24)

調査区東北に位置し、過半は調査区外に延びる。南北1間 (1.85m)、東西2間 (4.0m) 以上の建物である。土層観察からa・bについては柱は抜き取られていたと考えられる。建物の規模は調査区外に延びている為、不明である。柱掘り方は概ね円形で直径は約35cm~40cmである。深さは約15cm~45cmである。建物の主軸の振れはN-75°-Wである。遺物はピットaから土師器碗片を出土したが図化するには至らない小片であった。

落とし穴状遺構

SX050 (Fig.25pla.6)

調査区東に位置し、西側を現代溝に切られる。略楕円形を呈するプランと考えられ、南北長約0.95m、残存東西約0.9m、深さ55cmを測る。底部には直径約5cm~10cm、深さ約11cm~20cmのピットを11個検出した。

土壌

SK078 (Fig.26)

調査区中央北で検出した。検出南北長約0.6m、東西長約1.25mを測る。遺構は調査区外に延びる。遺物は砥石を出土した。

SK160 (Fig.27)

SI155の南で検出し、南北長約0.95m、東西長約0.65m、深さ約9cmを測る。遺物は土師器甕、甑片が出土した。

SB 060

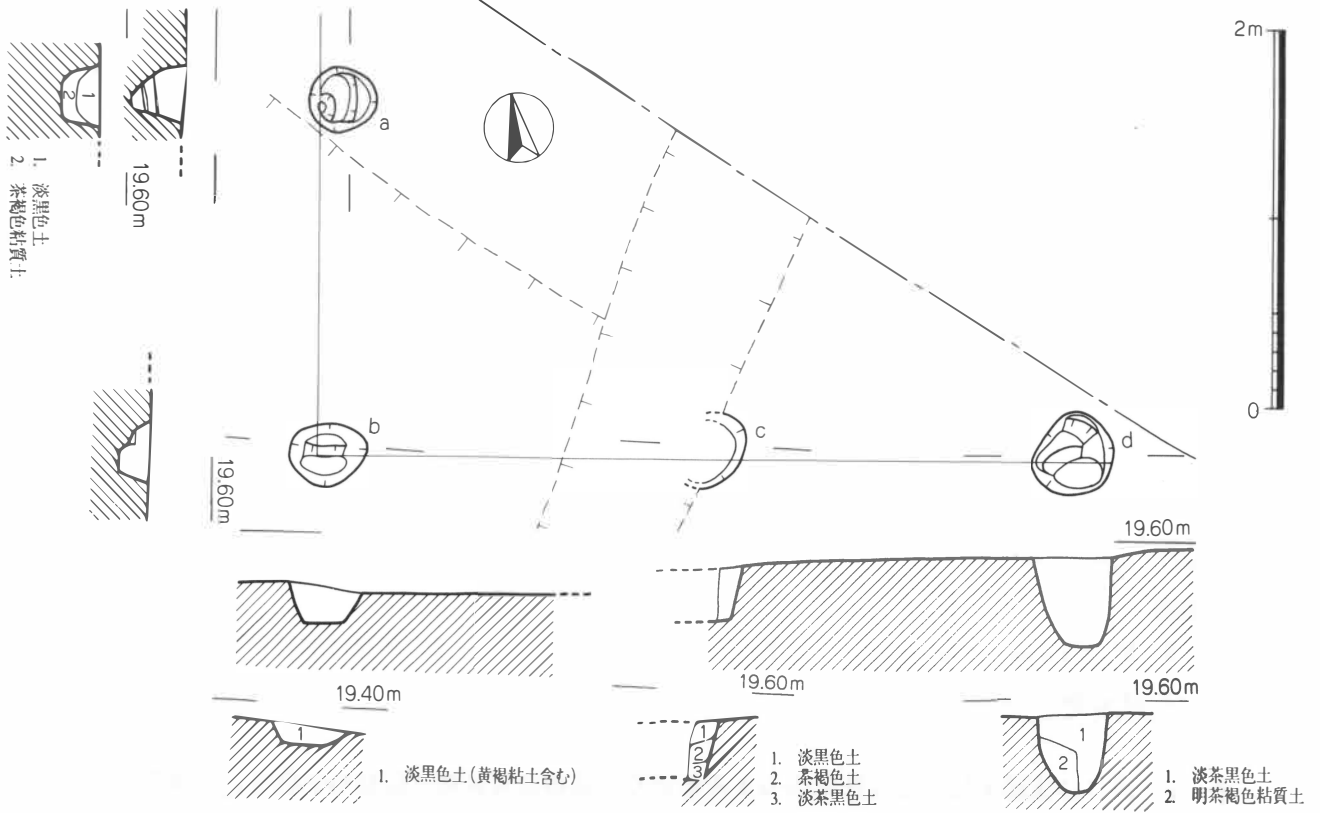


Fig.24 SB 060遺構実測図 (1/40)

SX 050

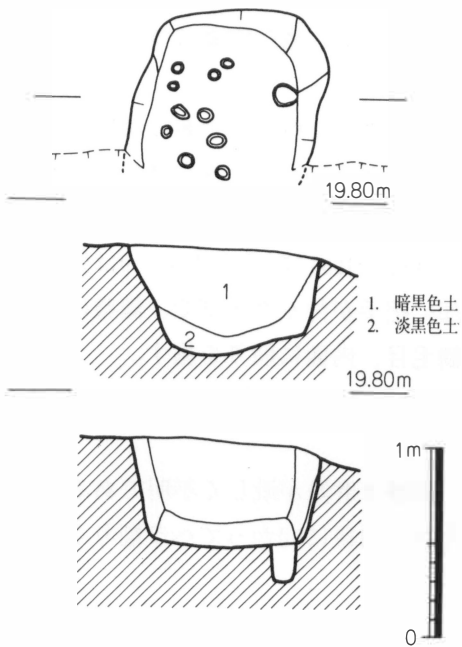


Fig.25 SX 050遺構実測図 (1/40)

SK 078

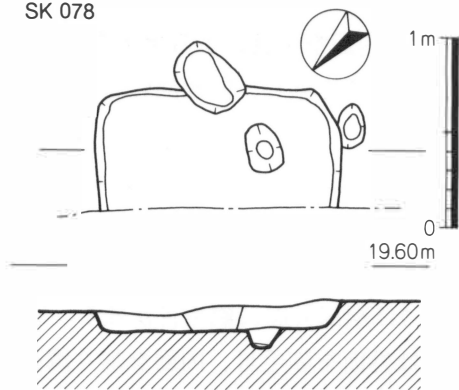


Fig.26 SK 078遺構実測図 (1/40)

SK 160

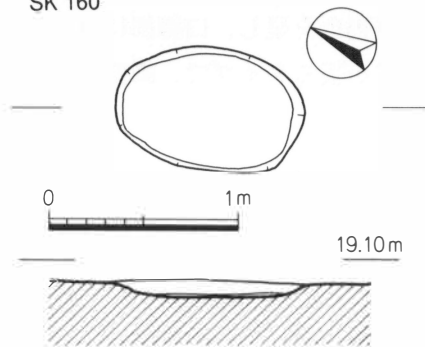


Fig.27 SK 160遺構実測図 (1/40)

3. 遺物

土器

竪穴住居出土遺物

SI001 (Fig. 28Pla.10)

土師器

坏 (1) 底部外面から体部を手持ちヘラ削り、口縁部から内面はヨコナデされる。底部内面は不定方向にナデが入る。口縁部を若干外反させる。

甕 (2) 胴部外面は粗い刷毛目、内面を横方向に粗くヘラ削りされる。

SI001カマド (Fig. 28Pla.10)

土師器

甕 (3) 胴部外面を刷毛目、口縁部をヨコナデ、胴部内面をヘラ削りによって調整される。

SI005 (Fig.28Pla.10)

土師器

甕 (1・2) 1は胴部外面を粗い刷毛目、内面をヘラ削りされる。2の調整は磨耗が著しく不明である。

SI010 (Fig.28・29Pla.10・11)

須恵器

蓋 (1・2) 1は扁平化した宝珠形のつまみが付く。調整は天井部は回転ヘラ削り、口縁部分をヨコナデ、内面を不定方向のナデを施す。口縁部は断面三角形を呈す。還元不良で内面以外は赤褐色で軟質である。2は口縁部片で、天井部を回転ヘラ削り、口縁部をヨコナデで仕上げる。

土師器

坏 (3・6) 3は内面を工具によるナデを施す。外面は磨耗が激しく不明である。6は外面を手持ちヘラ削り後、丁寧なナデを施し、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面はコテあてによる調整を行う。

皿 (4・5) 4は体部内面から口縁部にかけてヨコナデ、外面は磨耗のため不明であるが、赤色顔料が塗布される。5は体部外面から底部外面にかけて手持ちヘラ削り後ナデを行い、内面はヨコナデで口縁部を若干外反させる。

甕 (7~12) 7は胴部外面に刷毛目が残る。8は胴部外面に刷毛目、内面に削りを施す。9は外面に刷毛目が残る。10は外面を刷毛目、内面を削り調整する。11は胴部に把手が付くタイプで、調整は外面を刷毛目、内面は口縁部に向かってヘラ削りされる。12は外面を刷毛目、内面に削りを施す。

SI010住居内土壙 (Fig.29Pla.11)

土師器

坏 (13) 淡黄褐色を呈し、口縁部に向かって若干内湾する。調整は磨滅が激しく不明である。

甕 (14) 胴部が張るタイプで、調整は胴部外面に刷毛目、内面は口縁に向かってヘラ削りされる。内面には煤が付着する。

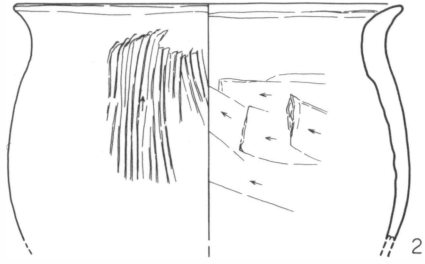
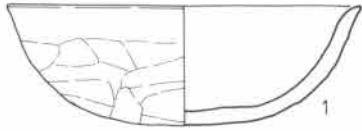
SI015 (Fig.29)

土師器

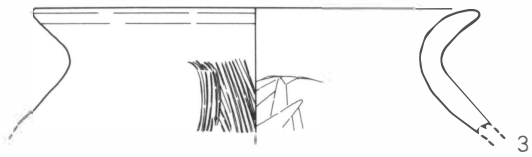
坏 (1) 口縁部、体部をヨコナデ、底部外面を手持ちヘラ削りされる。

甕 (2) 口縁部片で一部胴部が残り、内面にヘラ削りが施される。外面には厚く煤が付着する。

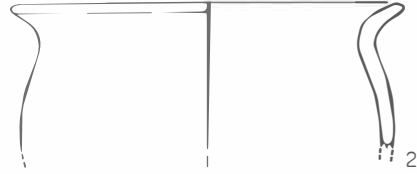
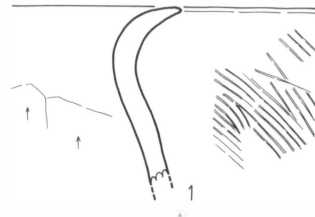
SI 001



SI 001カマド



SI 005



0 10cm

SI 010

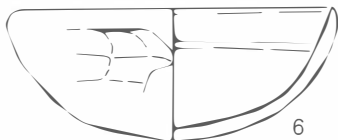
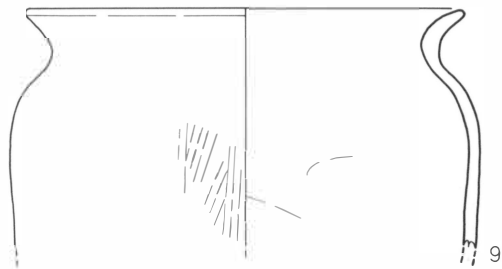
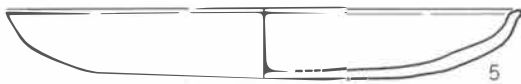
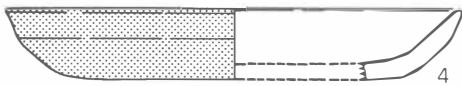
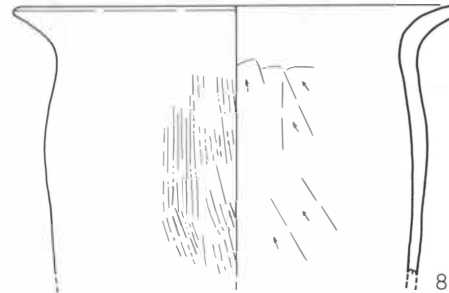
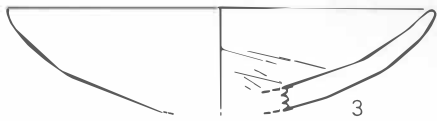
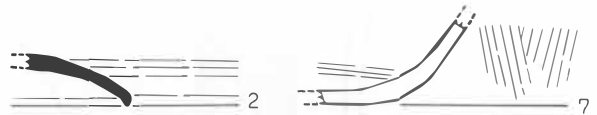
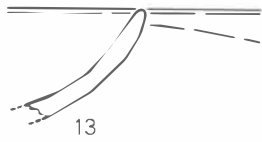
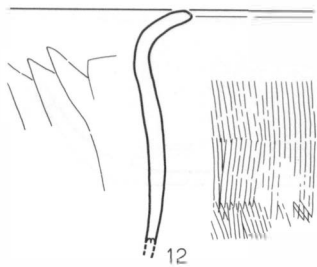
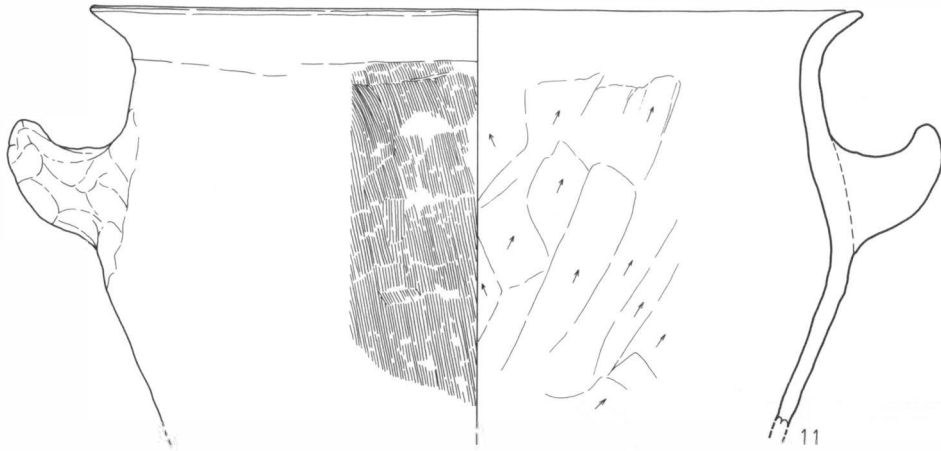
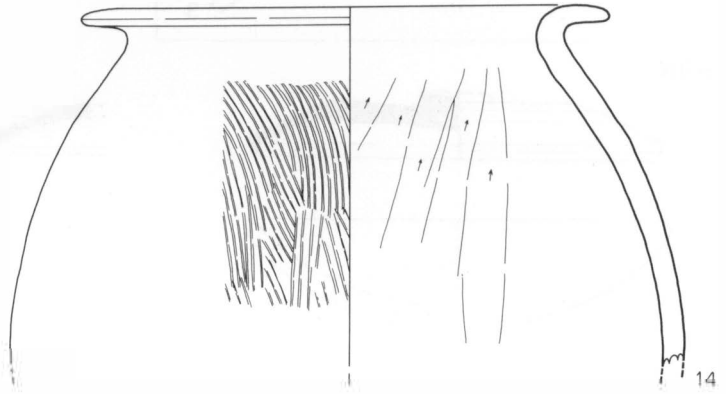


Fig.28 SI 001・005・010出土遺物 (1/3)

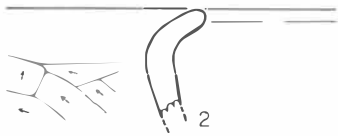
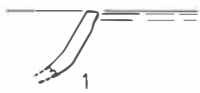
SI 010



SI 010住居内土壇



SI 015



0 10cm

SI 020

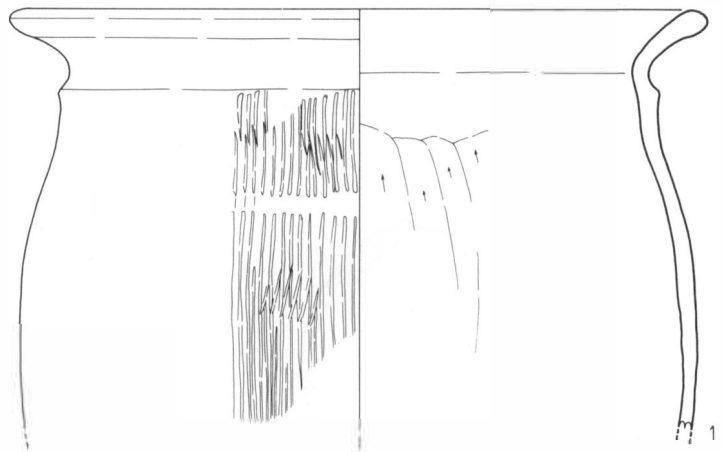


Fig.29 SI 010・住居内土壇・015・020出土遺物 (1/3)

SI020 (Fig.29Pla.11)

土師器

甕 (1) 外面は刷毛目、内面は口縁に向かってヘラ削りされる。胴部外面に煤が付着する。

SI035 (Fig.30Pla.11)

須恵器

蓋 (1) 内面はヨコナデ、外面は磨耗のため不明である。口縁は断面三角形である。

坏 (2) 無高台の坏で口縁、体部内外面はヨコナデ、底部外面は回転ヘラ切り、内面にはナデが施され、口縁内面に重ね焼き時の粘土片が付着する。

土師器、

坏 (3~9) 3は体部外面を手持ちヘラ削りし、内面はヨコナデしている。体部は内湾し口縁部を若干外反させる。4は体部内面を工具による調整痕が残る。5は内外面をヨコナデし、外面には赤色顔料が塗布される。6は体部外面に磨き痕が残る。7は口縁、体部内面をヨコナデ、体部外面をヘラ削りし、口縁部が外反する。外面には赤色顔料が塗布される。8の調整は磨耗が激しく不明である。9は体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削り、底部内面は工具による調整痕が残る。

甕 (10~15) 10は胴部下半、底部との境に指頭痕が残る。調整は底部外面をヨコナデする。11は外面を刷毛目、内面を口縁に向かってヘラ削りを施す。12は胴部外面を刷毛目、内面を口縁に向かって斜めにヘラ削りされる。13・14は胴部外面を刷毛目調整。胴部は張りがなく、13は外面に煤が付着する。15は底部片で、底部外面まで刷毛目が残る、煤が多量に付着する。

竈 (16) 底が残存していないが移動式竈と考えられる。体部外面から裾部にかけて刷毛目、裾の口縁付近は刷毛目後ヨコナデされる。内面に煤が付着する。

土錘 (17) 長さ4.7cm、最大径1.4cmを測り、両端は破損している。中央に直径約3mmの穿孔がある。

SI035屋内土壙 (Fig.30Pla.11)

土師器

甕 (18) 胴部外面は刷毛目、口縁部内面から胴部の残存している部分までヨコナデされる。外面は焼成不良で軟質であり、内面は黒く焼き締まる。

SI040 (Fig.31Pla.12)

須恵器

坏 (1) 高台が外方へ踏ん張る形状を呈し、体部から口縁にかけてやや外反する。体部調整はヨコナデされ、底部内面にナデを施す。

土師器

皿 (2) 底部が手持ちヘラ削りされ、口縁はヨコナデである。口縁部を外反させ外面に黒斑が残る。

坏 (3・4) 3は内外面をヨコナデ調整、4は体部外面をヘラ削りし、口縁部分を外反させる。

甕 (5~7) 5は胴部外面を刷毛目、内面を横方向にヘラ削りされる。胴部が張るタイプと考えられる。6は口縁部を殆ど屈曲させず成形している。外面は刷毛目、内面は横方向になでられる。7は外面を刷毛目、内面を口縁に向かってヘラ削りされる。口縁部外面から胴部にかけて黒斑が残る。

竈 (8) 裾部内外面をヨコナデ、体部内面にナデが入る。移動式竈と考えられる。

縄文土器 (9・10) 早期の押型文土器で、外面には粒の小さい楕円文が横方向に並ぶ。内面の調整は横方向のナデ。

SI 035

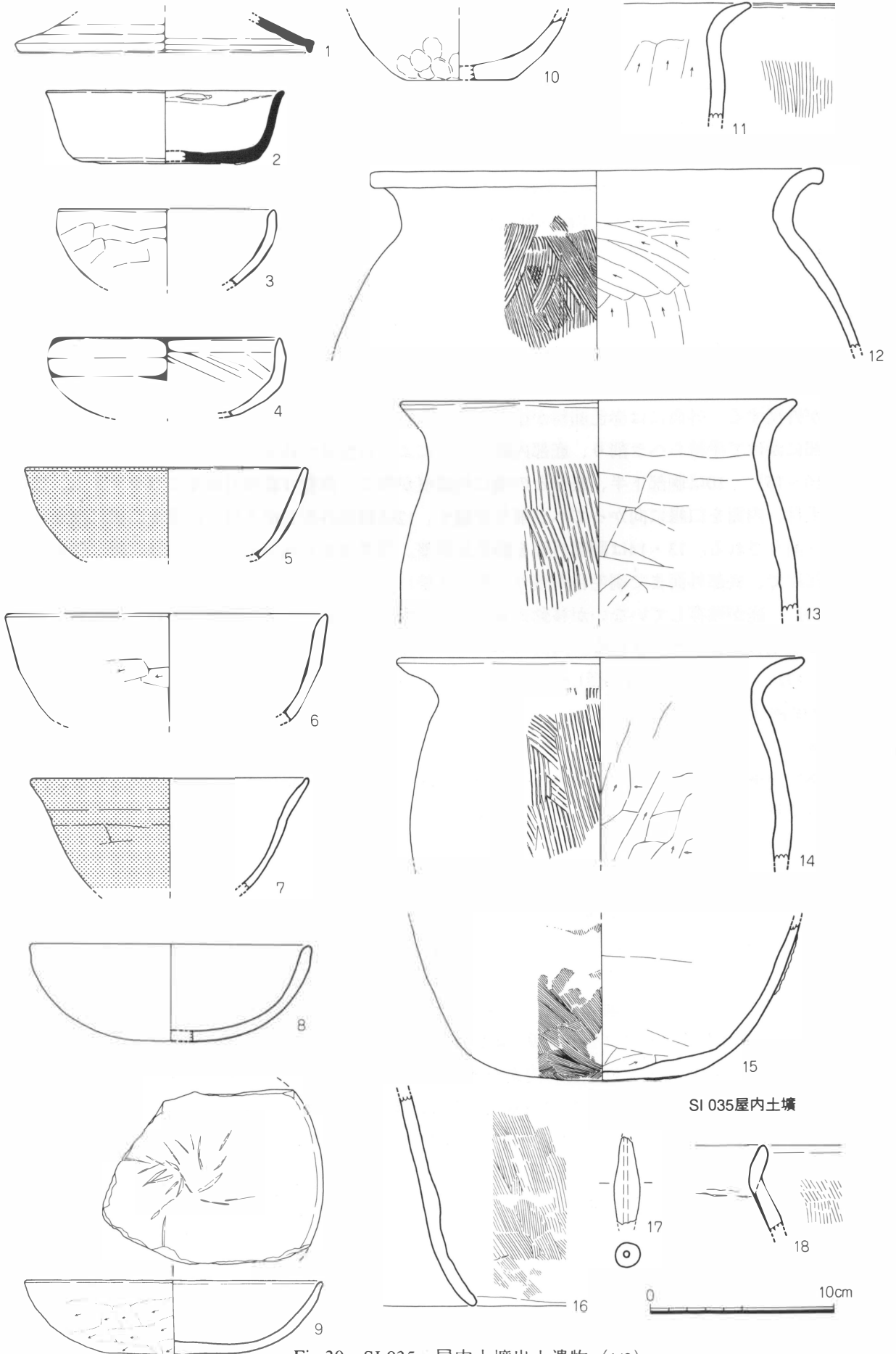
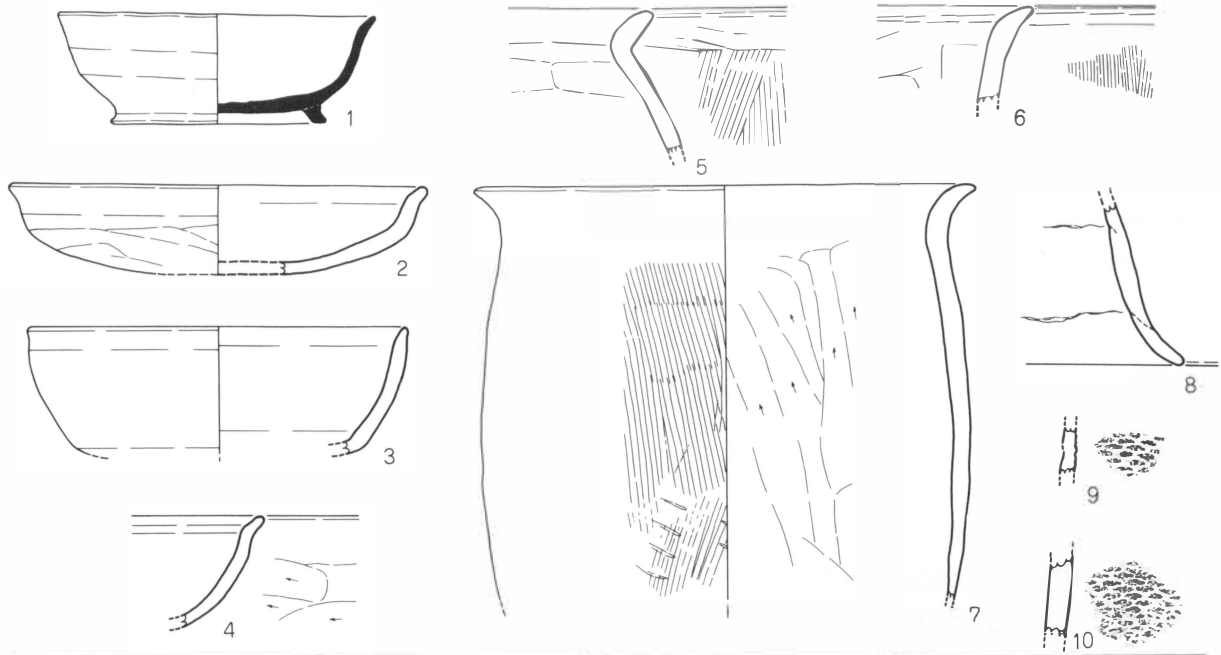
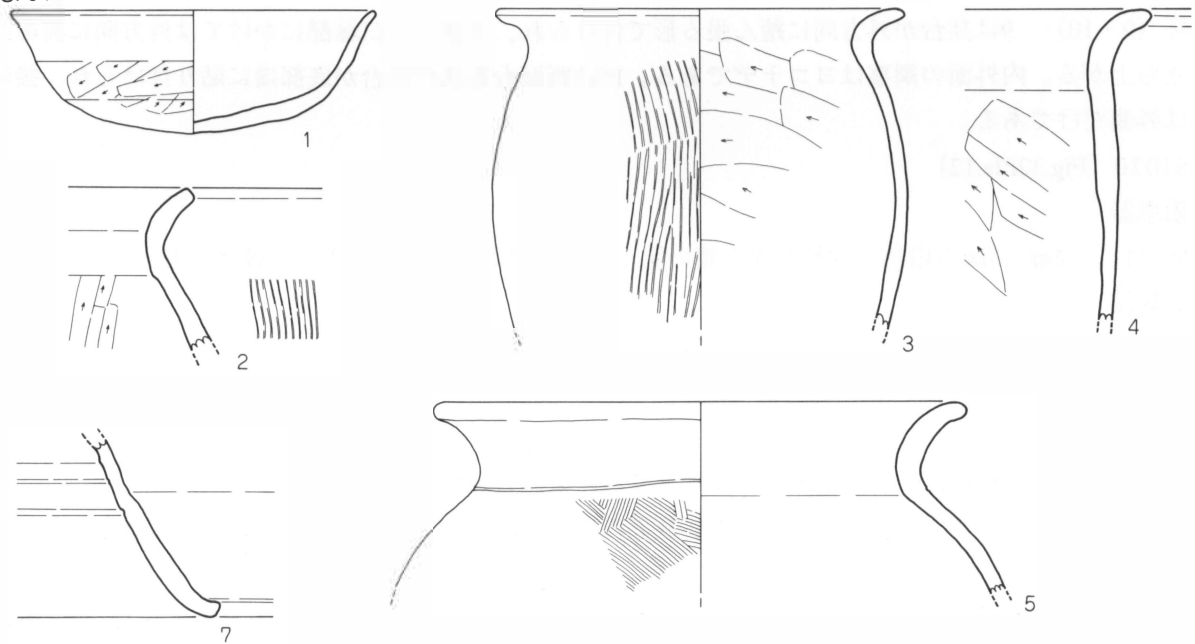


Fig.30 SI 035・屋内土壙出土遺物 (1/3)

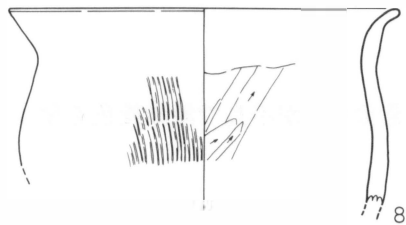
SI 040



SI 045



SI 045西カマド



SI 045北カマド

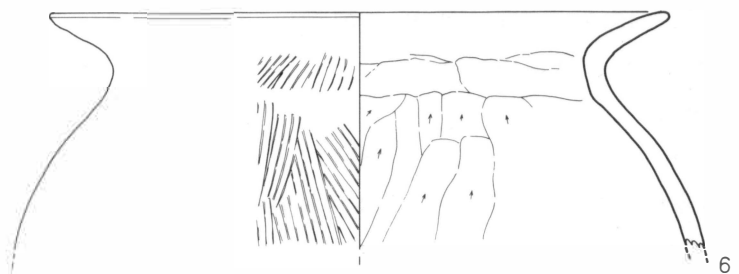
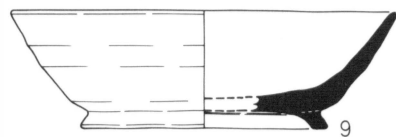


Fig31 SI 040・045・北・西カマド出土遺物 (1/3)

SI045 (Fig.31Pla.12)

土師器

坏 (1) 体部外面中程から底部にかけて手持ちヘラ削り、内面はヨコナデ、底部内面はナデである。焼成良好で硬く焼き締まる。底部外面に黒班が残る。

甕 (2~6) 2は胴部外面を刷毛目、内面は口縁に向かってヘラ削り後、口縁部分をヨコナデ調整する。3は口縁を大きく外反させ内面は横方向に削られる。4は外面に黒班が残るが調整は磨耗のため不明である。内面は斜め方向に削られる。5は胴部が張るタイプで、外面は刷毛目で頸部に横方向の口縁部調整のナデ痕が残る。6は口縁部が大きく外反し、外面を刷毛目、内面を口縁方向に削る。胴部が張るタイプ。

竈 (7) 裾部のみ残存し、移動式竈と考えられる。外面は細い刷毛目後、口縁部調整のヨコナデ、内面は強く横方向にナデが入る。

SI045西カマド (Fig.31Pla.12)

甕 (8) カマド支脚に用いられた小型甕で、復元口径15.8cmを測る。外面は剥離が激しいが刷毛目が若干残り、内面は斜めに削られる。

SI045北カマド (Fig.31Pla.12)

須恵器

坏 (9・10) 9は高台が外方向に踏ん張る形で付けられ、体部から口縁部にかけては外方向に直線的に立ち上がる。内外面の調整はヨコナデである。10は断面台形状の高台が底部端に貼り付けられ、接地面は外側だけである。

SI070 (Fig.32Pla.12)

須恵器

坏 (1) 2mm~3mmの白色小砂粒を含む粗い胎土で、体部が直線的に開き、口縁部で若干外反する。

土製品

土錘 (2) 長さ6.6cm、最大径1.5cmで直径約4mmの穿孔がある。

SI080 (Fig.32Pla.12)

須恵器

蓋 (1) 口縁部細片で、内外面ともヨコナデされ、焼成良好で硬質である。

坏 (2) 無高台の坏で、体部はヨコナデ、底部内面部分はナデ、底部外面は回転ヘラ切りされる。

土師器

甕 (3~5) 3は胎土が粗く、内面は横方向に削られる。4は口縁部片で角閃石を多く含む。5は外面刷毛目、内面を口縁部に向かって削る。

SI100 (Fig.32Pla.12・13)

須恵器

坏 (1・2) 1は高台部分が剥離しており、体部はやや内湾する。還元焼成が不良で淡赤褐色を呈する。2は細片で内面はヨコナデ、外面は磨耗のため不明である。

土師器

皿 (3・4) 3・4は内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、外面底部は手持ちヘラ削りされる。4は外面に赤色顔料が塗布される。

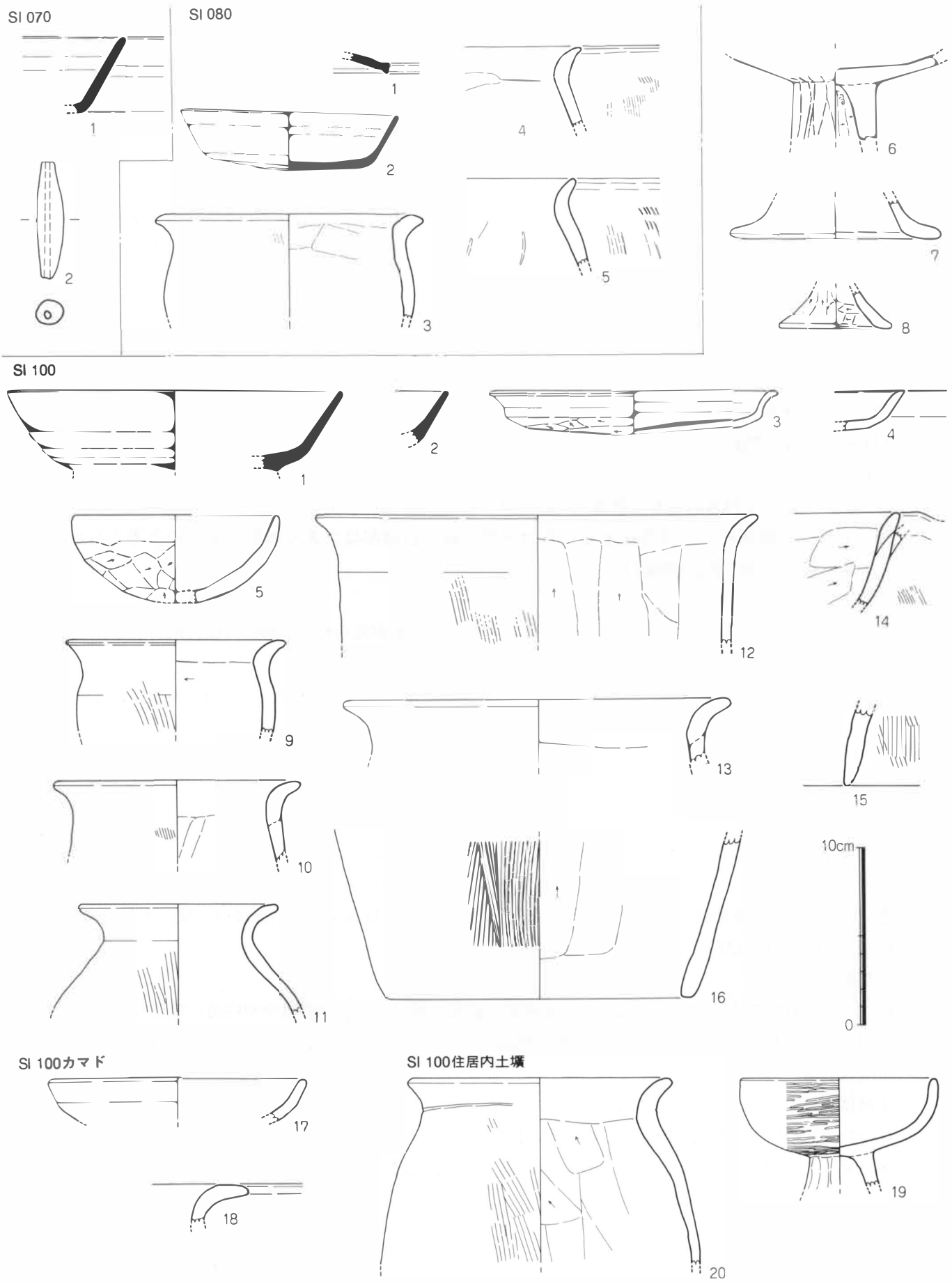


Fig.32 SI 070・080・100・カマド・住居内土壙出土遺物 (1/3)

坏 (5) 体部内面から口縁外面にかけてヨコナデ、体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削りされる。
高坏 (6~8) 6は坏部内面はナデ、脚部外面は縦方向のヘラ削りで、体部外面から脚部に赤色顔料が塗布される。7は脚部小片で、外面は磨きが入り赤色顔料を塗布される。内面は横方向にヘラ削りされる。8はカマド内資料と接合したが、カマド内での遺物の取り上げが不明確であった為、ここで報告する。

甕 (9~13) 9は小甕で、外面刷毛目、内面は横方向に削る。口縁部分から一部黒班が見られる。10は小片で、外面刷毛目、内面は縦方向に削る。外面に煤が付着する。11は胴部が大きく張る甕で、胴部外面は刷毛目、内面は横方向になでる。12は胴部外面を刷毛目、内面を口縁に向かって削る。口縁部分はヨコナデ、張りのない胴部から口縁部が緩く外反する。13は口縁部片で調整はヨコナデである。

鉢 (14) 体部外面は刷毛目で、片口部分に黒班が見られ、内面は横方向に削る。口縁部分はヨコナデされる。

甗 (15・16) 15・16は体部外面は刷毛目、内面は裾部に向かって削られ、裾端部はヨコナデされる。16は外面に黒班が見られる。

SI100カマド (Fig.32)

土師器

坏 (17) 小片で内外面ともに磨滅のため不明。

甕 (18) 口縁部片で、内外面ともにヨコナデされ、口縁部は大きく外反するものと考えられる。

SI100住居内土壙 (Fig.32Pla.13)

土師器

高坏 (19) 坏部外面に細かい磨きが入り、口縁部分に黒班が見られる。脚部は縦方向に削られる。坏部、脚部外面に赤色顔料が塗布される。

甕 (20) 口縁部と胴部の境に調整時のものと見られる工具による沈線が入り、胴部外面は刷毛目、内面は口縁部に向かって削られる。

SI110 (Fig.33Pla.13)

土師器

皿 (1・2) 1は小片で口縁端部を外につまみ出す。調整は磨耗のため不明である。2は体部内面から口縁部外面にかけてヨコナデ、底部外面を手持ちヘラ削りされる。

高坏 (3) 脚部小片で、脚部内面をナデ、端部をヨコナデ調整する。

甕 (4) 胴部に張りがなく口縁部の外反も小さい。胴部外面は刷毛目、内面は削り後、ナデが入る。

SI155 (Fig.33Pla.13)

須恵器

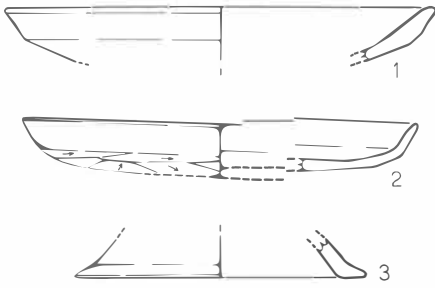
坏 (1) SI170出土片と接合する。高台が体部と底部の境に付き、体部はやや内湾しながら口縁部が直線的に開く。体部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は高台接合後、ナデが入る。淡灰茶色で焼成良好。

土師器

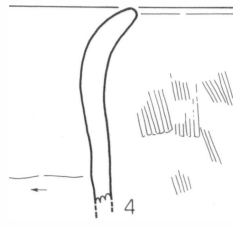
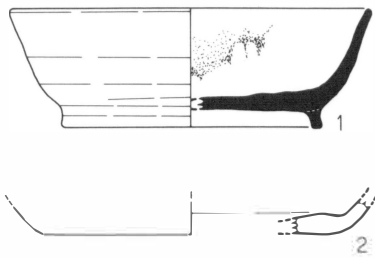
坏 (2) 小片で、調整は磨滅のため不明である。

甕 (3) 口縁部が緩く外反し、胴部外面は刷毛目、内面は横方向にナデが入る。

SI 110



SI 155



SI165 (Fig.34)

須恵器

蓋 (1・2) 1は天井部分に回転ヘラ削りを施し、体部内外面はヨコナデ、端部断面は丸みを帯びた三角形である。内外面とも淡青灰色で焼成良好。2は小片で天井部は回転ヘラ切りのままで、体部内外面はヨコナデ、口縁端部は断面三角形である。やや還元不良で淡灰白色を呈する。

SI165屋内土壌 (Fig.34)

土師器

皿 (3) 小片で体部が直線的にひらく。調整は磨耗が著しく不明である。



Fig.33 SI 110・155出土遺物 (1/3)

SI170 (Fig.34)

須恵器

蓋 (1) 小片で口縁端部は丸みを帯びる。重ね焼きによる付着物が体部内面に見られる。

土師器

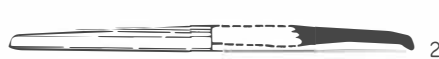
甕 (2) 胴部外面は刷毛目、内面は口縁に向かって斜めに削られる。胎土に角閃石を多量に含む。

SI170カマド (Fig.34)

土師器

甕 (3) 口縁部分の屈曲が強く、胴部は薄く仕上げられる。胴部外面は刷毛目、内面は横方向に削られた後、口縁に向かって縦方向にも削られる。

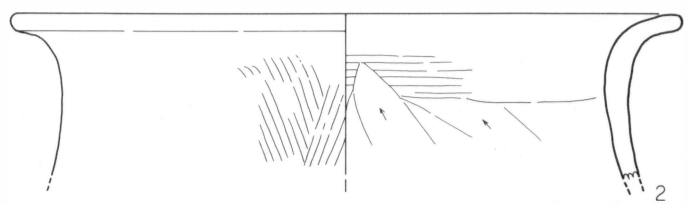
SI 165



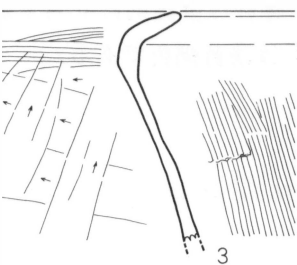
SI 165屋内土壌



SI 170



SI 170カマド



SI 170屋内土壌

SI 180カマド

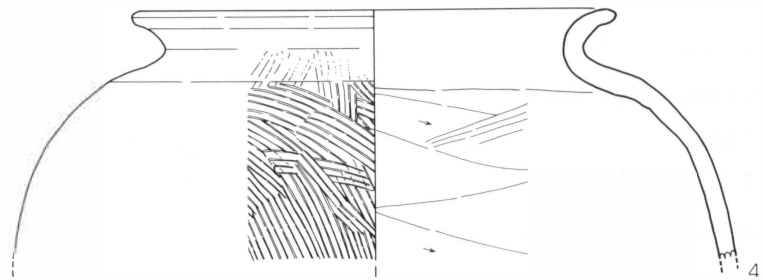
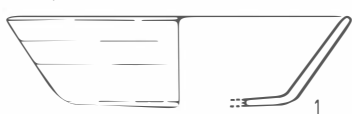


Fig.34 SI 165・屋内土壌・170・180カマド出土遺物 (1/3)

SI170屋内土壙 (Fig.34Pla.13)

土師器

甕 (4) 口縁部が大きく屈曲し、胴部が張る。外面を刷毛目、内面を横方向に削り後、ナデが入る。内外面とも煤が付着。

SI180カマド (Fig.34Pla.13)

土師器

坏 (1) 底部はヘラ削りされ体部は直線的にひらく。体部内外面はヨコナデ、口縁外面に黒班が残る。

土壙出土遺物

SK160 (Fig.35Pla.13)

土師器

坏 (1・2) 1・2とも底部外面回転ヘラ削りを施す。1は体部がやや内湾し、口縁部分で若干外反する。2は直線的にひらき、口縁部分に黒班が見られる。

甗 (3) 小片で外面を口縁付近までヘラ削りする。内面は横方向にナデを施し、一部黒班が見られる。口縁端部は面取りをしているため、粘土が内面に向かって移動している。

その他の遺構出土遺物

SX013 (Fig.35)

須恵器

大甕 (1) 胴部片で、外面を格子叩き、内面は平行と同心円のあて具痕が残る。

SX017 (Fig.35Pla.13)

土師器

皿 (1) 底部は回転ヘラ切り、体部外面から内面にかけてヨコナデ調整。

SX024 (Fig.35)

土師器

坏 (1) 底部から体部の一部までヘラ削りされる。体部は直線的にひらき、口縁端部を丸く成形する。

SX027 (Fig.35)

土師器

甕 (1) 胴部が張り、外面は細かい刷毛目、内面は横方向にナデが入る。胎土に角閃石を多く含む。

SX053 (Fig.35Pla.14)

土師器

坏 (1) 高台が削り出される坏で、体部外面中程まで削りが入る。体部は直線的に立ち上がる。胎土は細かくよく精選されている。焼成は良好で、外面は淡橙褐色、内面は淡黄褐色である。

SX058 (Fig.35)

土師器

大坏 (1) 長い高台が付く坏で内面に調整時のコテあて痕が残る。体部外面はヨコナデ調整。

SX081 (Fig.35Pla.14)

土師器

皿 (1) 底部外面を手持ちヘラ削り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面を不定方向のナデが入る。口縁端部外につまみ出される。

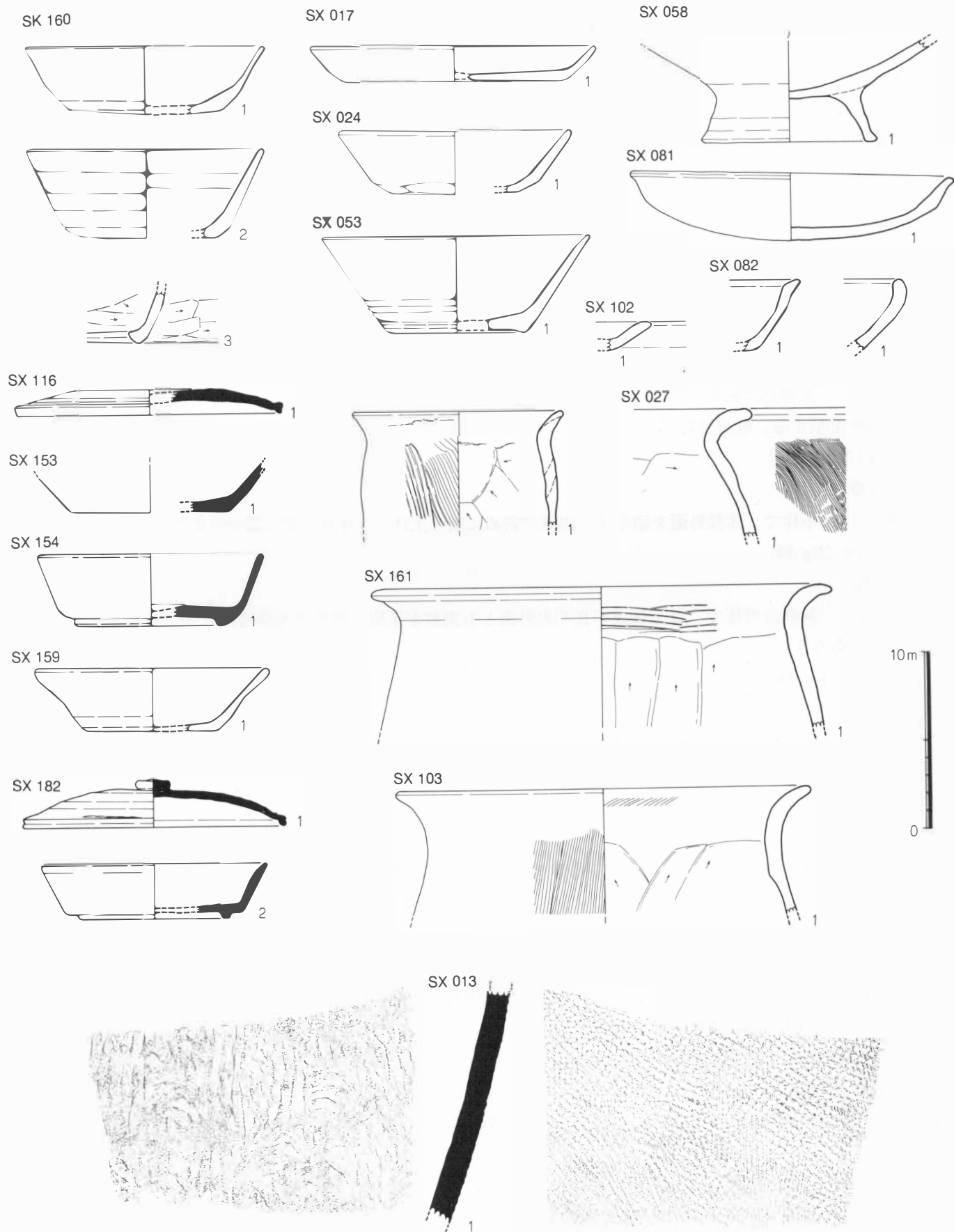


Fig35 SK 160・その他の遺構出土遺物 (1/3)

SX082 (Fig.35)

土師器

坏 (1) 口縁部を外方に折り曲げ、面取りをしている。体部内面は斜めにナデ、口縁部外面はヨコナデされる。

SX102 (Fig.35)

土師器

皿 (1) 口縁部小片で、内外面ともヨコナデ、一部黒班が付く。

SX103 (Fig.35)

土師器

甕 (1) 外面は刷毛目、内面は斜めに削られる。胎土に角閃石を多く含む。外面に煤が付着する。

SX116 (Fig.35)

須恵器

蓋 (1) 天井部は回転ヘラ削りされ、体部外面から体部内面にかけてヨコナデされ、口縁端部は断面三角形を呈する。焼成良好で淡灰白色を呈する。

SX117 (Fig.35)

土師器

甕 (1) 小片で、体部外面を刷毛目、内面を斜めに削り上げる。体部外面に煤が付着する。

SX153 (Fig.35)

須恵器

坏 (1) 無高台の坏で、還元焼成不良で内外面とも調整が不明。体部が直線的に立ち上がるタイプのものであろう。

SX154 (Fig.35)

須恵器

坏 (1) 断面台形の高台が底部のやや内よりに付き、体部が真っ直ぐ立ち上がり、口縁部分でやや外反する。口縁端部は丸みを帯びる。焼成良好で淡青灰色を呈する。

SX159 (Fig.35)

土師器

坏 (1) 底部から体部の境にかけて回転ヘラ削りを施し、体部外面から内面にかけてヨコナデ調整。体部中程から口縁にかけて外反し、口縁は丸みを帯び、外面に黒班が見られる。

SX161 (Fig.35)

土師器

甕 (1) 内面を口縁に向かって削り上げ、口縁部中程は横方向にナデが入る。外面の調整は不明であるが、煤が付着する。

SX162 (Fig.35)

土師器

鉢 (1) 体部から口縁部に向かって内湾し、口縁端部は丸く成形される。内外面ともヨコナデ調整。

SX182 (Fig.35Pla.14)

須恵器

蓋 (1) 天井部はヘラ切り後、擬宝珠状のつまみを付け、ナデが入る。口縁端部は丸みを帯びた断面三角形で、外面に重ね焼き時の粘土片が付着する。焼成良好で淡青灰色を呈する。

坏 (2) 断面台形の高台が底部内よりに付けられる。体部はひらき気味に立ち上がり、口縁部分で若干外反する。焼成良好で内外面とも淡灰白色を呈する。

茶褐土・攪乱（葡萄棚溝）・トレンチ出土遺物は観察表を参照されたい。

茶褐土出土遺物は、遺構検出の為に除去した包含層から出土した遺物である。

攪乱出土遺物は、調査区内を縦横に切る葡萄棚の溝から出土した遺物である。

石器

SI030 (Fig.39)

砥石 (1) 長さ5.2cm、幅3.8cm、厚さ1.2cm。石材は泥岩で直径約6mmの穿孔がある。破損部にも同じ様な穿孔がある。4面使用される。

SK078 (Fig.39)

砥石 (2) 長さ4.0cm、幅4.7cm、厚さ3.0cm。石材は砂岩。

SI165 (Fig.39)

紡錘車 (3) 縦4.4cm、横5.1cm厚さ0.7cm。穿孔が未完結な紡錘車で、石材は変岩である。

攪乱 (Fig.39)

砥石 (4) 長さ7.1cm、幅5.4cm、厚さ2.2cm。石材は泥岩。折損しているがその面も使用している。

トレンチ (Fig.39)

叩き石 (5) 長さ11.8cm、幅5.2cm、厚さ2.7cm。石材は変岩で、丸みを帯びた部分に敲打痕が残る。

表土 (Fig.39)

石鏃 (6) 長さ2.6cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm。黒曜石の剥片鏃。

金属製品

SI045 (Fig.40)

釘 (1) 鉄製釘。先端部を欠損している。残存長4.4cm。断面は四角形。

SI070 (Fig.40)

釘 (1) 鉄製釘。先端部を欠損している。残存長5.1cm。

刀子 (2) 残存長6.0cm。両端を欠損している。

器種不明 (3) 鉄製で断面は輪状になり、完形品である。

SI105 (Fig.40)

刀子 (1) 残存長6.2cm、両端を欠損する。刃の幅約1.5cm。

茶褐色土①

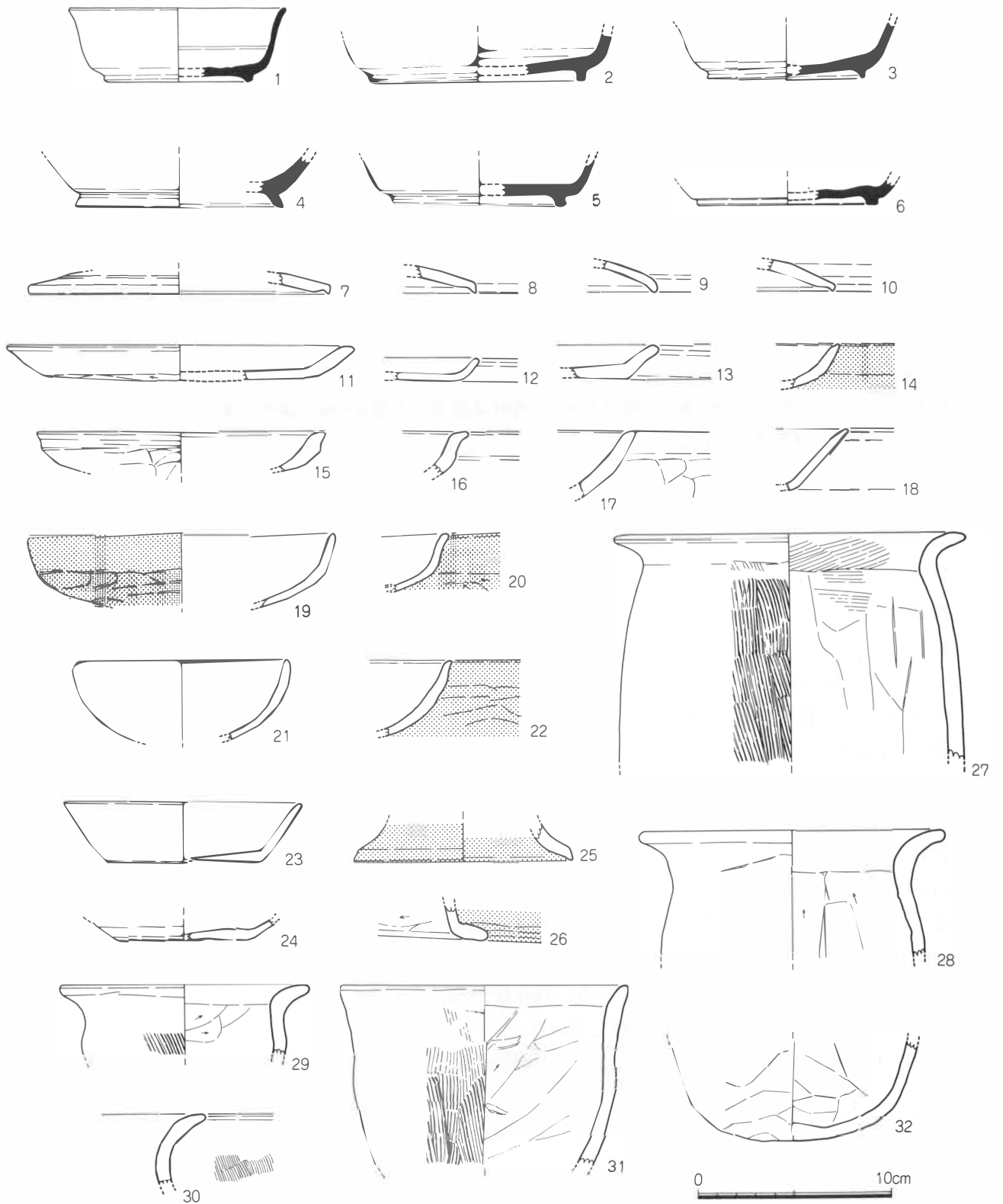
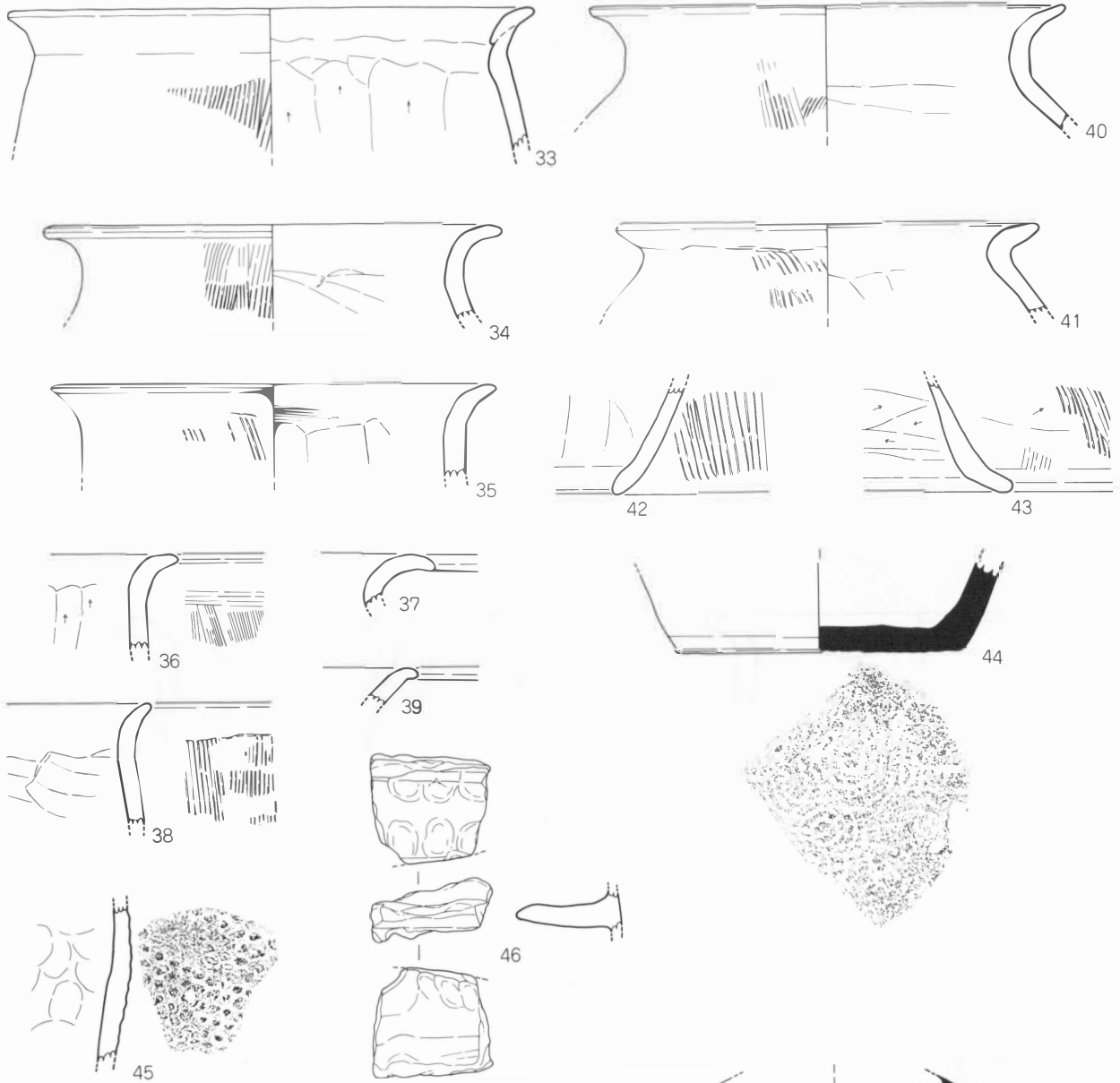


Fig36 茶褐色土出土遺物① (1/3)

茶褐色土②



攪乱

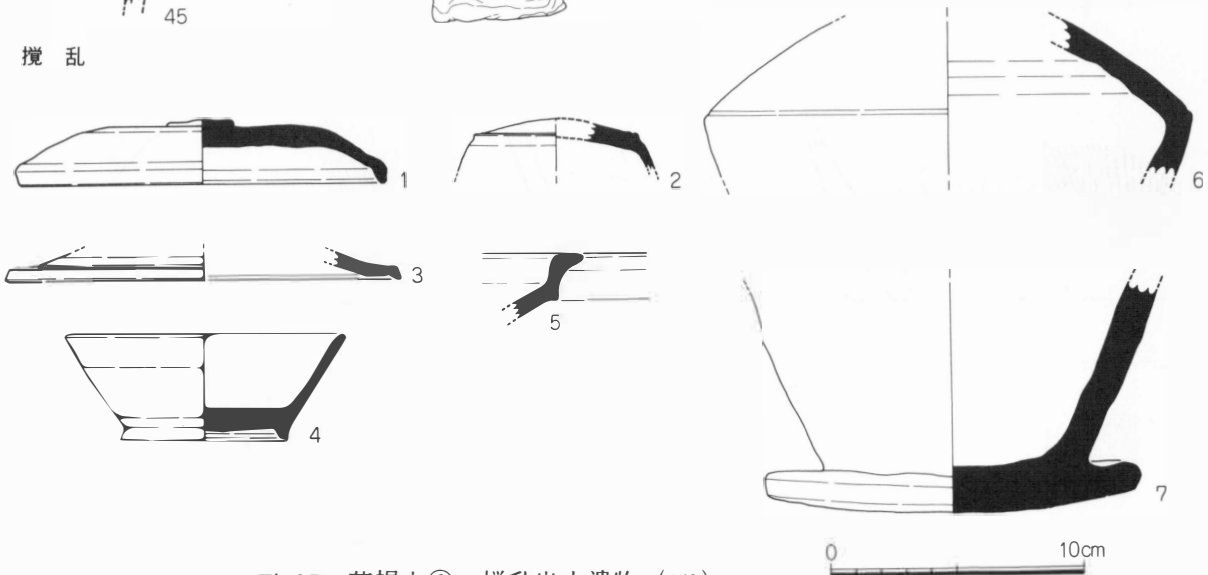


Fig37 茶褐色土②・攪乱出土遺物 (1/3)

攪乱

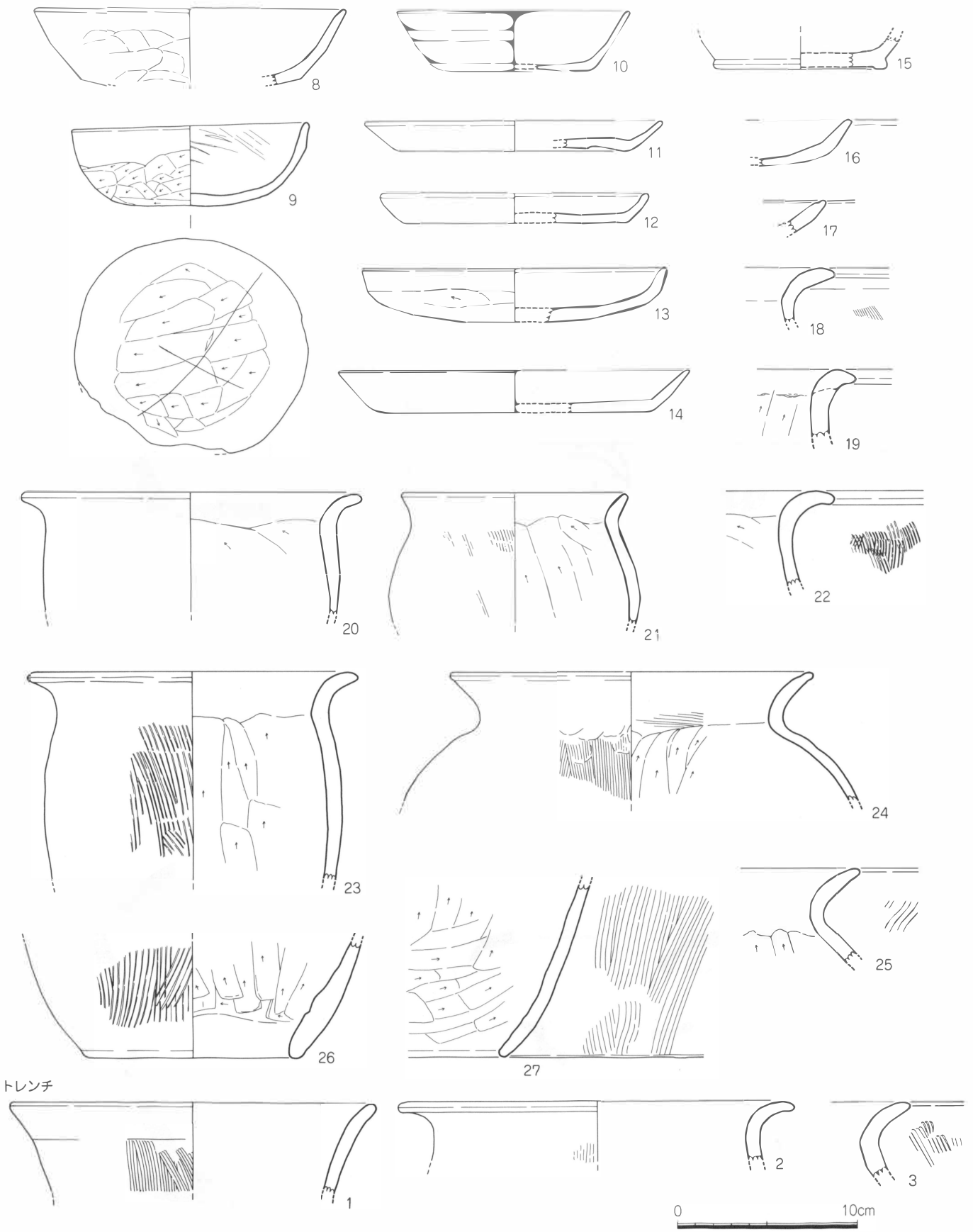
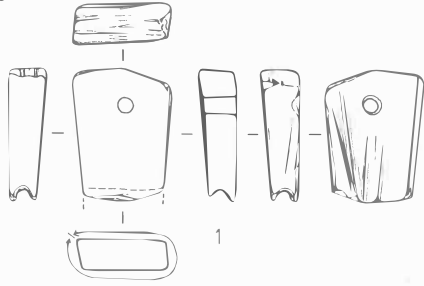
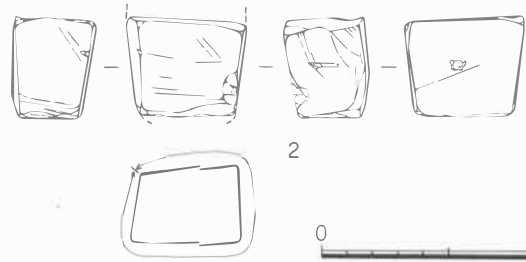


Fig38 攪乱・トレンチ出土遺物 (1/3)

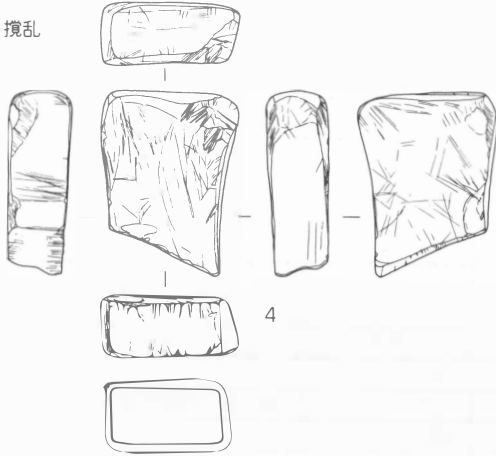
SI 030



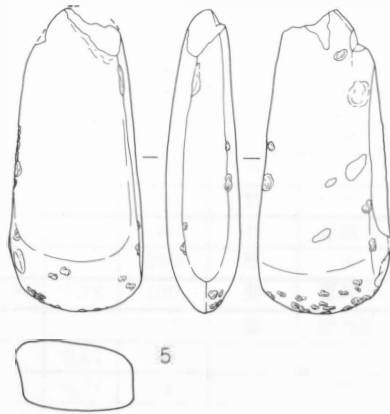
SK 078



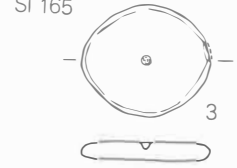
攪乱



トレンチ



SI 165



表土

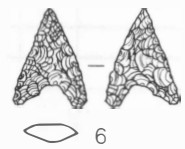
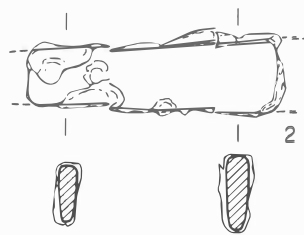
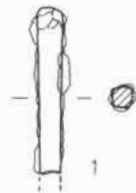
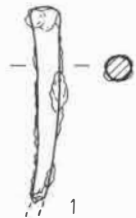


Fig39 石器実測図 (1/3 · 1/2)

SI 045



SI 070



SI 105

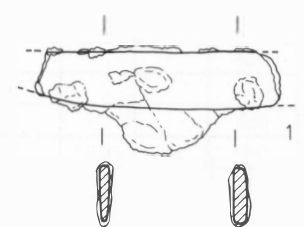


Fig40 鉄製品実測図 (1/2)

Tab.2 遺物観察表(1)

【単位はcm、°は復原値、+は欠損】

遺構	Fig.	番号	名称	器種	R番号	口径	器高	底径	残存	備考
SI001	28	1	土師器	坏	002	14.0°	4.7	7.1	口縁1/4欠	手持ちヘラ
〃	28	2	〃	甕	001	15.3°	9.3+		口縁1/8	
SI001カマド	28	3	〃	〃	001	17.6°	4.9+		口縁1/6	
SI005	28	1	土師器	甕	001		7.0+		口縁片	
〃	28	2	〃	〃	002	15.6°	5.8+		口縁1/4	
SI010	28	1	須恵器	蓋	011	16.5°	2.6		口縁1/2欠	
〃	28	2	〃	〃	012		2.0+		口縁片	
〃	28	3	土師器	坏	003	17.0°	4.1+		口縁1/6	内面工具によるナデ
〃	28	4	〃	皿	006	18.0°	2.8+		口縁1/3	外面丹塗り
〃	28	5	〃	〃	002	20.4°	2.8	14.6	口縁1/4	外面ヘラけずり
〃	28	6	〃	坏	001	13.0°	5.2		1/2欠	手持ちヘラ
〃	28	7	〃	甕	009		3.4+		底部片	
〃	28	8	〃	〃	008	17.6°	10.6+		口縁1/4	
〃	28	9	〃	〃	010	17.3°	9.3+		口縁1/3	
〃	28	10	〃	〃	007		7.1+		口縁片	
〃	29	11	〃	〃	004	30.6°	16.5+		口縁1/4	把手付甕
〃	29	12	〃	〃	005		9.2+		口縁片	
SI010住居内土壙	29	13	〃	坏	002		4.4+		口縁片	
〃	29	14	〃	甕	001	20.8°	14.3+		口縁1/2	
SI015	29	1	土師器	坏	001		2.6+		口縁片	
〃	29	2	〃	甕	002		4.3+		口縁片	
SI020	29	1	土師器	甕	001	27.4°	16.5+		口縁・体部1/4	
SI035	30	1	須恵器	蓋	019	16.0°	1.9+		口縁1/8	
〃	30	2	須恵器	坏	004	13.0°	4.0	10.0°	1/2欠	口縁内面、底部外面に重ね焼き付着物
〃	30	3	土師器	〃	007	11.9°	4.2+		口縁1/4	
〃	30	4	〃	〃	001	12.5°	4.25+		口縁1/3	
〃	30	5	〃	〃	008	15.6°	5.0+		口縁1/5	外面に丹塗り
〃	30	6	〃	〃	002	17.6°	5.8+		口縁1/4	
〃	30	7	〃	〃	009	15.2°	6.0+		口縁1/6	外面に丹塗り
〃	30	8	〃	〃	005	15.4	5.3		3/4欠	
〃	30	9	〃	〃	006	16.3°	4.0		口縁3/4欠	
〃	30	10	〃	甕	013		3.4+	6.0+	底部1/2	
〃	30	11	〃	〃	003		6.2+		口縁片	
〃	30	12	〃	〃	011	24.6°	9.7+		口縁1/4	
〃	30	13	〃	〃	016	22.6°			口縁1/8	
〃	30	14	〃	〃	010	22.4°	11.1+		口縁1/3	
〃	30	15	〃	〃	012		8.5+		底部のみ	
〃	30	16	〃	カマド?	014		11.3+		底部片	
〃	30	17	土製品	土錘	015		4.6+		1/4欠	
SI035屋内土壙	30	18	土師器	甕	001				口縁片	
SI040	31	1	須恵器	坏	001	12.5	4.3	8.5	1/2欠	
〃	31	2	土師器	皿	006	16.6°			口縁1/4	
〃	31	3	〃	〃	007	15.1°			口縁1/6	
〃	31	4	〃	〃	008				口縁片	
〃	31	5	〃	甕	004				口縁片	
〃	31	6	〃	〃	005				口縁片	
〃	31	7	〃	〃	002	19.8°	16.2+		口縁1/4	
〃	31	8	〃	カマド?	003		6.7+		底部片	
〃	31	9	縄文土器	鉢	010				胴部片	早期、押型文土器
〃	31	10	〃	〃	009				胴部片	早期、押型文土器
SI045	31	1	土師器	坏	003	14.4°	4.9	10.2	2/3欠	
〃	31	2	〃	甕	005			6.5+	口縁1/8	
〃	31	3	〃	〃	002	16.2	12.6+		口縁1/4	
〃	31	4	〃	〃	007		12.2+		口縁片	
〃	31	5	〃	〃	001	21.0°	6.5+		口縁1/5	
〃	31	6	〃	〃	006	24.4°	9.3+		口縁1/8	
〃	31	7	〃	カマド?	004		7.0+		底部片	

Tab.2 遺物観察表(2)

【単位はcm、・は復原値、+は欠損】

遺構	Fig.	番号	名称	器種	R番号	口径	器高	底径	残存	備考
SI045西カマド	31	8	土師器	甕	001	15.8	7.6+	-	2/3欠	
SI045北カマド	31	9	須恵器	坏	002	15.2°	4.6	9.7°	1/4欠	
〃	31	10	〃	〃	001	-	1.5+	9.4°	底部1/8	
SI070	32	1	須恵器	坏	002	-	4.2+	-	口縁片	
〃	32	2	土製品	土錘	001	-	6.6	-	完形	
SI080	32	1	須恵器	蓋	005	-	1.15+	-	口縁片	
〃	32	2	〃	坏	004	12.3	3.3	9.3	口縁1/2欠	
〃	32	3	土師器	甕	001	15.2°	5.8+	-	口縁1/3	
〃	32	4	〃	〃	003	-	4.5+	-	口縁片	
〃	32	5	〃	〃	002	-	4.9+	-	口縁片	
SI100	32	1	須恵器	坏	001	19.0°	4.5+	-	体部1/8	
〃	32	2	〃	坏	002	-	3.0+	-	口縁片	
〃	32	3	土師器	皿	004	16.4°	2.5	14.5°	4/5欠	
〃	32	4	〃	〃	005	-	2.3+	-	小片	
〃	32	5	〃	坏	003	11.8°	5.0°	-	2/3欠	
〃	32	6	〃	高坏	007	-	-	-	体・脚部片	
〃	32	7	〃	〃	008	-	2.1+	12.0	裾部小片	
〃	32	8	〃	〃	009	-	2.0+	6.4°	裾部1/2	カマド出土片と接合
〃	32	9	〃	甕	011	12.4°	5.2+	-	口縁1/4	
〃	32	10	〃	〃	012	14.0°	4.6+	-	口縁小片	
〃	32	11	〃	〃	010	11.2°	6.2+	-	口縁片	
〃	32	12	〃	〃	014	25.0°	7.3+	-	口縁片	
〃	32	13	〃	〃	013	22.0°	3.7+	-	口縁小片	
〃	32	14	〃	鉢	006	-	5.2+	-	口縁小片	片口鉢
〃	32	15	〃	甕	016	-	4.0+	-	底部小片	
〃	32	16	〃	〃	015	-	9.0+	17.4°	底部片	
SI100カマド	32	17	〃	坏	001	14.6°	2.3+	-	口縁片	
〃	32	18	〃	甕	002	-	2.0+	-	口縁小片	
SI100住居内土壌	32	19	〃	高坏	001	11.2	6.0+	-	脚部欠	坏部外面にミガキ
〃	32	20	〃	甕	002	15.0°	10.3+	-	口縁片	
SI110	33	1	土師器	皿	002	17.0°	2.2+	-	口縁片	
〃	33	2	〃	〃	001	15.6°	2.2°	14.4°	口縁、体部片	
〃	33	3	〃	高坏	004	-	-	11.4	裾部小片	
〃	33	4	〃	甕	003	-	7.5+	-	口縁片	
SI155	33	1	須恵器	坏	001	14.2°	4.7	10.2°	1/2欠	SI1170出土片と接合
〃	33	2	土師器	皿	002	-	-	12.0°	底部のみ	
〃	33	3	〃	甕	003	-	6.5+	-	口縁片	
SI165	34	1	須恵器	蓋	001	16.6°	1.7+	-	3/4欠	
〃	34	2	〃	〃	002	16.0°	1.0+	-	小片	
SI165屋内土壌	34	3	土師器	皿	001	-	1.6+	-	小片	
SI170	34	1	須恵器	蓋	002	11.6°	-	-	小片	
〃	34	2	土師器	甕	001	26.4°	6.4+	-	口縁片	
SI170カマド	34	3	〃	〃	001	-	9.0+	-	口縁、体部片	
SI170屋内土壌	34	4	〃	〃	001	19.0°	9.7+	-	口縁、体部片	
SI180カマド	34	1	土師器	坏	001	13.6°	3.6°	9.2°	3/4欠	
SK160	35	1	土師器	坏	001	13.6°	3.8°	8.6°	2/3欠	
〃	35	2	〃	〃	002	13.4°	5.1+	7.8°	底部欠	
〃	35	3	〃	甕?	003	-	-	-	底部小片	
SX013	35	1	須恵器	大甕	001	-	13.1+	-	体部片	
SX017	35	1	土師器	皿	001	16.2°	2.0	12.1°	1/2欠	
SX024	35	1	土師器	坏	001	13.2°	3.6	6.9+	底部欠	
SX027	35	1	土師器	甕	001	-	7.2+	-	口縁、体部片	
SX053	35	1	土師器	坏	001	15.2°	5.5	8.4°	3/4欠	
SX058	35	1	土師器	大坏	001	-	5.8+	9.6°	底部片	
SX081	35	1	土師器	皿	001	18.4°	3.9	16.6°	小片	
SX082	35	1	土師器	坏	001	-	1.6+	-	口縁小片	
SX102	35	1	土師器	皿	001	-	1.6+	-	口縁小片	

Tab.2 遺物観察表(3)

【単位はcm、°は復原値、+は欠損】

遺構	Fig.	番号	名称	器種	R番号	口径	器高	底径	残存	備考
SX103	35	1	土師器	甕	001	23.4°	7.0+	-	口縁、体部片	
SX116	35	1	須恵器	蓋	001	15.0°	1.4+	-	小片	
SX117	35	1	土師器	甕	001	12.0°	6.4+	-	口縁、体部片	
SX153	35	1	須恵器	坏	001	-	2.6+	9.0°	底部片	
SX154	35	1	須恵器	坏	001	12.8°	4.1	8.8°	4/5欠	
SX159	35	1	土師器	坏	001	13.4°	3.6	7.4°	5/6欠	
SX161	35	1	土師器	甕	001	26.0°	8.0+	-	口縁、体部片	
SX162	35	1	土師器	鉢?	001	-	4.0+	-	口縁片	
SX182	35	1	須恵器	蓋	001	15.0	2.7	-	1/4欠	
SX182	35	2	〃	坏	002	12.8°	3.1	8.6°	2/3欠	
茶褐土	36	1	須恵器	坏	004	11.3°	3.8+	7.7°	3/4欠	
〃	36	2	〃	〃	001	-	2.4+	11.2°	底部1/6	
〃	36	3	〃	〃	002	-	2.8+	8.2°	底部1/4	
〃	36	4	〃	〃	003	-	2.6+	10.8°	底部1/8	
〃	36	5	〃	〃	7-001	-	2.4+	9.0°	底部1/3	
〃	36	6	〃	〃	5-004	9.4°	1.2+	-	底部1/8	
〃	36	7	土師器	蓋	013	15.7°	1.1+	-	口縁1/8	
〃	36	8	〃	〃	7-002	-	2.4+	9.0°	口縁片	
〃	36	9	〃	〃	1-004	-	1.6+	-	口縁片	
〃	36	10	〃	〃	012	-	1.6+	-	口縁片	
〃	36	11	〃	皿	4-005	18.0°	1.8+	14.2°	口縁1/8	
〃	36	12	〃	〃	014	-	1.2+	-	口縁~底部片	
〃	36	13	〃	〃	015	-	1.8+	-	口縁、体部片	
〃	36	14	〃	坏	2-005	-	2.3+	-	口縁片	
〃	36	15	〃	〃	016	14.9°	2.1+	-	口縁1/8	
〃	36	16	〃	〃	4-004	-	2.3+	-	口縁片	
〃	36	17	〃	〃	3-002	-	3.5+	-	口縁片	
〃	36	18	〃	〃	2-006	-	-	-	口縁片	
〃	36	19	〃	〃	1-002	16.0°	3.65+	-	底部欠	外面丹塗り
〃	36	20	〃	〃	1-003	-	2.9+	-	口縁片	外面丹塗り
〃	36	21	〃	〃	1-001	11.4°	4.2+	-	口縁、体部1/3	
〃	36	22	〃	〃	3-003	-	3.9+	-	口縁片	外面丹塗り
〃	36	23	〃	〃	3-001	12.4°	3.2	8.2°	2/3欠	
〃	36	24	〃	〃	2-007	-	1.1+	6.8°	底部1/4	
〃	36	25	〃	高坏	2-008	-	2.0+	11.4°	脚部1/8	丹塗り
〃	36	26	〃	〃	4-006	-	1.7+	-	底部片	外面丹塗り
〃	36	27	〃	甕	5-002	18.2°	1.7+	-	口縁、体部1/4	
〃	36	28	〃	〃	008	15.9°	6.6+	-	口縁、体部1/6	
〃	36	29	〃	〃	2-003	13.0°	3.6+	-	口縁1/8	
〃	36	30	〃	〃	009	-	3.6+	-	口縁片	
〃	36	31	〃	〃	5-003	15.0°	9.2+	-	口縁、体部1/6	
〃	36	32	〃	〃	011	-	5.1+	-	底部	
〃	37	33	〃	〃	2-004	23.2°	6.4+	-	口縁、体部1/6	
〃	37	34	〃	〃	4-002	-	2.3+	-	口縁片	
〃	37	35	〃	〃	006	19.6°	4.1+	-	口縁1/5	
〃	33	36	〃	〃	010	-	4.1	-	口縁片	
〃	37	37	〃	〃	3-004	-	2.3+	-	口縁片	
〃	37	38	〃	〃	1-005	-	5.3+	-	口縁片	
〃	37	39	〃	〃	4-001	-	1.6+	-	口縁片	
〃	37	40	〃	〃	5-001	21.0°	5.5	-	口縁1/2	
〃	37	41	〃	〃	007	18.6°	4.0+	-	口縁1/5	
〃	37	42	〃	甗	4-003	-	4.7	-	底部片	
〃	37	43	〃	カマド?	2-002	-	4.8+	-	裾部片	
〃	37	44	須恵器	甕	005	-	4.0+	12.4°	底部片	底部外面叩き痕
〃	37	45	縄文土器	鉢	2-001	-	4.8+	-	体部片	早期、押型文
〃	37	46	土師器	カマド?	2-009	-	-	-	片	

Tab.2 遺物観察表(4)

【単位はcm、°は復原値、+は欠損】

遺構	Fig.	番号	名称	器種	R番号	口径	器高	底径	残存	備考
攪乱(葡萄棚溝)	37	1	須恵器	蓋	3-006	14.5	2.6	-	口縁1/4欠	
攪乱(葡萄棚溝)	37	2	〃	〃	3-005	-	1.85+	-	体部1/4	
〃	37	3	須恵器	蓋	79-003	15.6°	-	-	口縁1/8	
〃	37	4	〃	坏	11-002	11.2°	4.2	6.7	口縁1/2欠	
〃	37	5	〃	壺?	86-001	-	2.5+	-	口縁小片	
〃	37	6	〃	長頸壺	11-001	-	6.0+	-	肩部1/6	
〃	37	7	〃	鉢	2-002	-	9.0+	14.8°	底部1/6欠	
〃	38	8	土師器	坏	3-012	17.4°	4.2+	-	4/5欠	
〃	38	9	〃	〃	3-002	13.2°	4.5	8.6	口縁3/4	内面工具痕、外面手持ちヘラけずり
〃	38	10	土師器	坏	79-001	13.0°	3.4	8.2°	3/4欠	
〃	38	11	〃	皿	3-007	16.6°	1.7	12.1°	3/4欠	
〃	38	12	〃	〃	171-1	15.0°	1.7	12.4	小片	
〃	38	13	〃	坏?皿	2-001	17.0°	3.0+	16.4°	口縁、体部1/6	
〃	38	14	〃	皿	79-002	19.6°	2.35	14.7°	3/4欠	
〃	38	15	〃	坏	3-004	-	1.8+	9.7°	底部1/6	削り出し高台坏
〃	38	16	〃	〃	3-013	-	2.5+	-	小片	
〃	38	17	〃	〃	164-002	-	1.7+	-	小片	
〃	38	18	〃	甕	3-009	-	3.0+	-	口縁片	
〃	38	19	〃	〃	164-001	-	3.7+	-	口縁片	
〃	38	20	〃	〃	166-001	19.0°	6.7+	-	口縁、体部1/4	
〃	38	21	〃	〃	3-008	12.7°	7.3	-	口縁、体部1/4	
〃	38	22	〃	〃	3-010	-	5.2+	-	口縁片	
〃	38	23	〃	〃	2-003	18.4°	11.5+	-	口縁、体部1/4	
〃	38	24	〃	〃	3-001	10.2°	7.1+	-	口縁、体部1/6	
〃	38	25	〃	〃	3-011	-	5.2+	-	口縁片	
〃	38	26	〃	甌	8-001	-	4.45+	12.2°	底部1/2	
〃	38	27	〃	〃	8-002	-	9.5+	-	底部片	

Tab.3 石器観察表

遺構	Fig.	番号	石材	器種	R番号	長さ	幅	厚さ	備考
SI030	39	1	泥岩	砥石	001	5.2	3.8	1.2	携帯用、穿孔あり
SK078	39	2	砂岩	砥石	001	4.0	4.7	3.0	
SI165	39	3	変岩	紡錘車	003	4.4	5.1	0.7	未成品
攪乱	39	4	泥岩	砥石	004	7.1	5.4	2.2	
トレンチ	39	5	変岩	たたき石	003	11.8	5.2	2.7	
表土	39	6	黒曜石	石鏃	001	2.6	1.9	0.5	

Tab.4 鉄製品観察表

遺構	Fig.	番号	器種	R番号	長さ	幅	備考
SI045	40	1	釘	008	4.4	0.6	
SI070	40	1	釘	003	5.1	0.6	
SI070	40	2	刀子	004	6.0	1.9	
SI070	40	3	不明	005			
SI105	40	1	刀子	001	6.2	1.5	

Tab.5 竪穴住居一覧表

遺構番号	Fig.番号	主軸	平面プラン	南北壁長	東西壁長	カマド	屋内土壌	備考
001	5	N-18 °E	長方形	3.5m	2.4m	東	○	
005	6	N-32 °E	長方形	2.50	-	東		
010	6・7	N-93 °E	隅円長方形	3.50	2.90	-	方形1.1m×0.65m	住居内土壌あり
015	8	N-108 °E	隅円長方形	2.85	3.60	東	方形1.05×0.95	
020	8	N-7 °E	-	*1.7	*2.15	北	-	
025	9	N-15 °E	-	-	-	-	-	
030	10	N-17 °E	隅円正方形	3.10	2.90	-	-	
035	11	N-105 °E	隅円長方形	2.90	4.05	北	楕円形1.0×0.85	
040	11	N-5 °E	-	*2.65	*2.8	東	楕円形0.8×0.65	
045	12・13	N-15 °E	隅円長方形	4.00	2.65	北・西	円形1.05×0.95	
055	14	N-18 °E	略正方形	-	2.60	-	-	
070	15	N-18 °E	隅円長方形	3.90	2.50	北	円形1.6×1.3	
080	15	N-98 °E	隅円長方形	2.35	-	-	-	
100	16・17	N-97 °E	隅円長方形	2.65	*3.3	東	-	住居内土壌あり
105	16	N-91 °E	-	*2.15	1.80	西	-	
110	18	N-112 °E	-	*1.4	-	-	-	
150	19	N-10 °E	略長方形	2.05	*2.4	北	方形1.25×0.8	
155	20	-	-	*1.95	1.05	西	円形0.8×0.65	
165	21	N-21 °E	隅円長方形	*3.65	3.30	西	楕円形1.5×1.0	
170	22	N-111 °E	略正方形	3.40	3.50	西	楕円形1.1×0.8	
180	23	N-4 °E	隅円長方形	3.45	*2.65	北	楕円形1.4×1.2	

*は残存・検出長

IV.まとめ

I. 竪穴住居の形態と規模について

住居跡の平面プランは、略長方形と略正方形に分かれる。略長方形11軒、略正方形3軒である。

住居跡の規模は最大でSI035の一辺4.05m×2.9mを測り、最小はSI155の一辺2.05m×2.4mを測る。

II. 住居内諸施設について

竪穴住居内部からは、カマド、壁小溝、屋内土壌、柱穴、住居内土壌（壁際土壌）が検出された。

(1) カマド

住居跡に付設されたカマドは全て突出型であった。付設場所は、北壁面5基、東壁面5基、西壁面5基である。また、SI015とSI070は住居隅付近（コーナー部）に付設されている。SI045は、北側と西側にカマドがあり、造り替えが行われていたものと考えられ、西カマドには小型の土師器甕が倒立して支脚として用いられていた。SI020と035は、カマド前面やカマド内に灰白色の粘土が検出された。

(2) 壁小溝

調査では3例確認した。SI045の東南壁沿いと、SI070の東西壁の一部、SI170の南壁で検出した。

(3) 貼床

検出した住居跡の殆どから、床面全体より若干小さい規模で貼床を確認した。床面は殆ど平坦である。

(4) 屋内土壌（床面下層土壌）

住居内のカマド前面や床面中央部分、壁際で検出している。土壌のプランは、方形と楕円形の2種類を確認している。規模は、方形では1.05m～1.25m×0.65m～0.95mを測り、楕円形では、0.80～1.60m×0.65m～1.30mを測る。遺構埋土は、SI001では炭を含む淡茶褐土と暗茶黒土、SI035では、焼土、炭を多量に含む赤褐土、SI045とSI070は焼土を含まない黒茶土である。土壌内からは土師器甕や皿片が出土している。性格については諸説あるが、今回検出した遺構だけでは不明である。

(5) 柱穴

検出した住居跡の中で、明確に柱穴と判断できるピットは殆ど確認されず、柱が住居外へ取り付くものも存在していたと考えられる。住居の規模が小さいものは、しっかりした柱穴がなくとも柱を床に据えた形で屋根は架かると考えられ、その窪み程度のピットがSI100で確認したものではないかと考える。

(6) 住居内土壌（壁際土壌）

住居壁面に住居外へ掘り込まれるかたちで、土壌を検出した。SI010はカマドの隣（北側）に造られ、住居埋土と同じ暗黒灰土が入り、内部には土師器甕、坏片が出土している。SI100の土壌の埋土は炭と焼土が入り、土壌周囲は、赤褐色に焼けていた。遺物は、土師器高坏、甕片を出土している。甘木市宮原遺跡258号住居跡検出の土壌（註1）と類似する。性格については、宮原遺跡報告で述べられているカマドの火種置き場と考えられるが、SI010は焼土や炭、壁面の焼けが全くなく、遺構の性格については不明な点が多く、今後の課題である。

Ⅲ. 出土遺物について

住居跡出土遺物

住居跡から出土した土器の器種構成は、須恵器（坏、蓋）、土師器（坏、皿、高坏、鉢、甕、甑）であり、圧倒的に土師器が多い。特に土師器甕にいたっては出土遺物の大半を占めている。

器種別に概観すると、須恵器坏は高台が外に踏ん張るタイプと断面台形の高台が底部の内寄りに付くタイプがある。時期については各々の土器編年観の違いがあるが（註2）、8世紀前半代のものではないか。産地については、筑後市周辺地域の八女や熊本県荒尾市等の須恵器窯資料との検討が必要であろう。土師器坏、皿に関しては、住居跡出土遺物中、大半が底部外面手持ちヘラ削り調整で体部が丸みをもち、皿は口縁部が外反するタイプである。甕については特徴として、SI170屋内土壙出土甕（Fig35-4）の胴部が張るタイプと、SI020出土甕（Fig29-1）の胴部が張らないタイプに分けられ、干潟遺跡編年（註2）ではⅡ、ⅢAに属している。また、SI170出土甕は胎土に多量の角閃石を含む遺物である。高坏は住居跡から5点出土しているが、SI100の住居内土壙（壁際土壙）出土の高坏は、坏部の体部は丸みをもち、体部外面に細かいミガキが入る。坏部は古い様相を呈しており、他の出土遺物と比べると特異な遺物である。土師器に関しても時期的には坏や甕から概ね8世紀前半代に比定されるのではないかと推察される。

SX053出土遺物

今回の調査で、高台が削り出される土師器坏が出土している。筑後市内遺跡での出土例は、現在整理中であるが、若菜森坊遺跡で数点出土しているのみである。久留米市では30点以上の報告がなされており、筑後国で生産された食器として位置づけられている。今回のSX053出土遺物が1点のみであった為、共伴する遺物がなく、時期については不明であるが、久留米市下見遺跡土器編年（註2）では8世紀後半に出現し9世紀初めには消滅する土器として報告されている。今後、筑後市周辺地域での出土状況や、実年代を与えるにあたっては共伴する遺物等の比較検討が必要であろう。

Ⅳ. 前津中ノ玉遺跡

今回の調査では21棟もの竪穴住居跡を検出し、昭和60年度調査（註4）から検出された13棟の住居を合わせて34棟もの竪穴住居を数える。8世紀代に前津地区一帯の丘陵上には一定の集落があったことが窺える。住居の規模について北部九州では6世紀後半以降の竪穴部の縮小化傾向と、それに伴う煙道部の伸長化（註3）が当遺跡でも窺い知ることができた。その中でも特にSI150については小型の竪穴住居（竪穴状遺構）で、カマドが付設されており、住む空間として機能していたと言えるか疑問であり、炊事場的施設と考えることもできよう。また、筑後市内遺跡では竪穴住居から掘立柱建物への移行期が未だはっきりせず、掘立柱建物に伴う仮屋（小屋）的施設とも捉えられない。今後の前津地区の調査に期待するところである。

参考文献

- （註1） 伊崎俊秋、児玉真一、武田光正『九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告書-17-』1990 福岡県教育委員会
- （註2） 田崎博之「干潟遺跡」『福岡県文化財調査報告書第59集』1980 福岡県教育委員会
富永直樹「下見遺跡」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財報告書第4集』1985 久留米市教育委員会
山本信夫 古代の土器研究会第1回シンポジウム資料 1992
山本信夫「北部九州の土器」『日本土器事典』P.742～750 1996 雄山閣
- （註3） 小田和利「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』1994 文化財学論集刊行会
- （註4） 川述昭人「前津中の玉遺跡」1987 筑後市教育委員会

PLATE

遺物右下の数字は、
挿図番号



東側調査区全景（西から）



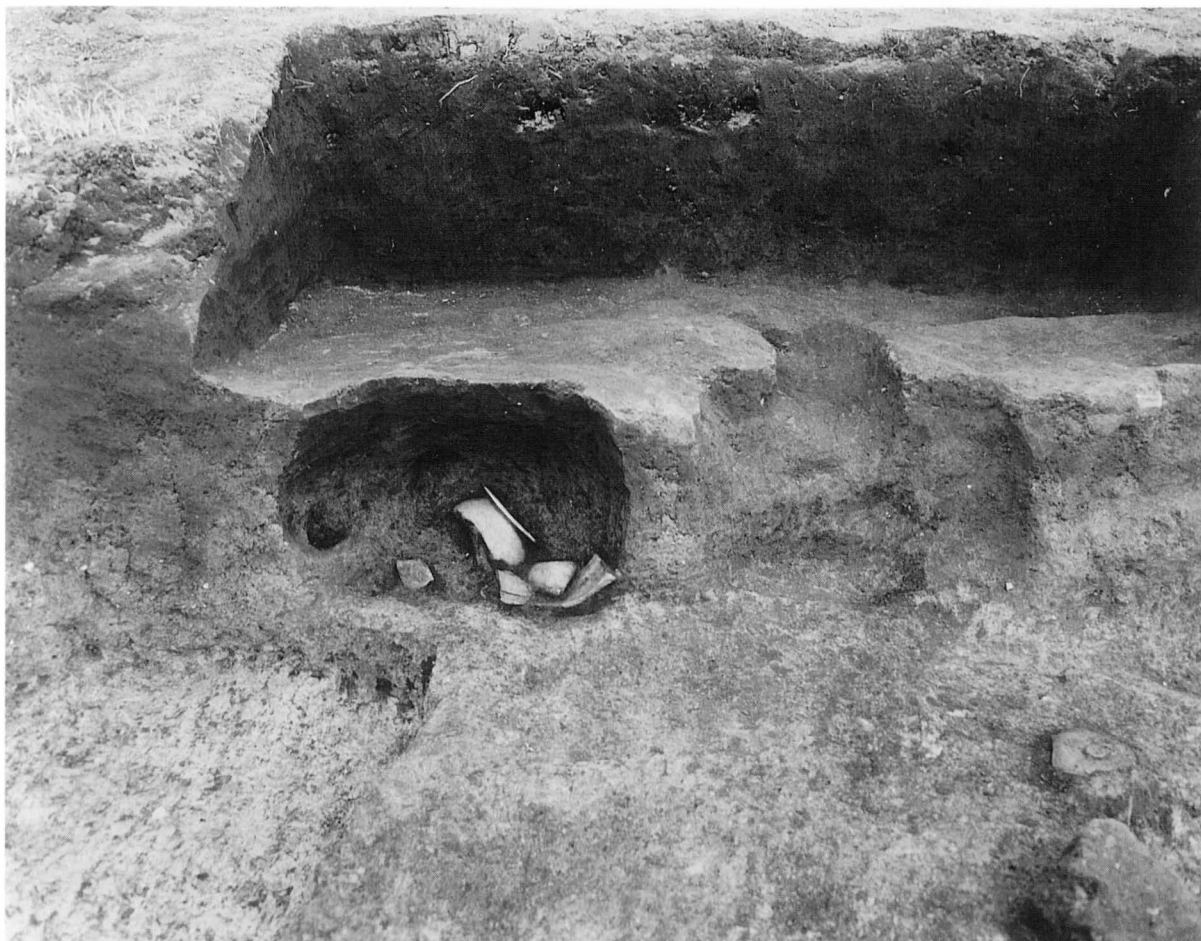
西側調査区全景（西から）



SI001 検出状況 (南から)



SI005 検出状況 (南から)



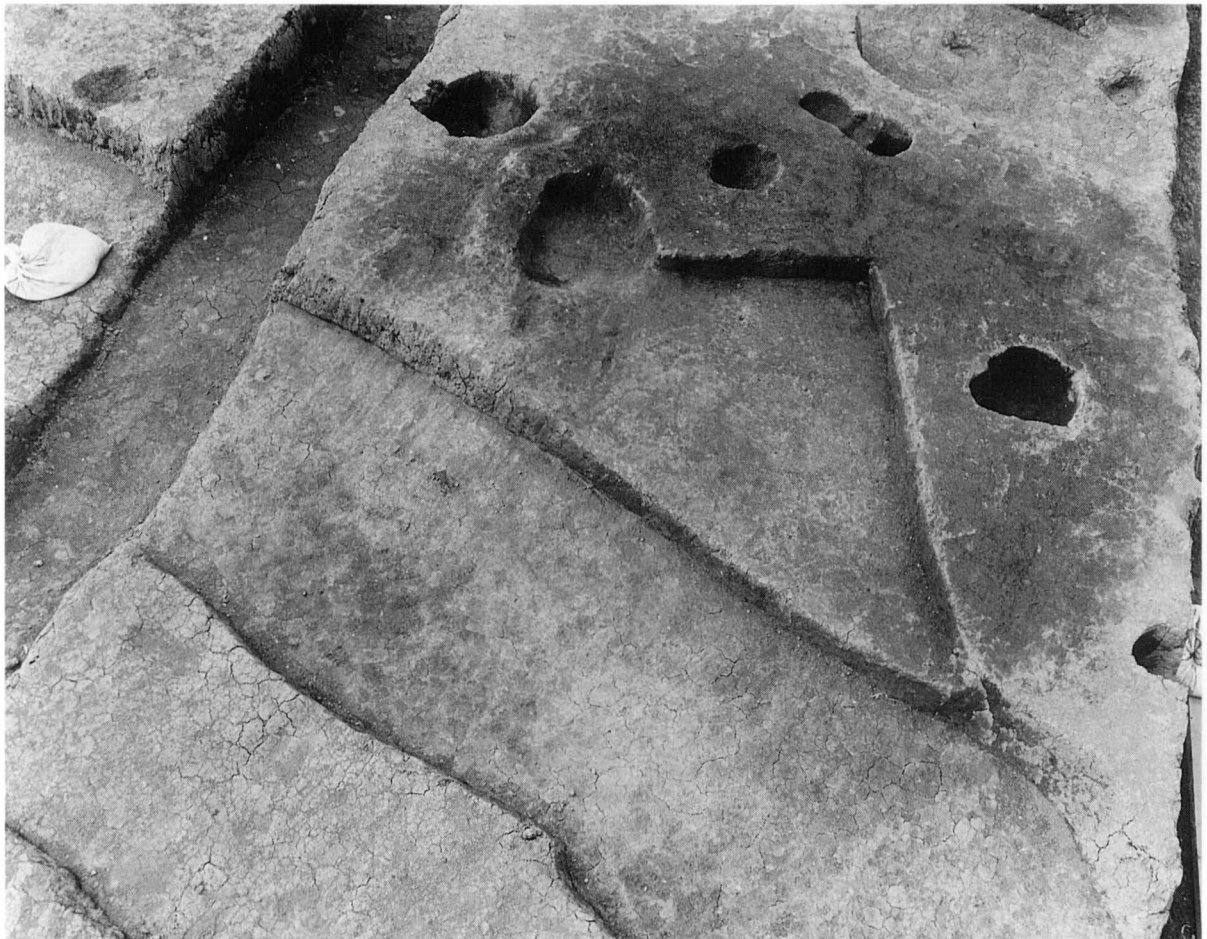
SI010カマド・住居内土壙検出状況（西から）



SI015検出状況（南から）



SI020検出状況（南から）



SI020完掘状況（南から）

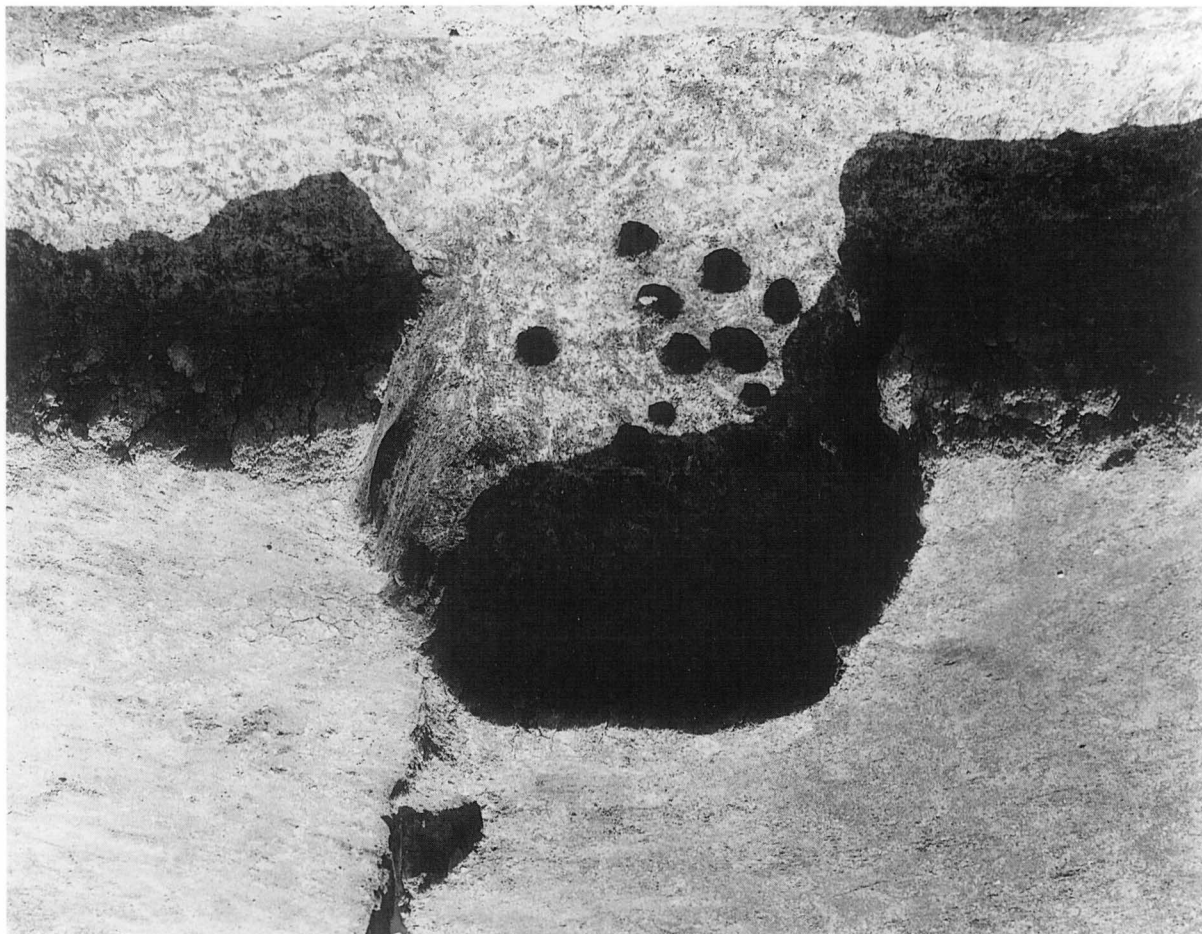


SI030完掘状況（西から）



SI045検出状況（北から）

SX050完掘状況 (西から)



S1045カマド完掘状況 (南から)





SI100・105定掘状況(北から)



SI100・105検出状況(北から)



SI100完掘状況（北から）



SI100住居内土壙完掘状況（北から）

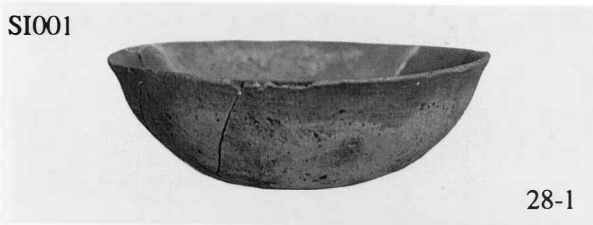


SI170完掘状況（南から）



SI180完掘状況（東から）

SI001

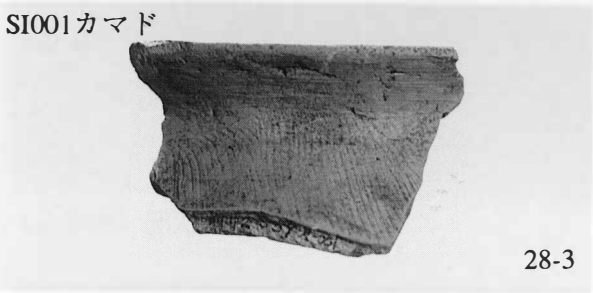


28-1



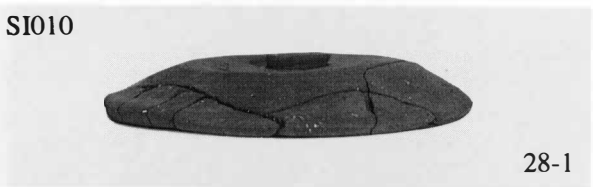
28-2

SI001カマド

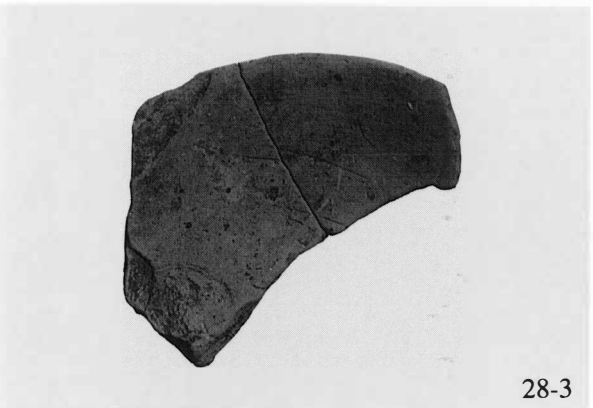


28-3

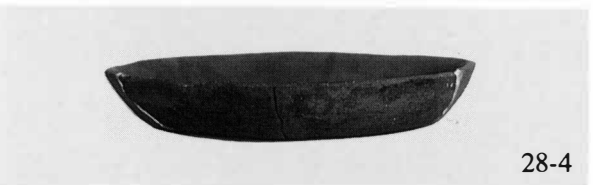
SI010



28-1

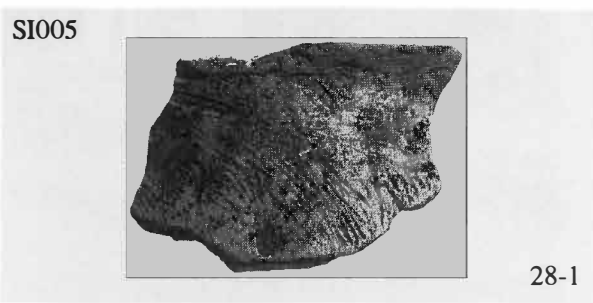


28-3



28-4

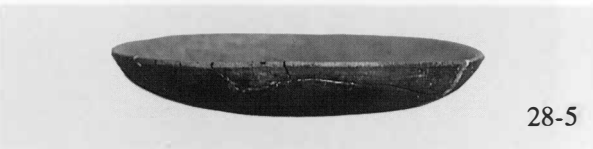
SI005



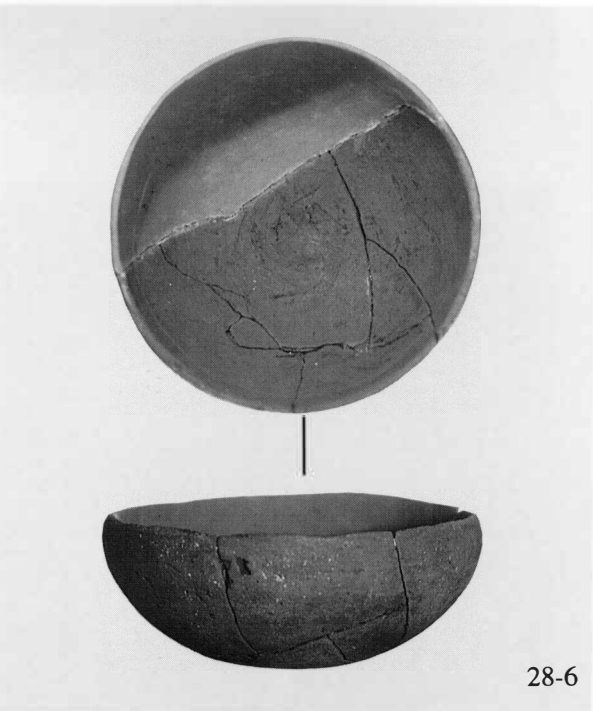
28-1



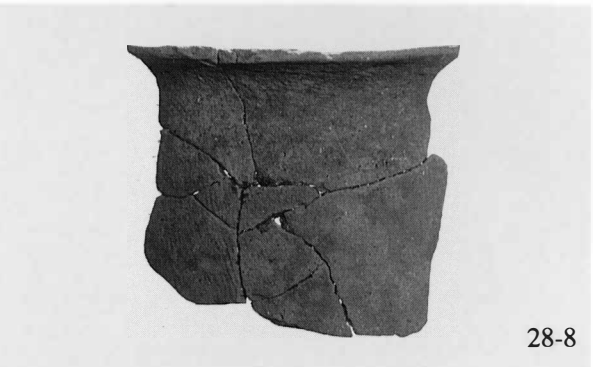
28-2



28-5



28-6



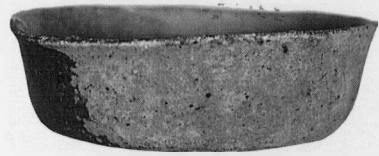
28-8

SI010



28-9

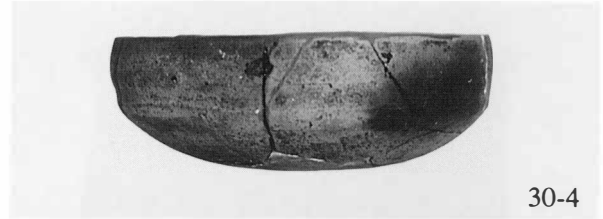
SI035



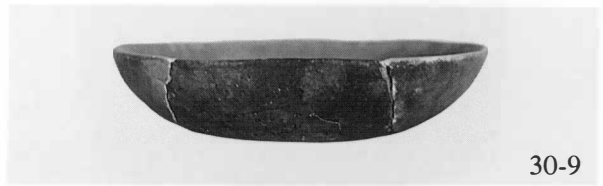
30-2



29-11



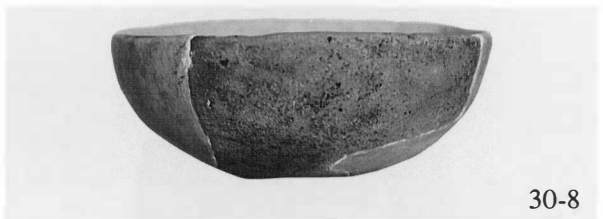
30-4



30-9



29-12



30-8

SI010住居内土壙

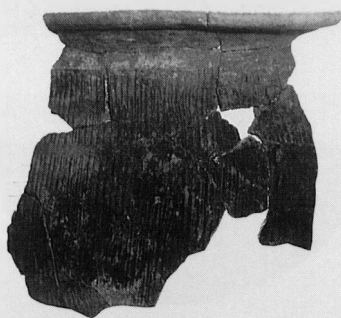


29-14



30-14

SI020



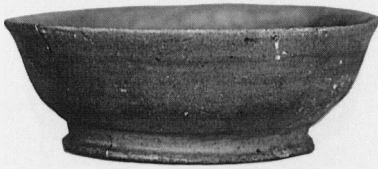
29-1

SI035屋内土壙



30-18

SI040



31-1

SI045

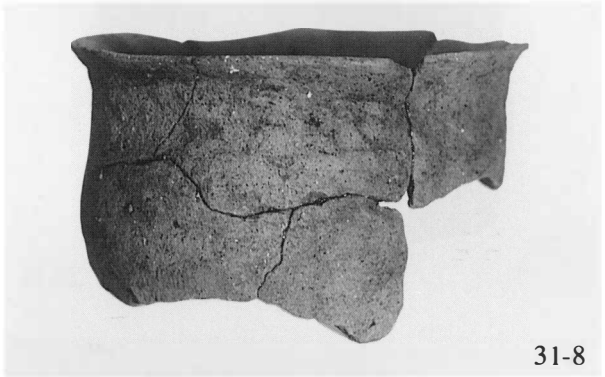


31-6

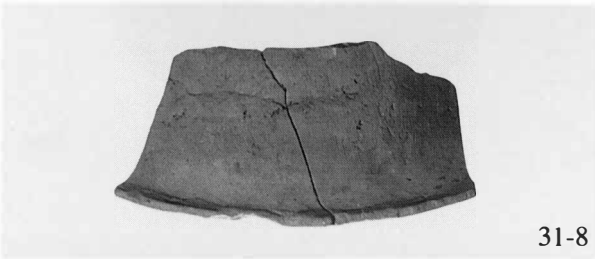


31-7

SI045西カマド

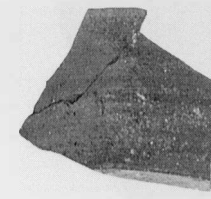


31-8



31-8

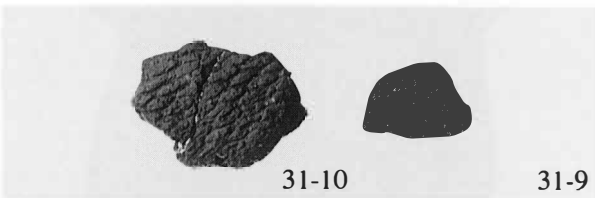
SI070



32-1



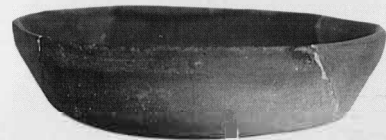
32-2



31-10

31-9

SI080



32-2

SI045

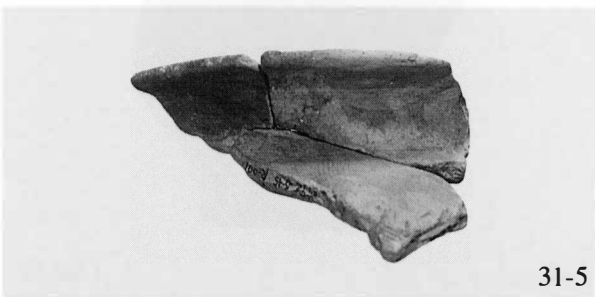


31-1

SI100



32-3

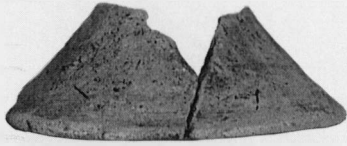


31-5



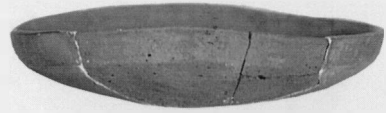
32-5

SI100

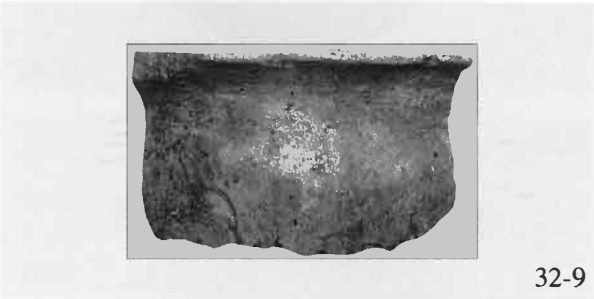


32-8

SII10

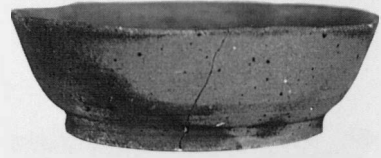


33-2

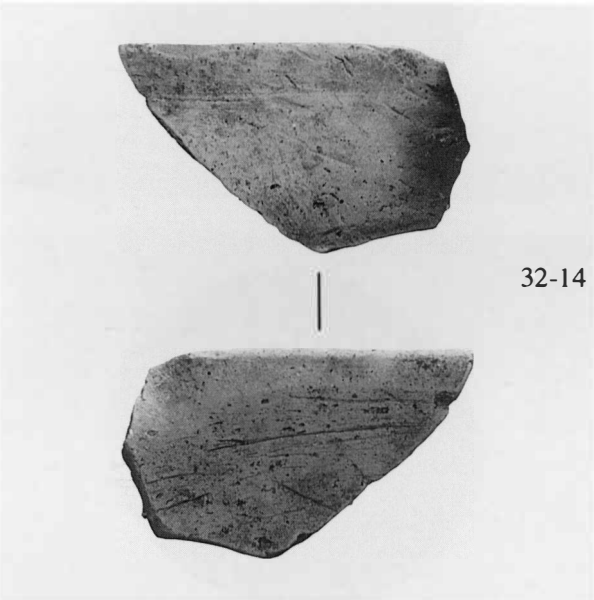


32-9

SII55



33-1

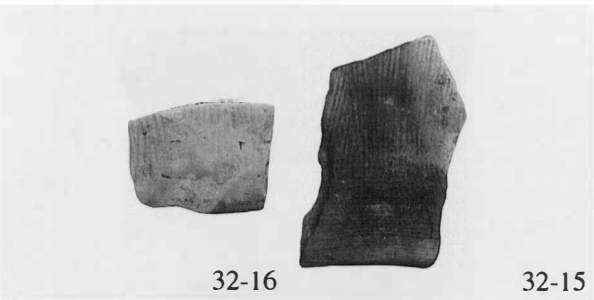


32-14

SI170屋内土壇



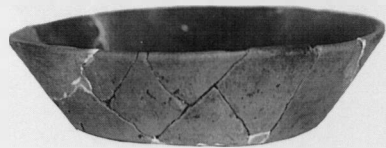
34-4



32-16

32-15

SII80カマド



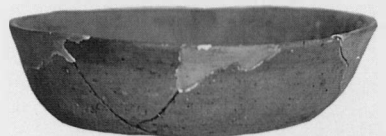
34-1

SI100住居内土拵



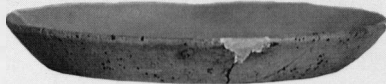
32-19

Sk160



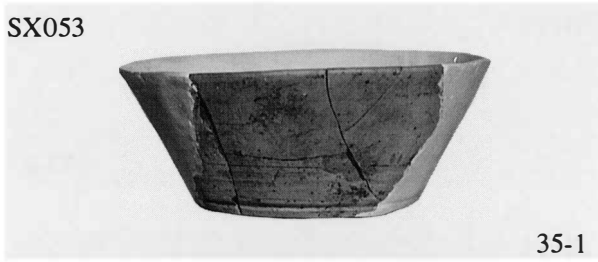
35-1

SX017



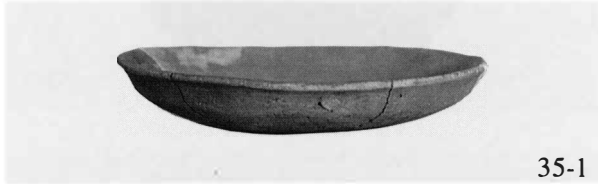
35-1

SX053



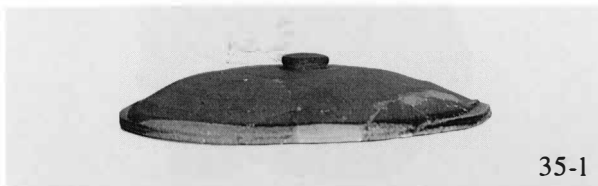
35-1

SX081



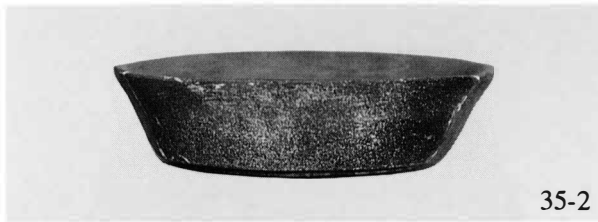
35-1

SX182



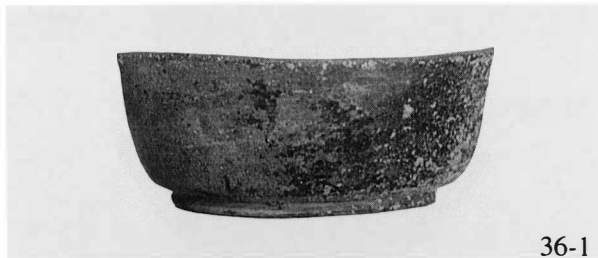
35-1

SX182



35-2

茶褐土



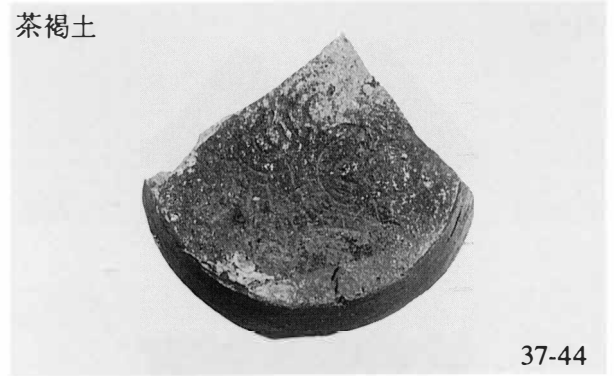
36-1

攪乱



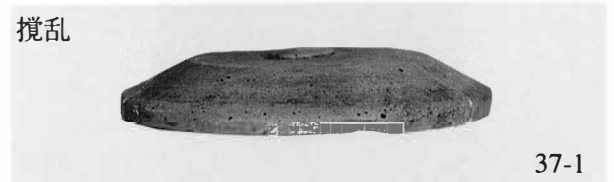
37-7

茶褐土

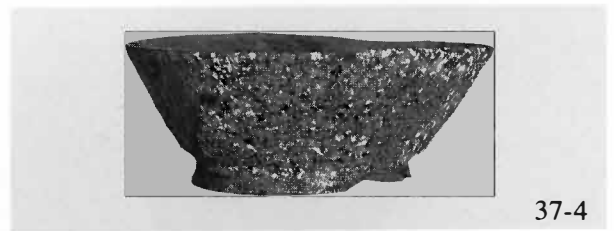


37-44

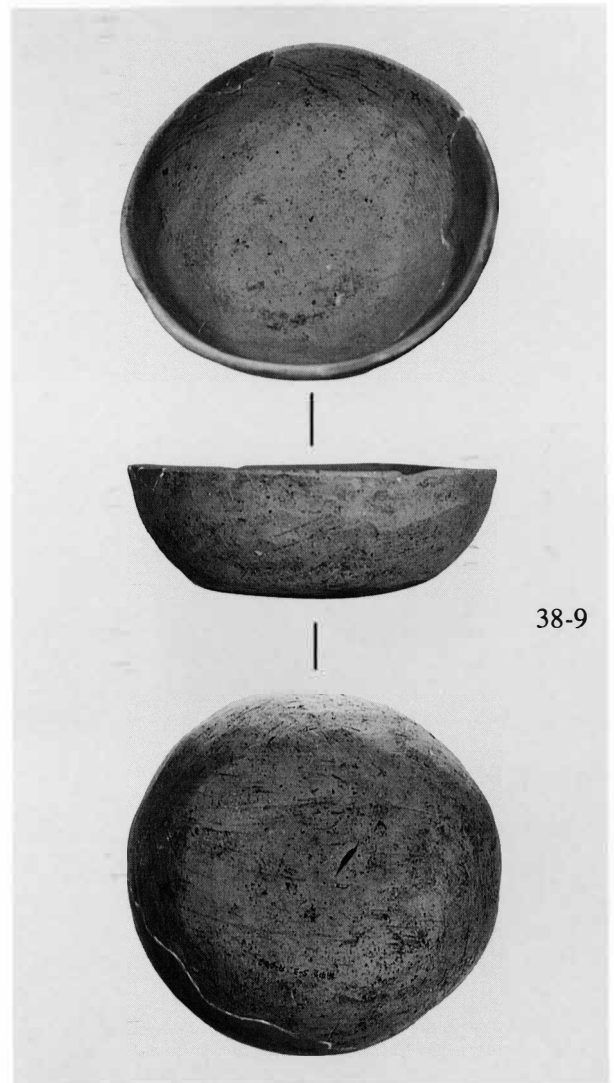
攪乱



37-1



37-4



38-9

前津中ノ玉遺跡Ⅱ

筑後市文化財調査報告書 第22集

平成11年3月

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 山下プリント

福岡県筑後市大字熊野1848-6